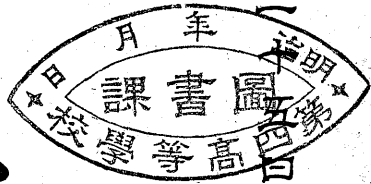


明治四十三年十二月二日發行

(非賣品)



北辰會雜誌

第五拾九號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第五拾九號目次

論 說

- 赤穂義士論……………武部進
- 偉大なる作品……………成川武男
- 悲哀なる自覺……………山本勇
- 病間録を讀む……………夜石人

文 苑

- 帆影……………竹柏野葉三
- 由松……………薄穂歌
- 獨白の塔……………まさな
- 五味溜のさめめ……………遊芳
- 塾生活……………S生
- 四高和歌會詠草……………いさを
- 散文詩二篇……………を
- 四高俳句會句鈔……………

漫 言

- 軍容成らんとす……………
- 思想界幅略深……………
- 存在の意義……………
- 逝く秋……………
- 鈴木穂花兄に呈す……………
- 一事一言……………(以上宗玄)

雜 報

- 叙任辭令……………
- 卒業生諸君を送る○卒業證書授與式○始業式○新入生諸君を迎ふ○新入生諸君歡迎會○行軍記事○第十八回陸上運動會記事○時習寮より……………
- 講演部○劍道部○端艇部○遠足部○音樂部……………
- 北辰會役員○明治四十二年度北辰會費決算書……………
- 寄贈雜誌……………

新任之辭

選ばれて任に當る、自ら不敏菲才を顧みれば唯之れ重任を瀆さむを恐るのみ。
 瞑目久しうして渾沌たる思潮の轟きを耳すれば我が食はうまからず、我眠り安からず。迷雲排ふに由なく、我が願へる光何處より出づべき乎。思ふて茲に至る筆亦輕からず。
 然れ共責任は遂に避くる能はざる也。望を滿身の力に委ね唯言はむのみ書かむのみ。而して諸君の鞭撻を待たむのみ。一言以つて新任の辭となす。

明治四十三年十二月

雜誌部委員一同

北辰會雜誌第五十五號

論 說

赤穂義士論

武 部 進

(一)

我國固有の倫理の大半の君臣の情義に存することは苟も多少國史に通じ、民俗を研めたる者の等しく首肯するところ也、かの「親子は一世、夫婦は二世、主従三世の契」といふ語よく此の間の消息を傳へ得て遺憾なしとす、然るに往々「孝は百行の本也」てふ支那の格言を携ゑ來つて直ちに孝を以て我國の倫理の源、百行の本也と斷せんとする者あるに至つては言語同斷の沙汰と言ふべし、何となれば支那に在りては君に背くとも親に従ふを以て善の大なるものとなすに反し我國に在りては親に逆ふとも君に忠ならざるべからずと教ふれば也、否な君に忠なるはやがて親に孝なる所以なりと説くが如き忠孝一致説出で、民心に投せんとさへするに至る、支那の語に「親老ゆれば録を選ばずして仕ふ」とあるは即ち親の髮膚を養ひ、心意を安んせんが爲めには禄を選ば

ず、主を問はずして仕ふといふ、親あつての仕官也、主君也、主君有つての孝にあらず親にあらず、豈にいかでか此等の徒に親を捨て、も君に忠たれと勸むるを得んや、かの孟子すら「聞誅一夫紂矣、未聞弑君也」、といひ譬へ君たりとも仁を賊ひ善を賊ふに於ては斷じて容赦すべきにあらずとなせり、之に反して吾國に於ては大に然らず「君君たらすとも臣臣たらざるべからず」主君は如何に暗愚なりといふとも、兩親如何に老衰せりと雖も、君の爲めには身を鴻毛の輕きに處し、親を弑し子を殺しても敢て辭せざるところ也、即ち主あつての親也、忠あつての孝也、斷じて親あつての主にあらず、孝あつての忠にあらず、かゝればこそ「大義親を滅ぼす」てふ格言も出で、あつたれば忠臣義士にして直諫に倒れ、親子を滅ぼすにも至れるなれ、かの仙臺萩の白川頼母を見よ、又た其の妻淺岡を見よ、彼等共に命を惜しからざるにあらず、子が可愛からざるにあらず、然れども命より子より貴き或物を知るが故に彼等は其命を捨て其子を殺せし也、その或物とは何ぞや、利か、あらず、名か、あらず、主君伊達綱宗其の人也、主君は暗愚なりき、然れども彼は之を恨まず、親には勘當を受けたり、然れども彼は之を顧みず、唯だ「君」の爲めに倒れ、臣の務を尽したる也、實に「すまじきものは宮仕へ」、忠義も亦た難き哉。

中華民國元より吾國民に比して遙かに君臣の情義を輕視すと雖も、猶ほ幾分其取るべきものなきにあらざれども、西洋各國に至つては愛國てふ精神こそあれ、忠君なる精神皆無なりと言ふとも過言にあらじ、忠君はやがて愛國なれども、愛國必ずしも忠君ならず、彼等が往々國家衆民の爲めには國王をさへ斷頭台上の露と消えしむるが如きは吾國民の夢にだも見る能はざるところ也。

之を要するに支那は「夫婦は一世、主従は二世、親子は三世の契」とも見るを得べく、西洋諸國に至つては則ち「主従は一世、親子は二世、夫婦は三世の契」とでもいふべきか、吾國のそれに比して今直ちに義兄弟を定め難しと雖も吾、國民性に合するものを求むれば則ち吾國のそれに若くなきは勿論也。

(二)

次に然らば如何にして吾國民はしかく君臣の關係を重んずるに至りしかを見るに元より其據つて來るところ多々あるべしと雖も卑見を以てすれば第一は皇室に對する觀念が延いて一般主君に及びしこと、にて吾等は萬世一系の皇室を戴き、二千載の古へより連綿として尽きせぬ五十鈴川の御流に濕ひ、皇室は天孫の嫡流として飽く迄も威嚴を保持せられ、吾等が本家として仁慈至らざるなく、惠の露に起き伏す青人草は日を経、年を閱するにつれて益々皇室の威嚴に畏怖し、皇宗の慈惠に感泣し其心延いては粉身の忠勤となり絶對の服従となり、此の觀念長く且つ深く國民の腦裡に印象され遂には一の習慣となり、國民性となるに至れるものと思はる、其何時頃より國民性となり、習慣となりしかは恰も吾人の習慣か何歳の時より習慣の形を取るに至りしかを知る能はざるか如く知る能はざれども恐らく遠き神代に發し、古事記や日本書記に表はれたる事實の起りし時分には既に確固たる習慣性となり居たる者の如く思はる、然れども吾人の習慣も回を重ね時を経るに従つて愈々堅固となるが如く我國の習慣性も年を経代を経るに従ひて愈々益々確固となりしが如く思はる、其證據には太古に有りては天神の一族たる饒速日命さへ嫡流たる神武天皇

に對して弓を引き、又た下りては其目的こそは達し得ざりしなれども、かの弓削道鏡の如き皇位を侵し奉らんとする者さへありしに反し、漸次下りて足利時代に至つては逆賊尊氏すら征夷大將軍を以て満足し、近代に至つては皇室に對して指一本指す者なきに至りしが如き、能く其經過發達を示すものにあらざるや。

かく觀じ來れば吾國民の忠君の精神の遂に一の習慣となり國民性と成るに至りしことを知るに難からじ。以上述ぶるところは悉く皇室のみに對する考へなれども皇室に對する忠勤服従が既に一の國民性となりし以上は占めたるもの也、今度は其仕ふるところ譬へ皇室にあらずとも苟も主と呼び君と崇むる以上之が爲めに忠勤を勵み、身命を賭することは人臣たる者の當然の務めなりと思ふに至りさてこそかくは君臣の間柄を重視するに至りしなれ、而して此の精神は實に武士のみに存するにあらずして町人百姓間にも歴然として其存在を認むるを得るに至つては愈々國民性となりしことを證するものならずや。

第二は祖先を崇び、家名を重んずるより來りしことにて吾國人の祖先を崇び家名を重んずる事の甚だしきは到底他國人の企及し得るところにあらず「先祖の祭を絶つ」「宗廟に血食せず」てふ語は如何に痛切に吾國民の胸に響くかよ、而して吾國民の祖先に對する考へは全く生ける親に事ふるが如く祖先の理想とせしところ飽く迄も維持し、完成するを以て祖先に對する絶大の孝行なりと思へり、而して其祖先が代々皆一定の主君に仕へて恩恵に浴し忠勤を勵みし以上吾もその主家の安穩を祈り繁榮を計るは是れ祖先の理想とせしところを完成する所以にして子孫たる者の當然の

義務と思へり、故に若し家に不孝の子あり孫あらんか其主人たる者の苦衷や如何に、「先祖の位牌に對して濟まぬ」實に死すとも死に切れざる思ひする也、斯くの如く主家に忠義を尽すことは實に自己一身の爲めのみにあらずして併せて又た祖先に對する孝行となる也、否時に依りては單に先祖が莫大なる御恩に與りしといふの故を以て直ちに主命に赴く者さへあるに至る、謠曲「仲光」にある頑是なき一介の孩兒幸壽すら「情は人の爲ならじ、今此きはの御命に代り申さすは弓矢の家の名ぞ惜しき」と健氣にも笑つて主の身代はりに死せしが如き其最もなる者に屬す、又た干戈將に接せんとする早急の際尙は大音聲に名乗りを上げて「吾こそは桓武天皇九代の皇胤何某が何代の孫云々」と恰も一篇の系譜を讀み上ぐるが如くなるものは一方に於ては敵の荒膽を取るは勿論、一方にては祖先を思ひ、家系を思ひ、かゝる忠義の血を受け、かゝる高貴の家に生れたる以上忠義せずして祖先の顔にかゝり、勇敢ならずしては家の名折れとなるてふ一の自警なりし事は明か也、吾國人の祖先を思ひ、家名を重んずる精神は既に上述の如し況んや胸底深く忠義心のコビク着きをるに於てをや、忠勤ならざらんと欲するとも豈に得んや。

終には主君の臣下を待つこと頗る優渥なることにて成る程吾國には古來君臣の義定まり整然たる秩序あり、階級ありて一ヶ滔々たる貴族國なれども、君と臣、主と従との間には頗る親密なる關係ありて君は臣を待つこと子の如く、主は従を見ること孫の如く愛憐至らざるなく、寒夜御衣を脱して民の疾苦を憫れしを始めとなし、加賀見山の尾上が下女のお初を勞りて「そなたの爺御も武士と聞たが世が世ならざるの様な御奉公も仕やる筈を町人の娘のわしが遣ふといふは嘸やさぞ

心うくも思やらふが、とにかくに人は時節を待ち花咲く春を待つのが肝心」と言ひしが如き、かの西洋人の將に馬車に乗らんとするに當り靴のまゝにて奴婢の肩を踏臺となすが如き殘忍なるに比すれば佛と鬼位の相違に留まらざる也、人生兎角現金なる者にて愛さるれば悦び憎まるれば恨む、君常に臣を視ること手足の如くなるに木石ならぬ臣たる者いかでか君を視ること腹心の如く忠勤ならずして可ならんや、況んや忠義心か一の習慣性となり居るに於てをや、況んや先祖數代同家の恩顧に浴したるものあるに於てをや。

(三)

先般澁柿園氏の談として「淺野長矩には大野とか藤平とかの侍臣のみが用ゐられて大石は常に斥けられて居たといふことから見ると、良雄の復讐は武士道即ち一種の習慣より來たものではあるまいか」といふ意味の文句に接せしが余輩も之に「同感」を叫ばざるを得ざる也、

何となれば良雄は時々長矩の勘氣に觸れ閉門謹慎は常の如くなりしといふに係らず尙ほ且つかゝる快舉を敢へてせし所以のものは將に余輩の上述せし第一の習慣性と第二の祖先尊崇の精神との二より出でしものと見得べく、而して武士道即ち一種の習慣とは正義忠義の信念と祖先家名の觀念とが其の精髓をなせば也、然れども余輩つらく思ふに大石を以て雪に一種の習慣に依りてかかる大業を敢えてしたりと言ふは少しく彼を見縊りし觀察にはあらざるか、否なそれ丈の理由を以てしては余りに其結果の大に失するなきやを怪む、古來吾國の武士は名譽を重んじたる事の甚だしきは事實なれども「名」の爲めに忠義をせしと言ふは却つて最負の引き倒しにて多少武士の

評價を失墜するものにはあらざるか、忠臣が主君の爲めに直諫す、利の爲めか、名の爲めか、皆然らずして唯「一」に主の爲めにして「併せて名の爲め」といふが如き二或は三にてはあらざる也、然るを後世の學者文人は自己の現金主義を根底として武士の心中を臆測し或は名の爲めとし或は恩に報いん爲めとす、妄も亦た甚だしといふべし、古來眞に忠義の臣は譬へ君の寵遇を受けずとも否な却つて憎しみを受くることありとも決して君を袖にすることなく君を恨み奉ることなく、却つて何時迄も君の短慮暗愚を悲しみて潜然として獨り泣く者也、況んや佞臣讒者の君を左右する者あるに於てをや、少しも君を憎まずして恨を君側の奸に及ぼす、近く長州藩の入京の如き人の能く知るところ也、尙ほ一步を進めたるに至りては菅公の心坦然として配所の月を賞し、秋夜君恩に咽ぶが如き眞に忠臣の鑑といふべし、今大石に有つても或は菅公の如き大度量はなかりしとするまでも長州藩士や白川頼母位の忠義心は充分に有したるべし、大石は其名の如く大なり、吾等御同様の如く頭を打たれては怒り、巧言令色にホク／＼者たるが如き小にはあらざりき、大石豈に君寵如何を意に介するの人ならんや、忠臣の心情之を解剖すれば利か名か將た恩か否な到底之を研めんと欲するとも得べからず、そは恰も親の子を思ひ、子の親を慕ふの情が利にも名にも將た恩にもあらざるが如し、實に人間自然の情なり。

(四)

頃しも元祿十四年彌生中の四日、勅使幕府に參向の折柄、赤穂荻谷五萬三千石の城主淺野長矩は所謂「肝煎る役目」仰せ付けられ、公事をさ／＼怠りなかりしに又候有財餓鬼吉良義央の辱しめ

を受け、積る恨みは一時に破裂し、殿中を顧みばこそ、後難をも恐ればこそ、矢庭に吉良を見かけて切り付けしに情を知らぬ梶原三兵衛、「スハ一大事と言ひも敢えず長矩を後より抱き止めたるばかりに」「遺恨十年磨一劍、流星光底逸長蛇」、憎さも憎き義央は九死の中に一生を得て猫の前の鼠か平蜘蛛の如く漸く其場を脱れたり、嗚呼長矩の無念や如何に、死する今はの際までも片時忘れ給はぬは唯だ此の一事なりし也。

長矩性來如何に賢明なる寛量なりとするも朝に金殿玉樓に侍し、夕に紅燈綠酒を呼び、世の荒風に吹かれしことなく、人の殘忍に泣きしことなき一介のオボコ大名のみ、今底意地悪しき爺さんの翻弄に逢ひ嘲罵を受く、豈に憤然たらざるを得んや、況んや彼は性來短氣なり狷介なりしといふに於てをや、それもよし彼は自分の短氣に任せ狷介に訴へて事を輕々に處せしといふならば彼大に罪ありと雖も彼は充分に自分の短氣狷介を自覺し燃え立つばかりに腹の立つ場合にも「イヤイヤこゝが辛抱だ」と何回となく何回となく、自らを責め自らを叱り、出来る丈の克己はせし也、然るに今日萬座の中にて又しても凌辱を受く誰か又た黙々たるを得べき、彼は小なりと雖も一國一城の主也、従つて其れ相當の面目あり体面あり、其体面を維持し面目を汚がさうらんと欲せば須らく時には他を殺すも可なるべく又た身を滅ぼすも可也、此に至つても尙莞爾として微笑を漏らすが如きは白痴にあらずんば仙境の人か、苟も常識ある者の斷じて容赦すべきところにあらず、譬へそは殿中なりとも、何處なりとも、然るに後人切りに其短氣を責むると雖もそは冷靜なる腦髓より割り出せし考にして憤怒の一刹那に同情するとき誰か長矩の行爲に首肯せざるものぞ、

否な長矩は短氣なりと罵らば罵れ、狷介なりと笑はゞ笑へ、そは赤穂士人の主君に對する忠義心と、寢覺にも現にも忘るゝ閑なき復讐心とには些の影響をも與へざる也、彼等は如何に世人に笑はるゝとも又た復仇が道徳上善なるか惡なるかは決して問ふところにあらず、夜の寢た間も忘る能はざるは唯だ殿の無念の最後なりし也、吉良上野の白髮首なりし也、嗚呼一樹の蔭に宿り一河の流を汲むも他生の縁と聞く、況んや君と生れ臣と産るゝはヨク／＼深き因縁にあらずや、朝には一合取つても侍らいやと大道を威張り散らし、夕には樂しき哉膝を容るゝの地に微酒を呼ぶも皆之れ殿のお蔭ならずや、蒲生氏郷曰く「限りあれば吹かねど花の散るものを、心短かき春の山風」今赤穂三百有八人の士は時失ふ目なし鳥、寄る邊渚の捨小舟取り付く嶋も泣くばかり、荻谷城下は一時燈の消えし如く或は妻子相擁して泣き、兄弟相顧みて泣く、實に雨を帯びたる夕の花、雲に銷さる月に似て何時愁眉を開くべしとも見るざりけり。

(五)

古來吾國人の腦裡には加害者を殺さゞれば被害者の魂が浮はれずてふ一種の信仰否な迷信あり従つて仇討ちなるもの盛に行はれたる也、是れ元より今日より見れば馬鹿の骨頂なれども群雄割據の封建時代にありては若し加害者にして他藩の領内に潜伏せんか殆んど罪せらるゝ事なきか如き有様なるを以て子は親の爲め、妻は夫の爲め、臣は主の爲め仇を討つて亡靈に浮ぶ瀬を與へんとするは人間自然の情なり決して迷信とのみ貶斥し去るべきにあらず、此赤穂士人の腦裡にも同

じく此の迷信の印銘するありて「己れ仇、上野」てふ觀念は始終胸裡を往來せし也、然るに其當の敵たる吉良上野は喧嘩兩成敗の東照の掟にも漏れて何等處分を受けざるのみか、長矩に對して何等抵抗の態度に出でざりしは殊勝也とあつて慰問の御言葉を忝うし、城の狐、社の鼠、時を得顔に榮ゆるを見ては赤穂士人たる者誰か亦た血湧き肉躍らざらんや、之れ士人の復讐心を強からしめし原因の一也。

然れども赤穂には向ふ見すの猪武者のみにあらずして遠慮深謀の大石あり吉田ありて亡き主君のみが主君にあらず後に残れる御台所も亦た主君なり、此の上は主人淺野家の宗廟の絶えざる様御舍弟大學頭長廣の御家相續を幕府に歎願せんのみと百方手を尽し思を凝らせしに猛り狂へる荒鷲の犬公方には一も二もなく不届千萬とあつて却下せられ、唯だ一途の光明と望みし此の歎願も今は空しく水泡に歸し果て、望みの綱も切れ切れて波に漂ふ笹舟のこの上は唯だ天地の加護に任せ最後の手段に出づるの外策なきに至りし也、是れ復讐心を強からしめし原因の二也。

(六)

大恩受けし主に離れ、恨み重なる吉良は榮え、殿の御家は斷絶し、人に捨てられ世に見離され苦に苦を重ねし人の子が最後に爲さんと欲するところのもの決して察するに難からざる也、即ちかくなる上は運を天に任せ、命を地に委ね人の死力を尽すの外途なき也、嗚呼赤穂義士が夜中人家に侵入し人命を斷たんと決心せしものソモ暴か、非か將た是か、吾今速かに之を斷すべからざる也、「君辱しめられて臣死す」、赤穂人士全く世より繼子扱ひにされ、する事爲すこと弱の嘴と喰

ひ違ひ、右に搖られ左に振られ、望みといふ望は悉く切れ果て、茲に翻然として復讐を決す、其心情を察する時轉た同情の感禁するに由なきものあり。

然れども噫々然れども、「慷慨死に就くは易く、從容義に赴くは難し」人は一時の情に動き易くして、永遠の義に臆病也、赤穂の城下主君の訃音到りし暫らくは此の世の色も見えざりしが一日と過ぎ二日と暮らす中、人の心の變り易く「腹を切れば痛い」と感じては頓に命を惜しまれて妻子の情もなか／＼に忘れ難く遂には復讐などとは天下の法に背く不正の行爲也となして次第に手を引く者多くなり、第一回の會議にはあつばれ城を枕と息き卷きし剛の者も二回目には遂に其姿を表はさずなりぬ、嗚呼時は將に是れ陽春三月の候、野に山に花笑ひ鳥謳ふ歡樂の日なるに、此處赤穂のみには空寒き秋風のみして世は澆季なりとぞ思はれる。

然れども之れ無理かは時は元祿の盛世、天に五雨十風の甚だしきなく、人皆鼓腹擊壤の樂に慣れ、世道は弛廢し人心萎微し、子は親を凌ぎ、妻は夫に従はず、臣亦た君に忠ならず、かゝる時に生れ逢ひたる赤穂士人に對し悉く忠勤に死せんことを求むるが如きは或は少しく無理なる注文にはあらざるか、さはさりながら小人遂に濟度し難し、僅々露の命を惜しみが爲め死に優る耻を受け、人に笑はれ世に嘲られ「獄卒め」「魔王め」、追從武士と罵られ、それで自分には満足を得らるゝかと言ふに寢ては夢に、覺めては現に、始終亡君の姿が目前にチラつき、呵責の鬼の責苦を受け、三界にすら身を寄する處もなく懊惱し煩悶す、如何に自業自得とは言へ、亦た何たる痴態ぞや。

(未完)

偉大なる作品

成 川 武 男

我は意志の本体なり。我を捨てるは自己の意志に些の敬意をも拂はず、やがては自己の存在に微塵の顧慮をも投せざるなり。故に我を捨て、事を成すは事其の者に盡すのみ、欲念と云ひ、情念と云ひ寸分の影をも翳するの余地なし。我を捨てるは人にありて尤も大なる決心なり。

此の大なる決心に出達せる人の事業は偉大なり。フォンテンブローの杜蔭に自然の光彩を認め得て時代の拘泥に慊らずと思ひし時ミレーは奮然として新時代を導かんとせり。彼の見る處は眞なり、時代の固守する處は虚なり、其の振ふ筆端は直に自然の胸裡に觸れぬ。茲に於てかミレーの我は即宇宙の我なり。時代は擧げて彼を嘲笑せり、只に嘲笑に止まらず、遂には一片のパンをすら彼等の目せる背教者に吝みて彼の生命を絶たんとせり。されどミレーは其の筆に背かず、依然として理想の影を追ふ。一切の我を捨て、眞と一致せる時に死も其の途を遮る能はず。やがては新時代の標徴として彼の作品は沈湎せる佛國の書界に一道の光明を齎しぬ。

ミレーを生みたる佛國の美術家は白金の白きを引く一筋の糸の如し。或る時は黄を染め、或る時は赤を點す。されど一度沈滞の懷疑を生み、懷疑の革命を叫ぶ時潔然として本來の白に歸す。モネーに見よ、ゼザローに見よ、更に吾人の面前に活躍を擅にせるロダンに見よ。眞の在る處、我を捨て、直に眞諦の一義に生く。此の意氣ありて初めて後の世に偉大なる作品を残し能ふなり。

翻りて我か日本と及其の美術史を見よ。極東の曙に長き夜の夢覺めし時東亞に覇者たるの榮冠は其の頭上に輝けり。百川相率ひて、極東の一角に朝す。世は眼を屹て、驚視しぬ、不用意の際に默出されし偶然的の運命を怪しみしなり。されど驚視はやがて嘆美の聲を發せしめぬ。餘りに整頓せる過去と、餘りに美はしき革命により未來に對する期待とを包みて只一向に嘆聲と變せり。革命とは血に濯かれ修羅に狂ふて生まるゝ者と思へばなり。然るに覺醒の時一度至ると知れば、古きを捨つる弊履の如く、只絶對要求の聲を聞くのみ。明治維新に生ける人は我に纏る一切の欲念を顧みず無上普遍の理を求む念々切なる者あるのみ、彼等の胸中下根衆生の妄念を一擲し去りて只名分の截然として映せしあるのみ。之を以て見れば明治維新は將に日本史に残す偉大なる作品の一たるなり。

明治年代の繪畫は亦同じく此の決心に出達す。早く廣重は其のムードを版畫を用ゐて表す可く試みたり。芳雄は過渡の境に立ち明かに過去を語り未來を默示せり。日本畫家は切實に新氣運を感じ、住み古したる廬を離る可き時來れるを意識せり。貧弱なる過去と豊富なる未來とを識別せる明治維新に伴ふて時代の思潮を解釋せり。されど彼等は尙古を逐ふて離れず、今に至るも一線一畫の違はざらんを恐る。他なし彼等は小我に囚はれしなり。其の甘酔の床の暖かきを思ふて、日を追ふて遷る世の盛衰に強て自ら面縛せり。斯くの如くにして明治時代の日本畫は一の骨董品に化せんとす。憐む可し日本畫家は徒らに過去の美術を外國に紹介する通譯たるに終らんとするか。明治維新を去る四十三年、今日猶依然として批評家は日本畫の未來を云爲するを斷たず。さ

れど云ふ、説く者は知らずと、世間一般の批評家は維新革命の偉大なりしを忘れ、寸擾分康の間雅邦を得て新機運の開拓者とし、茲に寸餘の命を貪らんとす。維新革命が小我を捨て、大我に一致し初めて完成したるを忘れ、絶對要求の大斧を振ふを忘れ眼前の寸景を以て萬古の荒涼を弊はんとす。

文部の展覽會は元より眞摯なる作品を要求せしと同時に、新しき生命に生く不朽の作を掲げんと欲せしならん。されど廣業に見よ、大觀、竹坡に求めよ、素絹に過去の思想を繋がんとするの外何の勉むる所がある。南宗と稱し、四條と持し、狩野と誇る彼等には、好し新機軸を拓出したりとするも要は過去の祖出に過ぎず。卿等の描法は既に遠く雪舟、探幽に盡く、加ふに爾來數百碌々の輩、零碎も餘さじと井底の創意を試みしに於てをや。只此の間應舉あり、古典派の囚はれたるに意滿たずして直に自然に接觸せんと企てたり。彼や將に日本畫界の風雲兒として現はれしなり。其の努力は日本繪畫史に當然来る可き開拓地を示せる点に於て前後を通じて唯一の者なり。既に自然本來の形を寫す、背後に来る可きは先即ち色の解釋にあり、顏料の改革にあり、内容の充實にあり。不幸にして、密閉せる日本には思索的方面と、科學的方面に對する研鑽起らずして遂に捕ふ可き機會を逸す。延ふ可き驥足は再び畏縮して昔し乍らの狹路を辿れり。かくて文晁、抱一を出し、容齋を立たしめて一脈の命を餘せしなり。

今や最新の思潮は澎湃として東亞の一角を襲ふ。舊裝を振ひ棄つ可き時至れるなり。されど荏苒日を移して迷夢去らず、文部の展覽會は「楚水の巻」「魔障圖」「黒き猫」を以て尙且つ逸品と成さ

んとす。更に甚だしきは年方蕉園輩の浮世繪を賞する者多き之れなり。試みに彼の曹か浮世繪なる者を見よ、元浮世繪は文祿、文化各時代に於ける一反映として其の時代のムードを遺憾なく術巧の上に表はせるに止まる。然るを今年方、蕉園の描く處を見るに、一向に元祿、文化のムードを追ふのみにて些の創意なきが如く、婀娜妖艶の風を寫せば能事終れりと成す者の如し。材を古に借る咎む可きに非ず、要は如何なる点を描へて之を世に提供せんとするにあり。近代戯曲の名品たるサロメと云ひエレクトラと云ふ、昔し乍らの名なれ共内容は之を寫すに新人の筆を以つてせり、試に「各のまごひ」「女歌舞伎」の何れかを見よ、何の内容なく何の主張なし、五六或は以上の人物を配置し粉黛を施し、衣裳を選択せば既に一幅の畫は成る者と心得しが。笑止にも憫然の至りなり。只に之等の輩のみならず所謂現代の大家なる者皆然り。碌々として酒池の間に出入し或は醉餘筆を馳れば即ち神來の技と誇る、濟度す可き限りに非らざるなり。或は云ふ、日本畫の生命は氣品に在り、脫俗に在りと。思へ氣品脫俗其の妙は現世と不即不離の間に存す。現世と餘りに交渉なき形体を描き出して氣品、脫俗を稱すとも、觀る者茫漠として捕ふる處なく、解する處なくんば遂に一箇の謎たらん。一箇の謎を掲げ來りて明治美術の精粹と稱するに至りては明治美術の迷惑、察するに餘りあり。

嘗て一度美術院派起る、當時大觀、觀山等の態度は特に斯界に一の活氣運を点す。顏料の用意、畫面の内容、見る可きものあらんとせり。恨むらくは餘りに自我を尊重して畫に生きず。爾來十余年「魔障圖」等を見るに態度の大ならざるにあり。今彼等が作品の範圍を見よ。依然として筆

を断ぬは佛畫なり。されど宗教的敬虔の心あるに非ず、教理の靈光に浴せるに非ず、且つは又藝術的向上心を欠ける者が妄りに佛畫を書けばこそ隨喜渴仰の余り専心不動の勇猛心を振ひ起し彌陀の教法に融和して書き出せる奈良朝のそれに何の及ぶ所あらん。更に人物畫に於て見れば人体研究を根本的に顧みざる粗漏杜撰の體軀を畫き、表情に會々志せば龜八の生人形の強て口を歪め眼を釣り上げたる其の儘なるを出す。照る日の下にも夕闇にも依然として女は白き顔、男は赭黒き顔を繰り返す。更に風景畫に轉すれば、最大要求たる光線の分解、反射は全然念頭に無く、草も木も到底鐵葉、亞鉛の飾り者たるを免れじ。之を以て斯界唯一の活氣運させる日本畫も憐れなる哉。最後に花鳥畫あり。花鳥畫は由來本邦の獨特とする所、自然を尤も愛好する上代より、四季折々の花の眺め、嬌音清歌の小讚美者、梅を畫けば鶯を轉じ、鶉啄ばむ後景には露に重き秋草を添ふ、幾世に古りたるロマンチックの性情は常に之等を素絹に寫すを忘れず。蓋し日本畫の西洋畫に有せざる唯一の描寫方面なり。されど其唯一の花鳥畫も畫くに非ず、單に繰り返すの一途あるのみ。一風雲兒應舉去れば、世は維新の革命を経るも畫家の頭腦は何等刺激の衝動を感せず。明治の藝術界は凡てを纏めて駸々として進歩せり。或る者は反りて之を退歩なりと嘲笑す、退歩か進歩かは姑く問はず、自己の地位に不安を感じ、動搖を來せる者は早晚何等かの立脚地を得ん。斯くして其の二を數へ、三を増す事頻りならば其の間必ずや偉大なる作品を製出せん。彫刻に於て之を見、建築に於て之を見、新輸入の西洋畫に於ては元より其の甚だしきを見る。而して獨り日本畫に於ては懷疑なく研鑽なく、そも何れの日までか醉態を續けんとする。雄大にして神

秘なる自然の翻譯者たる可き使命を忘れ、空しき頭顱を並べ、空しき筆を動かせる公等貧弱なる日本畫家は何の恥づる處なくして晏如たるを得るか。明治維新に於る日本畫は實に大なるアナクロニズムたるを免れじ。

東亞の一角に見出されし美術國を單に過去の寶藏と成すも、進みて新泉の涌地たらしむるも一に公等の決心にあり、我に囚はるゝ事勿れ、一木一草見來れば皆清新の氣に満てり。一度新人の思潮に觸れて之を見れば、昨日と今日僅か一日を隔つとも感ずる處は隔世の差あらん。憐々の情を斷ちて我を捨てよ、我を捨つることは永劫の我に生くの義ならずや。偉大なる作品、偉大なる作品、希ふ日や久くして、製作す可く充分の過去を経たり。斯くしても猶。明治美術を飾る可き何等の作品なくして、公等は酒池に狂ひつゝ、現世、未來に向つて寂寞たらんと欲するか。

發見はカブレンでは出来ない。一目の羅は鳥を獲ず。鳥を獲る羅は唯だ一目である。併し始から羅を張らなくては鳥は獲れない。脚氣の病原はなかく攫まらなくても脚氣調査會と云ふ羅は張て置かれなければならない。(歐外)

悲哀なる自覺

山 本 勇

海近き北國の淋しき町の近く秋の情調、私は其の情調を心ゆく迄味ふて居る。而して私は、私の遺瀨ない心の姿を傍觀して居る。斯様な哀愁が私の胸に流れて來ると、私は華やかなりし過去

の時を思ひ出す。思ひ出す毎に今更ながら、「現實」と云ふ灰色の濃霧が幾重にも私の周圍に立罩めて居るのを發見する。私は此の濃霧の中で、私は私の血管に歡樂の血球が流れて居つたロマンチックな時代の心持に歸ろうと悶搔く、然し幾程悶搔いても不可能である。其の霧が益々濃くなる様である。肉を破り、血を流して、蜘蛛の巣にかゝつた蠅の如くに逃れ様々と悲鳴をあげて悶搔く、然し、翅は傷き、肢も苦痛と疲勞とを覺ゆるのみである。恐怖すべき憂愁の濃霧、思ひ出すでさへ戰慄する。歡樂は何故に永く續かないのであらう。思想の變遷、現實の悲哀、こんな事を夢にも知らなかつたロマンチックな時代、もう二度と、其の時代の心持に歸へる事は出来ない。

然し私は永切に越え難き絶壁聳え、且つ底知れぬ深淵の横はる濃霧中に彷徨して、昔日のみを吊ふて居られぬ。否、我等の採用すべきは野猪的の猛進、盲目的の奮闘である。私は胸に燃ゆるような凱歌の聲で滿されむ事を欲する。滅亡に打勝つたる凱歌、私は其の凱歌を揚げたいばかりに悶搔く、されど私は渾身の血潮が色褪せた様な氣がして仕方がない。此の色褪せた血潮を以て、現實の恐怖すべき濃霧を脱出すべく餘りに微弱なものではなからうか。自己のために野猪的猛進を行ふにも餘りに信賴する事が出来ぬ、又たさひ、色褪せないにしても、私は噴火口を望見する様な不安の未來に對して、尊き青春の血潮の大半、否、一半なりとも注ぐ事を欲しない。此の貴重すべき青春を犠牲にして、暗黒なる未來を開拓する事は、到底私には忍び得ない。なつかしき青春時代、貴重なる青年時代、私はたゞ單に、歡樂の飽和でありたい。憂愁に對しては無感覺でありたい。常に朝の小鳥の様に快活でありたい。

然し、私の周圍には依然として灰色の濃霧がある。恐怖すべき渦卷がある。此の渦卷と濃霧とを如何にして脱出しよう、靜止して居ると自己が危くなる。思切つて濃霧中の渦卷に巻き込まれて永劫に破滅しようか。否、青春の血潮の一半すら流すを惜しむ私に、如何にして青春全部を破滅に陥らしむ事が出来よう、然らば私は如何にすべきか。遂に、私は尊き青春を犠牲にして、この渦卷と戦はなければならぬ、何たる悲痛なる覺悟であらう。慘憺たる争闘であらう。歡樂の犠牲、悲哀なる自覺、私は此の聲を聞くべく耳を覆ひたい、眼を閉ぢたい。嗚呼、然し、私は目を閉ぢ、耳を覆はなければならない。

嘗て島村抱月氏が或る雜誌上に於て、「吾人は虚偽を去り、虚飾を忘れて痛切に自家の現状を見よ、見て而して之れを眞摯に告白せよ。

是、以上適當なる題言は今の世にはないではないか」と云はれた言葉を記憶して居る。これは私にとりては何よりも良き題言である。又ルーソーの偽らざる告白中に「吾々すべての努力に還れ、我れに還れ、而して新たな我れを造れ、それ以上に何者もなし」なる言葉がある。彼れルーソーは、生來、努力的人物、意志的の人間ではない。又彼れの熱望したる幸福は無事と安易と放逸との外には何もない。然し、其の放逸と安易との背後には、生きむとする悲哀なる努力が潜んで居る。私も此の意味に於て、「自己」と云ふ偉大にして貴重なるものに送られて、東エレザレムさして攻め上りし十字軍士の様に猛進したい。自己の爲め、自己以外の者のためには此の青春の一瞬間たりとも割くを惜しむ。我等の生涯は徹頭徹尾、自己の生涯ならむ事を欲す、かくて満足の微

笑を以て猛進し努力し以て、吾人は永劫に強者たらしむ事を欲す。

されど此の戦闘の結果は如何に成り行くのか。又先登に立つて導いて呉れる者は誰れだろうか。心を静めて考へに沈む時、心の底から頭をもたげて来るものは、疑惑と否定とのみである。たゞ自己のために争闘するが如くにして、而も其の自己を信する事が出来ず、たゞ灰色の濃霧の中に渦巻がより迅速に廻轉して居るようにはのみ思はれる。さらば私の努力も結局は破滅に終るのであるか。

かの「ボルクマン」のエルハルトは「私は若いんです。私は私自身の生活を営まねばなりません……」と叫むで、この濃霧を脱出すべく北國の雪の夜を、其の想ふ人と共に櫓に乗つて明い南へと馳せ去つた。

其の櫓に附けた鈴の音がリン／＼と、灰色の冷やかな空氣に響きながら遠く消えて行く。其の鈴の哀音よ、後に残りし父母に對しては葬儀の鐘の音とも響いたであらう。南方に去りし人々の行方よ、後に残りし人々の胸中よ、私は遺瀨ない悲哀と寂寞とに耐え兼ねて居る。然し去りたるエルハルトは何等の希望を私に與へない。又親愛なる夫に背き、三人の愛子を捨て、去つた新しき女ノラは何處へ行つたのであらう。さてはまた、斯の有名なる “the sun……”, “the sun……”なる悲痛なる臨終の言葉とともに死したるオスワルドの最後、何故あの様な悲惨なる最後を遂げたのであらう。

かゝるイブセンの積極的厭世、價值のなきものを破壊し盡すと云ふ様な人物、新しき生命を得るためには、如何なる富も、名譽を犠牲として、少しも顧りみぬ人々の一度本性を發揮するや、盲目的に直進すると云ふのが眞理であらうか。否、私には眞理とは思へない。たゞ要するに絶望の深淵である。不可解の絶壁である。結局吾々の心を支配するものは、統一のない疑惑である。灰色の世界である。

彼の愛に身も心も打ちまかせて、あらゆる歡樂を獨占した様な心持に酔ふ如き事は私には到底出来ない。「死の勝利」の主人公ジョルヂオの苦痛にみち／＼て居る心は、私に最も親しみを感ぜさせる。然しながら朝夕夢の様な樂しみの間にも、彼れジョルヂオの心は、如何なるものを以てしても和らげ難い疑惑と苦痛とに壓せられて居た。かくて久し振で故郷へ歸つて來て、父の亂行、家政の亂脈、自分の最も親愛なる叔父の自殺、姉妹等の不幸なる境遇等、凡て以前には少しも知らなかつた家庭の醜惡なる現實を見、親子の關係にさへ彼は醜く忌はしき獸性の發揮を見た。人間に對する彼の疑惑は、今は絶望となつた。彼は自殺を企てた。然し彼れは愛の爲めに尙死に得なかつたのである。

然し人間の淺ましさを知つた彼の心は、到底愛によつて充たされなかつた。彼れは遂に、拒む女を無理に高い崖から海へと突き落し、自分も共に此の世を終つた。然し其の悲惨なるジョルヂオの最後が、私に何を與ふるか。私はたゞ自己の疑惑に對して戰慄するのみである。信頼するものもなく、安心して身を委任すべき地盤もなく、灰色の濃霧の中に苦しみながら悶へて居るのである。「噫我は宇宙の眞理を究めんとし哲學、法律、醫學、神學等全力を盡して學べり、然かも何の得

る處ぞ。」と叫んで自殺しようとした、ファウストの如き思想上の懷疑だけならば未だ救助し得る道がある。併し、今日の私の懷疑は宇宙の眞理と云ふやうな高遠なるものに對する懷疑でなくして、現實に對する疑惑であり不安である。ファウストの形而上的の懷疑に非ずして、ハムレットの實際的の懷疑である。叔父を疑ひ、母を呪ひ、友をも呪ひ、戀をも疑ひ、而して遂には自己をも疑つたハムレットの懷疑である。「ハムレットは自ら、我が身を傷け、自己自身にて我が身を裂いた。彼れの手には兩刃の解剖刀があつた」とツルヂネーフは云つた。私も亦ハムレットと同じく手に兩刃の解剖刀を持つて居るのかも知れぬ。而して我が刃で我が身を傷け裂いてしまふのかも知れぬ。たゞ苦悶と憂愁の雲が絶え間なく私の胸を包むで居る。丁度北國の冬の空其の儘だ。ああ然し私は私自身の力で、道を切り拓いて行かねばならぬ。凡ての權威を疑ひ、凡ての理想に離れた私は、自分の力で自分の道を切り拓いて行くより外はない。併し其の拓いて進むべき道は如何なる道であるか、何處へ行く道であるか、未來となるべき道は、濃霧の底に沈々として潜んで居る。其の方向は萬人の均しく知らむと欲する處、然し結局は、不満足、不可解にのみ到達するやうにしか思へない。

併し私は「父の子」のバザロフに至つて一道の光明を認める。彼れバザロフは地上の如何なる權威に對しても屈伏する事がなかつた。然し眞理の前には忠實なる下部であつた。藝術を嘲り戀愛を退け、家庭生活を輕視し、友情を無視し、遂に敬愛すべき父に對してすら反抗の態度を採つた、彼れの最後の瞬間は如何であつたか。……“…… I'd break down so many things, I wouldn't

die, why should I not ! There were problems to solve, and I was a giant ! And now all the problem for the giant is how to die decently, though that makes no difference to any one either……never mind ; I'm not going to turn tail.” の悲壯なる叫びが彼れの最後の聲であつた。眞理のためには、凡ての事物を破壊しつゝ進むで來た彼も「死」と云ふ最後の事實に對しては如何ともする事が出来なかつた。然し彼れが偏に自己の握つた眞理の中に最後まで自己を没し去らなかつた、其處に私は或る光明を認める。親と子、老者と青年、舊と新、私には其の後者に屬する誇がある。前者に屬する人々は夫々最後の努力を示しつゝ一人／＼破滅の淵へと落ちて行く。されど又、新しき覺めたる人々の行方は何處ぞ。其の人々の行方にして私を迷はせないものは一つもない、戰慄させないものはない。又バザロフの最後の言葉が幾何程の平穩と慰安とを與へるであらう。要するにまた灰色の濃霧の中の渦卷が、より迅速に廻轉して居る様にしか思へない。併しバザロフは、たしかに智量ある勇ましき先驅者である。吾々とても彼れの如き決心を有するならば、行くべき道は其の形式に於て異るとも、要するに彼れの陷んだ道を行く事が出来る。故に私はバザロフの與へた一味の曖昧ある問題に絶つて、貴重なる青春の血潮を流して、灰色の濃霧を脱出するべく奮闘するより外に途がない。悲痛なる自覺、私は眼を閉ぢ、耳を覆ひ、眞理のために自己と云ふ偉大なるものゝために、劍を振ふて猛進するより他はない。よし死屍を空しく濃霧の底に横ふるども、ひたすら眞理のために満足の微笑と決心とを以て猛進する。血潮を流して破滅するども、其の血潮の一塊／＼に悲哀なる自覺に對する慰安と満足とがある。私は力強く意味

ある人生の恐怖すべき苦闘の中に歡樂を見出さむと欲するのだ。併し自己を慰むべく私の唇にのぼすべきは、矢張り永劫に自己を吊ふ晩歌に外ならないのであろうか。(完)

病問錄を讀む

夜 石 人

一、

智慧の木かばに蛇あり、罪を清淨の人の子に教へぬ。意志にもろき女の、敢なくも、この惡むべき誘惑に酔はされて、木の實の甘きを取りしより、人の世に智慧ありき、罪ありき。憐むべき人は、智慧の堅糸、罪の横糸に織られし運命の一條を、俯首れつゝ辿る。たかき理想の幻を逐ふこと窮りなくして、新なる罪業の傷つねに絶えず、鮮血永へに胸をひたせり。かくの如くにして、暫くその慾に趨るの歩を停め、靜かに自ら顧みるの時、人誰か悚然として我が淺ましき姿に戰かざる者ぞ。噫、かくても尙かつ神に頼らず、佛に絶らず、理性に借りてよく其の深傷を痊やすべしと言ふや。理性のかつて我れに教ふらく、たゞ善根を植ゑ、以てこれを裹めど。乃ち從ひ、奮然として健闘の程に上れり。ふたゝび瘡を被る。立つて理性に問へば、嚴として答ふること前の如し。噫、かくても尙教に頼るべからずと言ふか。まことや理性の聲は嚴厲也、正義の聲也。されどそは、我が胸の傷を裹むべく餘りに冷かなるを奈何せむ。我れ屢々涙を以て訴ふれども、理性

は涙を以て應へざる也。我れは、罪障の悲哀には理性の解き得ざるものあるを知れり。かくてぞ、大慈大悲のおんにひれ伏す。

二、

大慈の光明ありて、寂として山村水郭をつゝみ、大悲の音樂ありて、無始より今に絶ゆる間もなし。懷へば、一切の有情は、等しくこれ佛の子、神の子として、普き光を仰ぎ、妙なる調べに胸躍らしむ可きにあらざるか。悲しむべきかな、固く色身の迷執に縛せられて、大悲の聲を聴くを忘れたり。久しく無明の煩惱に支へられて、大慈の光に眼を閉ぢたり。天地の太元に歸すべき榮ある座を抛ちて、今や我等は、淺ましき生死の境にさすらふ。されど見よ、我等、天なる郷をすてゝ遺れたるに、佛は恒久の愛を以て我が身を護り給ふにあらずや。我等が運命の巷上に迷ふとき、佛、大いなる御手を舉げて、汝が親の許に來すやと呼び給ふ。しかも業苦の衆生は、この無聲の雷音聲をきかず、潮のごとき大慈悲の力を覺らず、我が世の幸と榮とは、我れより之れを捨て、定めなき人生の荒野に彷徨して適く所を知らざる也。覺者ありて之れを見る、涙無からむや。乃ち叫んで曰く、佛を見よと。

三、

覺者叫んで曰く、佛を見よと。罪の暗路に行き惱める人の子、この聲をきいて、齊しく眼をあぐれば、愛護の御手ありて、我れをさし招き給ふ、すなはち憧憬の念に走らむとして、又我れを顧みてためらひぬ。久しく苦海に沈淪して、邪念胸に染めり。罪業の傷絶ゆるなくして、體の何

ぞ醜きや。如何なれば、この姿を以てして尙かの慈光を汚さむとはする。忽ちにして佛と相距る千萬里、身は罪を抱いて泣かむとす也。されど見すや、迦毘羅城の一王子は、妙覺朗然の佛身を現じて、寂光の土を説けり。ユダヤの一工匠の子は、罪の絆を脱離して、天國に復活せり。正にこれ、人の凡てが彼等と等しく佛身となり、天國に生るべきを告ぐる曉鐘の聲にあらずや。豈ひざり釋迦を言はむや、何ぞまた基督を説かむや。古今の先覺は凡てこれ、此の福音、この自證の聲を世に宣べむが爲めに來れるに外ならざる也。彼等が一切衆生のために濺ぎたる熱き血と涙とは、聽て、在まさいるなき大慈悲の燃ゆるが如き發現にあらずして何ぞ。寂光の土は、もと人界と異境たるに非ず、神の子と人の子と、もと別種たるにあらず。二にして二に非ず、一にして一にあらず。要は唯これ、心頭覺醒の奈何にあるを知るべきにあらずや。されば釋尊獅子吼して曰く、我れ成佛してよりこの方、百千萬億阿僧祇那由陀劫也と。嗚呼また何をか言はむ。

四、

それ大慈悲は一切也。いはゆる山河草木悉く大日如來ならざるはなしと言ふもの、一砂一塵と雖も、佛にありては皆久遠の大法輪也、大光明也。我等が以て醜と觀じ、罪と惡み、僞と斥くるもの、佛にありては、即ち皆眞也、善也、美也。萬法渾然として、凡て攝取の光明に輝かざるはなし。かくて尙何の罪を疑ひ、何の醜に戦くぞ。我等涙を以て大悲の慈顔を打ち仰げば、盡十方の無碍光、直ちに無明の闇を破して、身はすでに一味の遍照海に遊ぶを覺ゆ「惡をも懼るべからず、彌陀の本願を妨ぐる程の惡なきが故に」と。所詮罪業は自ら除かるべきものに非ず。たゞ信樂

誠にして大悲の前に投ずれば、大なる廻向の力によりて、罪業おのづから菩提の因たり。かくて悠々たる法喜、永へに我れと與にあるべき也。

五、

かの我れを他にして佛を言ふ者は禍なるかな。法喜の人には、在さいる所なき神、日夜ともに在り。朗然たる慈悲の光は、不斷に胸臆一字の奥龕に點せり。我等有漏の凡夫、時として人生根本の悲哀と罪障深重の憂愁とに喘ぎつゝ、一路の命脈を辿るの時、常に衷心に湧く法喜の靈光に勵まされて、「天の父の完きが如く」我れも亦完きに進んで已まざらむとす。これ不退轉の精神也。ここに向上精進の生活あり。法喜の生活は、實にこの努力と向上とありて、嚴肅なる姿を呈し來る也。西の國の靈者云へり、神と偕に樂み、神と偕に活くと。あゝ天地またかく崇高の文字あるべしや。人眞にこの自覺を有して、はじめて世に生れたるの大歡喜あるべき也。



文苑

帆影

竹柏野葉三

And on the deep sky's verge a fluctuant light Gleamed, grew, shone, strengthened
into perfect sight, As bowed and dipped and rose again the sail's clear white.

And she that saw looked hardly toward him back, Saying, "Ay, the ship comes
surely; but her sail is black."

——Swinburne.

北の國なる都へと急使の船が發つてから、南の島の日は幾度か落ちた。

トリスタンは臨終の床を海に臨む高樓に移さして船の歸りを待つ。待つは今宵が初めてではない。何時いつ綻るぶとも見えぬ雛罌粟が、南國の長い日影に照されて紅の花葩を、天の下のこよなき榮と

振舞ひしも、見果てぬ夢と消えはて、空しき莖を空しき風に搖がする此日まで、朝に待ち夕に待った。

磯寺の鐘は寂しき嶋に響き渡る。トリスタンは堪へ難きもごかしきの嘆息を唇に嚙んで凝と眼を窓際の女の眉に落す。唐草の縋れて纏る、花模様をば輕らに浮かす窓掛を靜かに疊む傍に、女は遙か彼方の海と空との境を見つめて居る。

薄紫に暮れゆく海は油を流したやうに靜かである、唯岸に碎くる波のみが夕雲を孕んで桃紅色の笹縁ささべりを附ける。飛ぶ鷗の雪と白き翼を追へば水淺黄の空に迷ふ紫紺の雲の外に眼を遮るものもない。今日も斯うして暮れる事かと、イソルデは思案の眉を集めて薄暗き室の中を顧みる、薄明の色の漂ふ中にトリスタンの青白い額のみが浮彫のやうに見える。イソルデの胸は急に重くなる、千斤の鍾を抱いた心持である。濕む目は膝に落ちて思ひは五年の昔に返へる。

イソルデの抱ける夢は花やかにも樂しき五年の夢であつた。トリスタンの生命を刻む砂漏刻の、砂の落つる刹那刹那を、魂切るまでに身も世もあらず思ふ今日となりて、五年の春を繰返すは、黑白もわかぬ洞窟ほらを去つて花咲き鳥歌ふ園生に出づると同じである。悲しい日にあつて樂しかりしそのかみを偲ぶ程、心憂い事はない。弦を放れし征矢の行衛を追ふたとて何にならう。過ぎにし夢を再び得難い者と知り乍ら、猶その夢を落さじと抱く身は不幸の極みである。イソルデは記憶の糸を辿つて果敢なき夢に縋らうとする。

茂る葉蔭に林檎の實の珠を欺く南國の秋を、白き石たむ村の泉に水甕携へて下りたつた夕であ

る。水汲み終へて何氣なく振り返る我が瞳に映れるは見知らぬ人であつた。旅に褪せし衣のいたう汚れたれど、秀でたる眉目に逞ましき骨格に此嶋人とは様異なるを、われは大なる或ものに壓せられたらむがやうに立すくんだ。恐怖にもあらず、驚愕にもあらず、十七年の春秋を胸に疊みし心の泉の迸り出たのとは其瞬間に知る由もない。見知らぬ人は眞一文字に結ぶ唇を重げに開いて

「さすらひの旅に疲れたる鳥に宿かす森の尊蔭はなきか」

と問ふ

「春來れば花は咲き、秋去りて木葉落つる此嶋は、太古ながらの自由の郷なるを」

と夢現に答へる

「かゝる郷をこそ慕て」

と見知らぬ人はうれしげに微笑む。

それよりは常世の春の香に酔ひて月日を経た。皐月の風薫る丘の家に父なる翁の去りてより、何時とも知らで嶋の長と推されつゝ十六夜薔薇の花萼に、世を香しく眠る胡蝶の如く五年は暮れた。後の世かけて誓ひてし人は北の國に名たゝる騎士と聞く。何の宿世によつてか遠い南の離れ小島に身を寄せて、物足らぬげの様もなきは、當の人の語らねば知る術もない。

北に行く船の纜を解く朝であつた。病癒えずと覺つたトリスタンは苦しき息の下に書を封じて使に渡す。蠟の目、堅ければ中にある文字を読むすがあらず。唯枕邊に看護る我れに、よそ／＼

しき其時の振舞は、魂を共にしてより五年の間に初めて見た處のものであつた。宛名は、われと同じき名のイソルデとあつた。——イソルデの膝は、いつしか睫毛を落つる露の玉に濕とりとなつて居る。涙の中に又思ひ返す。情なき言葉とてはつゆもせざりし此君の、今更にわれにつらかるべき理もあらず、彼の文受くる主こそ心にかゝれ。わが盡すべきは此君ならで他にありとも覺えず。——不安の念を強いて包む慰藉の衣を自ら紡ひて、女は靜かに窓をはなれる。

夜の帳は既に落ちて潮の香高き風は病める人の室に吹く。イソルデは窓を鎖す。硝子一重の遠き空は高く澄んで星の光のみが晴やかな眸を輝かす。イソルデは床に落す足音を偷んでトリスタンの枕上に灯をつける。風の通ひ路、とだへたるに何の非ぞ。壁にかけたる七絃琴は空鳴高く、蕭やかなる室に響く。

二、

病める人のとく癒へよかしと念する心の裏より、われと名を同じうする北なる人が面影にたつ。思はじと抑ふれば抑ふる下より不安の念はいやが上に湧き上る。いかなれば斯く迄に轟く胸ぞ。千仞の谷に渡せる釣橋の藤蔓を命と恃む身に、影落す遙か下なる深淵はわが仇である、敵である。北なる人をわれは如何に思へる。妬ましと云ふ事は夢にさへ見しためしあらず、春を重ねる二十年の今日となりて白き胸にも覺らざりし毒草の潜みしを思へば。——イソルデの思ひは千々に亂る。甘き戀の體えはせぬかと怪訝の眉よせて我世の坂を顧みれば、睡蓮匂ふ池の汀に袖片しきて笑ひ興せしそのかみが懐しい。後の世までもと望を置きしその人に、まさなうも秋の空を感

じては、罪なくて末枯野の夕を灰となりし異教徒が、慘たらしき最後よりも苦しいと思ふ折さへある。イソルデの頬は日毎に褪せる。

夜鳴鳥の聲がする。森を渡る風の音も激しうなつた。イソルデは端然として夫の顔を打守る。トリスタンは顔を蠟のやうに白く、額を蔽ふ鳶色の髪は渦をなして枕に亂る。唇の色のみは紅い。又夜鳴鳥が啼く。啼く聲に耳をかせば遠き梢から異な聲が響いて来る。あな梟だと覺つた時、満身の血潮は攀れを打つてイソルデの唇は見る／＼青くなる。

南國の春を彩る百千の花の亂れ咲きて、月さへ朧ろの宵であつた。今は亡き數に入りし母と伴れて、陽炎もゆる春の野邊に歌ひ暮した歸り路に、沖の潮の遠鳴りする夜、梟の聲を耳にすれば、身に凶禍の落ちかゝるものと聞いた事がある。その折は美しき世をいやが上に美しくせる春の夜の紫だちたる星の下に妖鬼の宿かるすべもあらじと思ひつるに、今宵は風さへ凄うなつた。母の物語が魔語の如く耳に鳴る。

北なる人を妬むにあらず、夫の身を思へばなりとはイソルデが此夜頃心に繰返す言葉である。心も身をも夫の足の下に投げ出して口惜しと思はざるに、大方は眼を空様にして何事か案する如きトリスタンの面もちの、絶間なき物思ひの胸の中には北なる人より外はあらじと見ゆるが怨みである。

「イソルデ！」と眠れる人の口によりすべる。

イソルデは驚きに思索の糸を斷たれて、枕許に膝まづけば、トリスタンが深き瞳の微笑の影は刹

那に消えて、廣き額に意外の皺を刻む。「イソルデ」とは我名にあらずと知つた時、女は白き敷布に打伏して弱き肩に波をうたす。我に返れるトリスタンは、若き妻の忍び音に、包みかくせしわが素性に、憐れと悔が油然として心に湧く。

亂るゝ雲と走る風を縫ふて下弦の月は東の窓より流れこむ。

三、

「イソルデは驚きと悲しみに憂き月日を暮らす。夫たるべきわが叔父のあまりに年關けたればなり……」

トリスタンは終夜、思ひ煩ひたる末、人知らぬ孤嶋の蔭に春戀しと咲き匂ふ堇の如き可憐なる妻を見ては、さすがに時雨月の黄なる森に、吹上の水と迸はしる、いぢらしさの思ひに堪へず。北の國なるイソルデの素性を物語る。彼女の素性はやがてわが素性である。南の國の美しき人は轟く胸を十字に組む双の手に亂るゝなど抑へて一向に聞く。

「叔父は既に六十路を越えたり。後なりしわが叔母に別かれてより二十余年を経たる今となりて何の酔狂ぞ。娶る君に凶事あらむと世を知れる相人の奏したれど、昔氣質の一徹に「東の國に美しき姫宮あり」と一日波の上を飛び歩りく燕の如き航海者の言葉を耳にしてより書を裁し、艤してわれをば迎ひの使節としたり。

海の極み、陸の極み、天下をあげてコオンウオルの命に叛くものありとしも覺えざる時なりき。われは國民の歡呼の聲を後にして、薔薇色に明くる東の海さして舟出したたり。……かけ

でも思ひきや、これぞわが北を逃るゝ因となり且つは御身と同棲の果を結ばんとは……」
語れる人は語らるゝ人を見やる。語らるゝ人は長き睫毛に涼しき眼を伏せて身じろぎだにせぬ。
大理石像に血を通はしたやうである。語れる人はまた云ひつゞける。

東の帝は亡き數に入りて當主未だ幼なれば戰國の常とて母なる后は一人の姫をコオンウオ
ルの宮廷に送るを、こよなき幸と思へり。姫は九重の雲深きに人となりて浮世吹く風の荒き
を知らぬ。母宮のすゝむるまゝに舟に上る。上りたる舟に凶禍の宿れりとは神ならぬ身に知
る由もない。鷗飛び交ふ磯濱に錨を上げてより静けき海は、紫に明け藍に暮れて一日二日は
經たり。七日目の夕なりき。蒼茫たる大洋に陸の影の沈みはてし頃、いづこもなく湧きい
でし黒雲の、あなやと云ふ間もあらせず、紺青の空を蔽ひつくして繩と太き白雨の隙もなく
叩きつくれば、浪は憤怒の形相凄まじく双手もて漂ふ船を引き入れんとす。

トリスタンは言葉を切つて窓の外を一寸見る。綠淺き春の樹は窓に迫つて、藍碧の空には卵子色
の雲が浮ぶ。明け離れたる春の日はかげろふを浮かして樹間に歌ふ鳥の群は永遠の春ぞと囀つて
居る。花咲く麓の牧場から微かに響く角笛も二人の耳には遠き世の夢の名残よりも淡からう。

權、操る奴隸の黒き腕は紫に膨れ上る。繋げる鎖は雨に和して青黒く響く。イソルデは戰のく
侍女の打伏せる中に端座して、ひたすらに神を念じて居る。われは弱れる奴隸の一人を押除
けて權を握る。權の先に碎くる浪は鉛のやうに重い。肩骨のものがるゝ如く痛むを、かばかり
の事に挫けて我こそは天が下の騎士よと名乗り得へきかと自ら勵まし、衆を督してひたぶる

に漕ぐ。黒き海に黒き日の落ち、風さへ代りて嵐は過ぎぬ。夕べの空には十日あまりの月かゝ
れり。イソルデは徐ら身を起して恙なかりし船の運命を祝はんとて葡萄酒の酒をと侍女に命ず。
侍女は薔薇と紅きを、なみ／＼と注ぐ、われは有難しと一息に干す。イソルデも心地よげに
同じ酒を小さき杯に盛る、運命こそ奇しき限なれ、心なく侍女のとり出せしは愛の酒なりき。
母なる人がイソルデの、老ひたる夫を嫌はん事を恐れて、新婚の夕、王と分ち飲まさん料にと
て私かに與へし愛の酒なりき。受け取りし侍女さへ心づかざりしを飲みたるわれらの知るべ
くもあらず。重き臉に輝ける日を仰ぎし朝、怪しいかな、わが心、譯もなう轟きてイソルデと
語るさへ世にも堪へ強う覺えしを、女も同じ惑ひに涙さへ見せたり。

暗然としてトリスタンは物語る。南のイソルデも人事ならず血潮を躍らす。

かくてイソルデは后に上れり。永しへの春とぞ見えしコオンウオルの宮廷に、覆ひかゝる黒
雲ありとはつゆだに知らず、われは歡宴の夜のさゝんざを後庭にさけて糾はれたる思ひを獨
り嘆きぬ。イソルデの夢も圓かなるべき理りなし。

イソルデは悲しみと驚きに憂き月日を暮す。夫たるべき王の年老ひたる故のみにあらず、蒼溟
の唯中に飲み干せし杯の、小さき胸を掻き亂せばなり。

美しくも若き妻を得て世を望月と思ふ叔父君はわが頬の日毎に褪するを見て、逢ふ毎に眉を
ひそめて問ふ。問はれたければとて人間の言葉もて言ひ現はし得べきわが思かは。延びゆく鎖
の盡きたる時、滿身の勇を鼓して引き撈るより外はあらじと思ふ。かく思ひ定めたる時ラン

スロットの運命が幻のやうに浮ぶ。暗き夜を森にすたく妖鬼はわが耳許にからりと笑ふ。イソルデは聲を吞む。トリスタンは思ひ入りたる聲音して語る。いつしか廣き額は汗に濡れて眼は炎のやうに燃えて居る。

夜鳴鳥の恍れたる聲に啼く夕なりき。王は滿廷の騎士を率ゐて都近き片山里に、狩にと出て立ちて残れるは病と稱せざるわれあるのみ。宵に贈られし花の香に酔ひて踏む苔にさへ心置きつゝ、われらは薔薇の叢に圍まれし圓亭に坐せり。日月を切り落し、天地を粉碎したればとて神の定めし戀に及向ふまがつみのありとは思はず。罪ある戀に強て罪なしと念する我等の胸の奥には呪の栖をこそ營め。萌えそめし蠱の黒き花に心づかざりしぞ是非なけれ。

震へる聲を唇に嚙む。聞く人の睫はしばたいて清い雫は假のやごりを膝に落つる。

かくてわれは地底の牢獄に投入られぬ。尺に餘る鐵壁を繞らせしこの室は一方海に面したり。海に向へる一丈二尺の壁の高きを見上くれば硝子もて張れる明窓あり。人一人り入るに足るべき程なれど天下を照す日の光の、深き水底までは透るべくもあらず。薄き光の折々は亂れて、行く雲の影なりと思へば思はるゝを、處刑の日を今日こそは今日こそはと、日毎待つ今のわれに、浮世の晴れ曇りは山に住める人の不漁を聞くに同じ。

薄暗き日のあまたゝび暮れて今日の日を忘れたる時、餓えと寂しさにわれを亡き者にせんとする王の心を知りぬ。戰の場に臨む事大小七十度、目にあまる敵を物の數ともせざりしこの我を、暗き地底の白骨と化せんとする惨き仕打にわか髪は逆立ちぬ。われに罪ありとはもとよ

り知れり。何が故に名ありし騎士の最後を血を以て祭らざる。悶えに悶えてわれは高き窓を見上げたり。厚き硝子を金網もて覆へるを赤手にてよく破り得とも丈にあまる壁をいかで攀づべき。かゝる際にも胸に浮ぶはイソルデのその後なりき。窓ぎはの暗き海に揺ゆる水松の朧ろげなるさまを見ればまづ搔いやりし髪長き人をこそ思へ。

俄に暗き窓は颯つと明くなつて鐵槌の響はわか耳を破れり。あなと思ふ間もあらせず海水はわが頭上に落下し來りて黒き影はひとわれを抱きぬ。

遠き世の奇蹟なんぞ聞くらんやうにイソルデは夢心地である。われこそは北の國なるトリスタンよ夫の口より明らさまに知つた今日、世にも幸なりし我と感ずると共に又世にも不幸のわれとならむ折を偲びやりて白き胸は麻と亂るゝ。荒き妻の亂る胸をよみしトリスタンはいとほしさのいや更にまさるを覺ゆる。

心靜めて聞き玉へ。……わが氣付きし時、身は已に南に行く船の甲板に横はれり。わが傍に伏せる男を見て、われは先きの黒き影の何者なるかを知れり。そはわが月頃日頃目かけし奴隸の一人なりき。雪の國に人となれる肋骨太き男なり。されど窓破りし時、胸傷けて舟に救はるゝと共に絆切れたり。聞く耳にわか幸を喜ぶよりも彼れの不遇を悲しむの念、潮と湧きてわれは幾度か夢の中にイソルデを偲び彼れを泣きぬ。舟なる人はわれを知らず。世を驚かせしコオンオウルの出來事を心よげに語り合ふ。その一人は云ふ「流石のトリスタンも最早や地底に飢えたらむ。罪問はれざるイソルデは果報者よ」愛の掟も色が褪せた。コオンオ

ウル王の鼻毛の長さは」と今獨りが云ふ。われは事もなげに扮ひつゝこの島に渡れり。
イソルデの唇は微かに震へる。トリスタンは一向に言をすゝめる。

三年の後、わが叔父は病に仆れて今はイソルデの御代と聞く、昔戀しと思はぬにあらざれど、國人の思はくに、御身のいとはしさに北にも歸りえで事なき春秋を重ねるを得たり。日毎重なりゆくわが病につれて御身の日毎衰ふるを見てはわれは身を切らるゝ如く堪へ難きなり。北なるイソルデは靈藥を持つ。その昔荒野に狂ふ巨人が残せりと傳ふるはこれなり。わが病癒やさんは此藥より他になきものを。されは北なる國に使を派して日毎／＼の帆影を、御身に見張らしむるにこそ。

イソルデの眉は忽ち晴れ渡る。鎖せる雲のいつしか散りて暖き日の春の野山を照せるに異ならず。白き頬に薄き紅さして、イソルデは初めて四を開く。

「奇しき君のこの方を聞きまゐらせて我心も躍りしを。……打明け玉ひしこそ世にも嬉しけれ。……さはれ歸り来る舟の帆の黒が白かを見分けよと、の給ふは如何に

「白き帆掲げたらば、わが願は容れられて、イソルデの舟にある、しるしなり。黒からばわが最後ぞ。藥をも與へざりし、兆ぞと知れ。

イソルデは身を起して晴れたる海を見渡す。空漕く雲の影だに見えぬ、かくて日は又落ちた。

四、

静けきは實に今宵である。夫をみとる灯の下に夜こそ明くれと念する心の底には遠き海より刻々

に近づく帆影のみが氣にかゝる。——白き帆かゝげたる船は、白い波を舳に碎いて次第／＼に湊へと近づく。南國の花は高き香りを入江の春に傾けて、靈藥を待つ。珠玉鏤ばめし瑠璃の藥壺を、鮮かな布に戴せて紅衣の童が靜々とこの丘さして登る。その後に紫の裾長く曳く美しき人、……と思ひ至つた時、イソルデの胸は早鐘をつく。思はじと閉す眼の底にはその人の面影がまぎ／＼と映る。世に奇しき藥をこそ待て、美しき人は來らずもがなと強て思定める。されど藥持つは彼の人のみ、廣き天下に二つなき寶を片時も離さざる人の、藥のみ贈る筈はない。藥なくば死は呖尺に迫る。死の手より救ふは彼人より外にあらず、彼人に會はじと希ふは夫の死を祈ると同じである。眞拆まきのかつら打ち縫れて解く術もなくイソルデは惑ふ。晴やかなイソルデの眉は曇つた。曇れる眉の下に長き睫毛をふるはして又思返す。美しき人の奇しき藥齎くすらして君の病の癒どきやし秋、北なる國に伴れ歸らんこそば、——君の愛の古き泉に立歸らば——あゝ、その時は初めより我を亡きものとなして侍女に身を落し、思ふ人に隨ふばかりである。かく念すれば燃ゆる心に一掬の冷水を浴びたる心地して、云ひしらぬ嬉しさがこみ上げて來る。されど北なる人はそを見すべきやの疑がすぐ頭を擡もたげる。

沖つ邊に潮の音がして又梟が啼いた。古き傷に手觸れたらんやうに帆の色の黒からばイソルデ血は逆に流れる。あゝ黒からば夫の命はそれまでゝある、此君に別れまつては一刻も永らうべしとも覺えざるを、トルスタンの命はやがでわが命である。

かゝる惑ひに夜は更けて曉がたの微睡まどろみに、鴉三つ四つ二つ啼きつれて夜ははの／＼と明ける。

五、

空はいつの間にか曇つて居る。朝霧は沖を罩めて霧の底に曙の海が鳴る。海燕が時々窓をかすめて白い腹を見せてゆく。イソルデは窓に凭つて模糊たる奥を見透さうとして居る。指折りて今日こそはと思へる心には黒か白かと絶間なく繰返す。翼五百里の金色の鳥が悠然と海を離れると、たちこめし霧は次第く薄れて碧りの海の羅物は一重くとはがれてゆく。イソルデは瞬きもせず海と空との遠ちを睨む。

黒い点が眼路の彼方に現はれた。見るく近くなる。イソルデの瞳は異様に輝く。点が線となり線が巾を得て、巾の上に豎なる針の影さへ鮮かになつた時。針にかゝる生死の色さへ認めた時。呀と叫ぶイソルデの顔は人間のあらゆる感情を一春につき潰ぶしたやうに痙攣した。

「帆の色は？」

と病める人は床より伸び上りて聲は魂ざる迄にイソルデの背を拂へば、潜みし嫉妬は被ける衣を跳ねかへして抑ふる間もなくイソルデの胸を十字に貫く。

「黒！」

と焔の如き一聲が迸はしる。半ば床より起き上れる人は、はつたと身を落す。イソルデは駈けよつてしつかと夫を抱く。トリスタンは深き眼を開いて古い泉は涸れたと許りイソルデを見やる。

二人の姿は二人の瞳の中で崩れ合つた。

白き帆かゝけし北の船は穗煙の波を花と散らしつゝ島影さして一文字に進んで来る。

此頃の外には最早やトリスタンの歌は聞えなかつたと云ふ。

ケルト民族の思想を根底とせるアーサー傳説は實に藝苑の寶庫である。古來幾多の詩人の胸を動かした中にもリスタン、イソルデの物語りは既に伊太利の詩人ゴイヤルトやアリオストに現はれスペンサーの神女王の一節にも遊獵の妙手としてのトリストラムが描かれて居る。その他古今の詩歌にその性行を叙したものが少なくないが、獨のゴットフリート、フオン、ストラスブルクの「トリクタン」やワグネルの樂劇や近英のマツシュ、アーメードの作は有名な者ぞ聞く。此作はスピンバアン、「トリストラム」、オプ、リヨネスにヒントを得たが、漱石先生の「薔露行」に絶えず司配せられつゝ筆を走らせたのは偽りのない處である。だから此一篇は翻譯でもなく、創作でもなく、唯想像に任せて自分勝手に書き綴つたものである。(八月二十五日、木曾川の畔にて)。

由松

薄穂歌

由松は淺黄の風呂敷包を背つて主家を出た。三日許りしとくと降り續いた春雨は昨夜の風で名残なう晴れて輕るそうな、ちぎれ雲がふはりくと霞みかゝつた空に浮いて居る。道は全く乾ききらないで今由松が歩いて居る裏町では、處々行潦が朝の日影を漂はして居た。

由松は今朝起きるとすぐ主人から芝まで使に行つてくれろと云はれ。何時もの元氣のいゝ彼なら二つ返事で飛出す處だが今日と云ふ今日は頭の中に蜘蛛の巣が張つたやうで人に顔を合せるさへ臆劫だつた。由松が唯黙つて首肯いたきりなのを見て主人は「お前ごうかしたのか」と云つた。

由松はいゝえど何氣なく返事したが自分では魂の居所さへ分らない位だと思つた。それで家を出たには出たが足は機械的に動いて居るのみで心の屈托は荒海底の海松のやうに絶えずふら／＼と揺れて居た。

由松は終夜眠られなかつた。眠つかうとあせればあせる程眼が冴えた。二階の寢間の煤びた天井に薄ぼんやりと映つて居る行燈の影が、灯の揺れるにつれて軽く動くのが氣になつてならなかつた。そのうちに忽然とお七の顔が丸い影の中に現はれた。それは自分を見つめて居るのではない、去年火事見舞のため吉祥寺へ行つた時、萩の亂れた枝折戸に紫の袖を垂れて微笑を含みながら駒込の森の梢に薄れゆく秋の夕日を眺めて居たその横顔であつた。その顔が一旦眼についてからはどうしても拂ひ落す事が出来なかつた。眼を閉ぢても蒲團を被いても駄目だつた、俯伏になつて枕に顔をあてゝも枕の下から瞭然と見えた。終ひには思ひ切つて目を皿にして天井を見上げた。そうしたら顔の輪廓が、ぼやけたやうに薄らいで了つた。こんな事をしてる間に雀が騒ぎ出して東が白んで來た。で皆より一刻も早く床を出てそのまゝ物干へ上つた。春の曉は寒かつた。冷たく眠つて居る瓦の波が際限なく續いて、所々屋根の上に並べてある盆栽の緑は灰色の湖面に浮ぶ萍のやうに見える。すく／＼と立つて居る白壁の土藏は大江戸の繁盛を飾る日本橋の結晶だと云はぬ許りに構へて居る。由松は駒込の生家と思つた。汚い乍らも三坪の小庭には柿もある栗もある。霜時には藁の衣物を着る大きな蜜柑もある。それから本郷の追分と思つた。追分の八百屋と思つた。思つた處でない一夜中、まんぢりともさせなかつたお七の事は、こゝ二ヶ月許りは由松の頭

を占領して了つて居るのである。三月十五日！こんな日が無ければいゝと思つた。それが一日暮れ二日暮れとどう／＼その日も明けはなれて了つた。十五日はお七が鈴ヶ森で火刑になる日だそうなる。五日前、湯屋で聞いた時話して居た奴が敵のやうに思はれた。十五日なんかと云ふ日は曆から引抜いて大川へでも流して終いたいと思つた。今迄は長い／＼と思つた日が急に短かくなつた。昨夜店の大戸を鎖した時、いつまでも夜がついて此方を開ける時が來なければいゝと思つた。が雀の囀りを耳にした時はちつと寢て居られなくなつた。かうして風白い空を見上げながら本當に今日は十五日だらうかと疑つた。朝飯の時お三に「今日は何日かえ」と聞いて見た、すると「十五日ぢやわいの、おゝそれ／＼十五日と云へばお七が火刑になるそうぢや」と云つた。それでも不安で番頭にも聞いてみたら「阿呆ぢやな」と叱られた。そこで出て來た若旦那が中へ入つて三人でお七の噂を初めた。由松は自分の大切な筈を掻き廻されるやうな氣がしてふいと立つて朝の人通りをぼんやりと店から眺めて居た。

かう思ひつゞけ乍ら由松は道ゆく人などには目もくれないで歩いた。「おい小僧さん。氣をつけないやあ、可け無えせ、私ぢやからいゝが、性の悪いお武家なら大變だせ」と云ふ聲に驚かされて由松は夢から覺めたやうに四邊を見た。傍にはいなせな兄が苦笑して立つて居た。由松は知らず／＼水溜へ踏み込んで飛沫をその股引に引かけたのであつた。由松は慌てゝあやまつた。兄は「まあいいよ。これから氣をつけて行きねえ」と云つたきり行つて了つた。由松は突掛草履の勇ましい足どりを暫らく見つめて居た。それからは氣を配つて歩いたが一二町も行くに例の思ひに又囚へられ

て居た。

由松がお七と見知越しになつたのは何時の頃か判然しない。駒込から毎日、田町の寺小屋へ通ふ行き歸りいつも追分の八百屋の前を通つた。そこには彼より五つ六つ年上の奇麗な娘が居た。それがお七であつた。由松はいつも心待にして通つた。お七は嫣然して涼しい眼で會釋した。見えない時は何となく心寂しくて忙しそうな店も煤びた佛壇のやうに見えた。たとひ姿は見えなくとも奥から「思ひねの心からなるゆめ候か」と若々しい長唄が聞えて來る時は急に胸が開いたやうになつてすた／＼と足早に歩いた。かうしてゐる中にお七のお煙草盆は桃割になつた。由松は手も顔も墨だらけにして通つて居た。

一昨年の夏の雨の降る夕暮であつた。……………

「よいと……………」と息せき切つて早駕籠が來た。由松はいつの間にか芝の大通へ出て居た。駕籠は疾風のやうに駆け抜けて仙臺侯の邸に入つた。何かと行人は怪訝そうに見返へる。由松は百里の北から齎らした報知しらせの何たるかを考ふる暇もなく、すぐ眼を伏せて雨の夕暮を思ひつゝける。

……………それは横しぶきのする激しい雨であつた。父の代理で遠い親戚へ悔に行つた歸りがけ、阿部様の御長屋の曲角で横花緒を踏み切つた。辛つらとの事お七の家の前まで來ると急に駒込の方から吹く風に傘が逆にこかれて呀つ思ふ間もなく亦前緒が切れた。此日に限つて白足袋を穿いて居た。でいつものやうに裸足になる氣になれなかつた、一帳羅の衣物は濡れる。雨はいよ／＼激し

くなる、途方にくれて泣き出した。丁度この時奥から出て來たお七は此方を見て手招きした。由松は猶更聲をはりあげて泣いた。お七は一寸眉をよせて、庭を下りたかと思ふと駆け出して來てぐい／＼手を引張つて家の中に伴れて行つた。

その晩、八百屋へ御禮に行つた由松の親父おやぢは草本を懷にして歸つて來た、お嬢様から云つて出してくれた時は、お正月、雪駄を買つて貰つたよりも彼には嬉しかつた。草本は一枚一枚に繪があつて餘白の處には平假名でびつしりと何やら書いてあつた。その一字一字を讀まうとしたが、わからなくてやめた。數多ある繪の中で彼に一番氣に入つたのは、櫻の花が今を盛りと咲き亂れた大寺の鐘樓の下で、一人の美しい娘が舞ひをして居るのであつた。お七に似て居ると親父に云つたら冗戯ぢやねえと嫌な顔をして睨んだ。彼には何故親父があんな顔するのか分からなかつた。

由松はこゝまで考へてふと前を見た、武家の娘らしいのが女中と仲間とを伴れて一二間先に行く。後姿がお七そつくりに見えた。由松は足早に通りすぎてそれとなく振返つてみた。眼元から口許から、顔の肉付からさうしてあんなに似たものだらうと思ふ位いふちう生寫しであつた。彼は自分の眼を疑つた。暫らくして又振返つた、見れば見る程よく似て居る、由松は腦の中を熊手で掻き亂されたやうに感じた。お七は武家の娘ではなかつた。それのみか今日は刑上の露と消える身の上である。由松の眼は涙で一杯になつた。彼はとづくに自分か何のために今芝まで來たのかを忘れて居た。由松は濕む眼に増正寺の赤い山門を、翠の森の奥に見た。翠のところ／＼には春淺い櫻の心持赤い梢が、雨上りの薄化粧に淡い温かさを漂はして居た。由松の聯想はこの寺から神田の天神に飛

んだ。一昨年の夏祭りの夜、由松は雑沓の中で同伴の者にはぐれて了つた。心細い思ひを抱き乍ら人波に押されて昌平坂の學問所の前まで來た。此處は人通りも疎なので由松はほつと息をついた。すると向ふから神田小供連と赤地に白く染め抜いた萬燈を振り翳し二十人餘りの腕白盛りの一團がやつて來た。その一人が由松に目をどめて「何まご／＼してゐるんでい、臍抜けめ」と罵りざまベツと唾を吐きかけた。由松は拳を固めて見たが相手の多いのに、どうもならず、口惜しさに身を震はした。彼等は多勢を恃んで「弱虫」「馬鹿野郎」と口汚なく罵つた。由松はどう／＼われを忘れて飛びつかうとした瞬間、彼の肩を抑へて蔽ふやうに、つゞと出て「江戸子が弱い者をいぢめでもようござんすか」と云つた人があつた。それは結綿に結つたお七であつた。暫らくあつけにとられて居た小供連は「可笑しいな、女の袖に縋つてゐる」とまばらに嘲し乍ら向ふへ行つて了つた。由松は無言のまゝ涙の目にお七を見上げた。お七は頬に笑を湛へ乍ら見下したが眼は矢張り濕んで居た。去年の春、由松は今居る日本橋の質屋へ奉公に來たその前の日、八百屋を訪ねたら、お七は長唄の御師匠の許へ行つて居て留守だつた。それから初奉公の不安の念に囚へられ乍らその日／＼と送つて居た。忘れもせぬ九月の八日の夜は寝苦しい晩であつた。由松は躑躅の花の咲いて居る山路をお七に伴れられてゆく。何處まで行つても果しがない、躑躅の木は次第に太くなつて終いには二抱も三抱へもあるやうな幹が見ゆる限り蠹々と立つて居た、日傘程に大きい花が萬遍なく青い空を遮ぎつて手首が赤う見えた。お七は／＼行く。唄ひながら行く。由松はあの花がお七の身体に落ちかゝらねばいゝがとほ／＼し乍ら隨いて行つた。躑躅の森が漸く盡きやうとする

時お七はつとふり返つた。途端、燃えるやうな花房がぼたりと落ちてお七の姿を吸ひとつた。呀と思ふと由松は池の中に陥ちて居た、――夢はさめた。追分の火事はその晩であつた。由松は翌日それを聞くと、主人に願つて駒込へ歸つた。親父は「八百屋さんも大變な事になつてのう」と由松を見るとききなり云つた。由松は親父と二人で焼跡の手傳に行つた。一日灰にまみれて働いた、そこでお七の父親に逢つた。いつも乍ら愛憎よく「遠い所をよく來てくれたのう」と云はれたのが由松には身に泌み／＼と嬉しかつた。日暮、彼は一家の避難所であつた吉祥寺を尋ねた。その時見たお七の顔が妙に氣にかゝつた。彼は重い心を抱いて日本橋まで歸つて行つた。

兎角の中に二ヶ月許り經つた。酔拂ひの浪人が店に來て手討にするの何の威張り散らすので皆が弱りきつた夕であつた。由松は質屋奉公がつゞ／＼厭になつた矢先、親父の許から八百屋の家も今日が棟上だと云つて來た。由松は此處を暇とつてお七の所へ奉公したら／＼に面白いだらうと思つた。毎朝、市場まで車を持つて行く。あの獅子鼻の長さんが曳いて自分が押す。いや、自分が曳いて長さんが押す。歸つて來るとお七さんがお苦勞だつたねと云つてお饅頭をくれる。いつか常盤津のお淺へがあつた晩、頂いたお菓子に甘かつた。な／＼その日一日は取り止めのない事に思ひ耽けつて居た。その日から一月と經たぬ或朝であつた。江戸中を振れ歩く讀賣が「本郷追分八百屋の娘」と聲高に横町の床屋の前で節可笑しく唄つて居た。使の歸りがけ通りかゝつた由松は胸騒がして立どまつた。一枚買はうと思つて懷に手を入れたが一文も持つて居なかつたので、氣もそゝろに家の閤をまたいた。すると番頭は「おい、由公、大變ぢやないか」と變な笑ひ方をし

た。由松は唇を噛んだ。讀賣の傳ふる處はかうであつた。お七は吉祥寺に寄寓する間に小姓の某と戀に陥ちた。新築の家に引戻された彼女は、男戀しさに我家に火を放つた、家さへなくばと思つたからである云ふ。が由松はその理由を信じなかつた。あの勝氣なお七がその様な事をしたとは何うしても受取れなかつた。由松は此日晝間は何氣なく働いて居たが人目ない床に入ると堰きどめた涙が一時に迸り出た。

それから由松は苦心してお白洲の様子を聞とつた。奉行はお七に十五であらうなと噛んで含めるやうに云はれたのを、お七は十六でござんすと何處までも云ひ張つたと云ふ。人はそれを聞いて、お七は無邪氣だ迂愚だ云つた。けれど由松は嘘を吐いてまで助からうとする様なお七ではないと思つた。一度は戀に迷ふて無分別な事をしたにしろ、恐ろしい牢獄の夜な夜な、こし方を思ふてわが行の非を悟つた時、必ず死んで罪を償はうと決心したのに違ひないと思つた。が、あんな優しい人を火刑にすると云ふ公方様のお仕置は餘りだと思つた。昔語りに聞いたやうに神様や佛様があつたと奇蹟を垂れてお救ひ遊ばすだらうと思つた。……………

ふと由松は頭を上げた。此時彼は四邊の人が騒がしく駈けて行くのを見た。由松は何の考へもなく一所になつて駈け出した。大なる力が無理に自分を引張つて行くやうに感じたのである。金杉の通りは人垣で動きのそれぬ程であつた。由松は立止つた。

行列が來た。人垣はなだれを打つて押し寄せる。口々に云ひ罵る言葉は唯がや／＼と動搖を作つて居る許りである。眞先の役人は群集を叱した、由松は爪先で延び上つた。馬上に白い囚衣をつ

けて縛められて居るは年若い娘である。——、嶋田の鬢の亂れかゝつた、青白い頬は春の午後の日
に照されて居た。馬は靜かに／＼近づいて來る。由松は群集を押し分け掻き分け、われを忘れて
飛び出した。役人の制する隙もない。彼は馬の前に身を投げた。馬は二三歩後ちさる、馬上の少
女は一目見てぼつと顔を紅くしたかと思ふと眼を閉ぢた。役人は、はた／＼と駈けよつて由松を
引き起した。起された彼の眼は異様な光を帯びて居た。彼は突然彼人の三尺棒を奪つて馬の尻を
したゝかに撲つた。馬は驚いて一參に馳せ出す。彼は勝誇れるものゝ如く手を拍つてお七の後を
追つた。

春の日は漸く暮れやうとする。

獨白の塔

成程此塔は高い。

これでは随分高いな。あの石段から仰いだ時は、高い事は高いがこんなに高いとは思はなかつた。
妙な形の塔だ、白壁の光の強い厭やに、硬は張つた塔だと思つたばかりだが、こう上つて見ると、
随分高い。あの人間の動くのを見て居ても眼まい立ちくらみだ。こんな塔から落つこちるのは眞
平だ。試に赤い臍が、あの石燈籠の頭へ引つかゝつたとして見たら、それこそ臍が、デラ／＼

と赤い舌で笑つて居る悲しみなんて、そんなでもない事を詩人に云はれるんだ。一体詩人つて奴も馬鹿か狂人でなければ、とてもあんな所謂常人の云ふ事の出来ない、囁語を並べ立つて得意になつて居られまいが、詩人の頭だつて満更ら空想の事物を取り扱ふのでもあるまいし、矢張狂人の囁言の材料を興へる世の中もこれで變はつて居るに違ない。違ひないも糸瓜もあるもんか、お日さんが東から出て西へ落ちるぢやないか、第一それから變つて居るんだ。豈に人間の心の變化なしとせんやだ。然り而して、——おつと、鳩君、糞を頭の上でふつてくれちや、糞ふりおはすの洒落ぢぢぢやないせ。澤山居やがるんだな八幡様へ行つたやうだ。澤山居るな。エ、澤山居るな。翔つた。翔つた。残つたのは君御一人か。は、君は可愛い腫をして居るわ。鳩の腫のやうだなんて、デコさんが詩人振つて、ぬかしやがつたが、實際愛つてものはこんな感じがするもんかね。柔かくつて、しかも光があつて、ピリンとして、然し恐らく、デコさんの解釋は失戀を度外視したのだらう。僕は失戀を決して柔かいとは思はんな蛭蝨が夢の搖籃に入られて、塩をまかれて、揺れながら体が融けてゆく、その時の蛭蝨の苦痛な感が、よく其間の消息を傳へ得るだらうと思ふんだが、惜い哉蛭蝨君言葉がないんだから仕方がない。沈黙の虫だ。沈黙——此塔も沈黙だ。癪にさばる程沈黙して居やがる。あの繁華の街を冷やかに見下ろした沈黙の塔だ。その沈黙の塔の上に、此沈黙の人が何にを思つて居るんだらう。問はれて名乗るもをこがましいが。今まで何んだか思つて何んだか饒舌つたぢやないか。お月さんは圓るいよ。お日さんは赤いよ。沈黙の人もよい面の皮だ。あれ見やしやんせ、阿呆鳥か。

「阿呆、々々」と鳴くぞえなど。本統に鳴いてら。畜生、人を馬鹿にして居やがるな。それ聞いた。それ饒舌つた。と眼か云ふ。それ見た。それ思つたと、耳か云ふ。口か云ふ。一体人間の官能は相關聯して居て、しかも關聯して居ないやうだ。但しこれは心理學の素養ある人に聞かせる言葉でない。又鳴いてら。一体僕は鳥ほど滑稽なものはないと思ふね。黒い髭、黒い目、黒い足、黒い影、而してその動作が、極く黒い。あの顔に赤い髯をつけたら、鼻の上に赤い柱が立つて居るなんて、ラッパ節にでも作られる處だらう。然し兎に角僕は世の中に彼奴程滑稽な奴はないと思ふ。彼奴程愚鈍なやうで伶俐な奴はないと思ふ。若し人間が彼奴のやうな行動をやれたら、剛いもんだと思ふね。蛙が

「ブレッケツケツキス」(振へ、ケツケ盡きず)と鳴くなら、鳥はハウプトマンに聞かしたら「阿呆だ。阿呆だ。利巧だ。利巧だ。阿呆ぢやあるまい。利巧ぢやあるまい。アホウ。アホウ」と鳴くのに違ひない。違ひねえ、違ひねえ。實際彼奴は鳥類社會の外交官に、てつきり相違はあるまい。おゝ寒む。冗談ぢやないせ太陽様、もう君は沈むんぢやないか、「夕の雲を淡く透つた光が雜然と横はる人寰の間を縫うて走つた時、町々に黄いろい灯火がともされて夏の夕か來たのだ」とは誰だか、何にしろ大文豪の文句な筈だ。筈だが滑稽だ。失敬これは僕の文章だつた。然しね君、お屋根の鳩君、そうだらう、見てくれ給へ、光が縫うて走つたか、くけて走つたか、知らないが、兎に角、お日様が西へ落ちてさ、世の中が眞闇になる。嗚呼悲しい哉人は眼が見えない。それで、燃える何かをつける。於此わつと人間が額合はせもしないで、夜の街といふ處でも、夜の家とい

ふ中でも自由に、歩ける。轉ろがられる。そうだらう、ね、君、事實に徹して見給へ、それ／＼黄
ろい火がついて居るだらう。ア、あの灯の下を通る人を見給へ、蟻を笑ひ、蛆を嫌つて居る人
間が、小さいぢやないか、蠢動ぢやないか。纏れ合つて歩むとか、ほぐれ／＼て歩むなんてそれ
は詩人の用語だが。蠢動々々、ヤア車が來たぞ、何んチウこつた、車夫は單に足を前へ／＼と動
すのみのものだ。闇へ消えた／＼。おつと美花が咲いたぞ。月見草が咲いた。黒い髪は長いな。
白い浴衣が肩を這つた工合。女人禁制。々々。——ヒヤッ、え、兵六玉め！、何んだか頬へぶつか
りやがつたな。する／＼頸の中へ入つて行くな。あゝ、落葉だ。銀杏の葉だ。人をたまかしやがる。
成程風が起つて來たのだ。下から渦卷いてどほん／＼と煽つて來る。寒い。寒い。——梵鐘が鳴る
ぞ、天地の萬物皆聞け。一つ鳴つた。二つ鳴つた。三つ／＼え、鳴らないか。おや流星だ。青い
長い尾、スーッと走つた。星の帳にかゝつた幕が下ろされたんだ、燦たり、煌たりだ。
何時まで居たつて仕様がなから下りよう。腹がすいた。
あゝ、お月様が赤く物干場の竿の頭にチヨコナンと引つかゝつて居るよ。

五味溜のさめき

遊

芳

貳拾錢の男

一、猫の骸

仕事仕舞の流笛が鳴つた、陰氣な赤黒い工場の煉瓦門を出て來る——一人、二人、ぞろ／＼と大
勢——、髪の毛に油氣のない青い顔の女工や油にじみの汚ない小倉服の男工などが入れ混じつて
靜かな夕暮の空氣の中に長い息を吐いて、淋しい笑を浮べて饒舌つて來る——黄色い聲でガ／＼
と——、どれもこれも瘦せた影法師の様に細つそりとした輪廓の茫とした姿だ。影法師の一人に
自分も居る、門の外の柳の下には瓦斯燈が夕靄の中に黄色な淡い光を放つてゐる、其の光の中に
自分は立つた、そして自分を眺めて見た、固く握つた拳を開いた時、掌の中に貳拾錢銀貨が一枚光
つて居た、——一日の工賃である。今朝星を背負つて此の門を潜り込んだからは渦の様に巻き上げ
る煤煙の下に、煙突の陰裏の低い薄暗い小屋で、汚ない急がしい聲に包括くわくつて紡錒くろの糸を手繰つて
汗みどろに働いた。もう手繰り切れなくなつてはつと吐息をついた時、サアと言つて一枚の銀貨を
投げつけられて、黄昏の薄暗い「時」の中に吐き出された、長い其の間には明るい世界から埃だらけ
の曇つた窓硝子を透して赤い色や青い色、紫色などが閃めいて天女の樂の様な歌が唄はれたかも
知れぬが盲目になつて聾になつて夢中で働いて居たから全く知らぬ、そして貳拾錢が汗と吐息の
結晶で自分の生命の全体である、こんな事をそれから考へて居た。足下あしもとに猫が一匹横倒れて
居る、死んだ猫だ、腐つた腸の中から陽炎の様に發散してゐる嗅い氣が淋しく悲しく魂を浮し
てる、自分を此の猫に比較べて見た時自分が生きて居るのかしらんと胸に手を當てゝ見たが心臓
がコト／＼と靜かに動いて居た。此の猫は宿無しだ、空巢を狙つて米櫃の蓋を開けて戸棚から

魚の後尾を引っぱり出して喰つて、行き當りばつたりに生きて居る、行き當つた一昨晚の寒氣に凍死したのだと想像で腸を裝飾つて見たらフト胸の底が冷たく感じた。一日中懸命に手繰つた糸の端から引っぱり上げた此の銀貨で苦しい明日を當に生きるのだ、そして死ぬまで續ける氣である、猫は短い命で死んだが自由の空氣に生きて居たと思ふと猫が懐しくなつた。

二、赤い文字

眼を上げた時向ひの居酒屋にもう灯が點いてゐた、戸口の潜り障子に大きく書いた「酒」と云ふ赤い文字が酔ふた時の聯想を促して自分の胸に輝いた。酔ふた人間は大きな世界を小さい胸に叩き込んで仕舞ふ、恐ろしい時の壓力は何時でも此んな時肩からこぼれて落ちて汚ない下界に跼蹐して居た魂が高かく中空に飛び離れて漫歩しながら黒い世界を瞰下してはゲラ／＼と笑ふ、其の時始めて人間は詩を美の生涯に束縛られぬ自由に住むのである、明日の世渡りに苦しい工賃の貳拾錢を掴んだ自分は短い命で死んで居る足下の猫すら羨んだもの………
赤い文字に引きつけられて歩いた時自分の目前を横切つて組合せた若々しい二本の手が其の指に二つのダイヤモンドを輝した。」

ヒラ／＼の丘

一しきりの風に居堪えて花はヒラ／＼と眞暗な虚空に臙げに白く一篇の哀史を乗せて散つて行く。其時自分の花の幹に寄つて丘の上に立つて居た。丘の底は大なる町である。町には數本の煙突が粗らに立つて其の間にトボリ／＼と大きな建物が暗い空に正しい輪廓を畫してゐる。未だ宵

暗の重い空氣の中に町の灯は爛々と輝き煙突は尙ほ渦巻く煤煙を吐いてゐる。何れも此の鈍色衣の蔭に明るき界の餘利を争つてゐるのである。車の音、足の音、叫びわめき罵り………總ての響動は雜然として町の空氣に浮び上つて静けき暗をぬけて鋭敏なる自分の耳の鼓膜に響いて来る、自分は物に襲はれた如く感じて兩手に顔を蔽ふた時、血の氣の失せた頬の冷たさにホット吐息をつえた。其の時頭の裡に「あゝ厭だ、自分は何故こんな所へよば／＼登つて來たのかしら」と此んな叫が斷續的に響いた。自分は眼を閉ぢて想に沈んだが胸の奥底にあの汚ない叫喚と響動が水底に鳴つた沈鐘の音が浮び上がる様に深く振つた。

自分は此の響動を聞き堪ゆるには餘りに勞れて仕舞つた。汚ない町の色を寫すには自分の眼は餘りに聖いのだ、今夜此所へ登つたのは之れ等の厭やな刺激を避けたいからではなかつたらうか。けれどもあゝ！自分の足跡が町から續いてる限りは矢張りあの陋い音と燈火に纏られねばならんのか」と思つた時胸の上に苦しい重みを感じた。それで自分は深い谷の底に唯だ一人石棺に入られて冷たい地の下に眠りたい氣がした。フト足が地を離れて遠く高かく紅塵の下界を去つてゆく様に感じた時自分の頭の中に白い己の死骸が冷たい氷に包まれて浮んでる様に覺えた。生きてゐるかしらと胸の上に手を置いた時緩漫に動いてる鼓動の音を聞いた。鼓動の間隙を傳ふて

汝！世に生きんと欲せば

急げ！あの町に走れ――

若し汝響動の音を嫌はゞ

笑って「死」に叫べ——

全身にしみ渡つた聲だ。ハットして自分は夢想した矛盾から醒めた時眼を開いて靜かに町を見下ろした。

彼の燈火の下には自分と同じ數萬の心臓と肺臓が急がしく動いて忙しく呼吸してゐる。あの煙突よ、あの建物よ、あの燈火に至るまで町の總ては其の絞り出した血と呼吸した空氣とで築き上げられてゐるのだ而かも建造物の總ては「苦しい」と唯だ一語悲哀に叫んだ無限の聲に塗り込められてゐる。あゝ市街の裏に立てる人は、憂の空を天駆ける魂は苦しみの涙を盛れる幾多の壺、苦しみの油汗を湛へる幾多の池が青く燃ゆる毒惡の焔に蔽はれて煮えくり返えつて痛き刺戟に其の暖き濕に充てる腫の乾くを覺ゆるであらう。虚飾！偽善！假裝の見えに欺きの笑を浮べる汝罪惡の町よ、汝が横たえる黒き骸を掩擁せる聖き自然は純水の如く無色である。汝の前に立てる我は羅刹が一口のバージンの如く慄くよ。あゝ見たくない——あの市街——何うしても厭だ、あゝ厭だ」と叫んで自分は再び眼を閉じた。丘の底へ暗に消え失せた片々の花瓣の印象が胸の奥底から浮み出たが深い——暗を辿つて罪惡の町に落ちて行かねばならぬ其の哀な運命を思ひ起こした時胸の痛を切に感じた。自分は星を頂いた天使が黒百合の如く咲き亂れてゐる「惡の華」の叢に舞ひ降りて行く悲しい幻想を抱いて泣いたのである。

ポーッと胸に浮んだ淡い影の様な晝。——天使が叢に降りて金色の翼を収めて安らひの眼を見張つてゐる光景を明確に意識した時、自分は思つた——あの煙突が煙立たずなつたなら、あの燈火が消

滅したら、そして響動を抜き取りし街が沈黙の蔭に靜平な眠に包まれたなら、暗に散つた花瓣は白露の甘き抱擁に微笑むだろうと。（ホラ一つ消えた、二つ消えた、街の灯が段々消えてゆくんだ——あゝそろ／＼罪惡の華が腿色する……………）
そうだ——其の時になつたら自分は此の丘を降りてゆく。

塾生活

S

生

近時尤も慶す可きは塾勃興なりとす。徒に下宿屋の不親切をのみ啣ちさらでだも鋭き神經を更に鋭からしめんより趣味を同じふし主義を共にする數名相寄り理想的生活の一端を開くに若かず。之校風振起の近徑なり、今創立已に十歳を経たる某塾に依頼して塾日記の一節を藉る。若し將來開塾の士に幾分の感興を供し得ば幸甚。（委員）

九月二十一日 轉宅

今日は塾も引越した。本多町を引き拂ふた塾は新學期の新しい香と共に其美姿を古ぼけた一枚の看板によつて仙石町の荒宿に移した。或る夜萬籟寂として音なき頃沛然として至つた雨が華胥に遣ふA君の寢顔を浸した事實がA君畢生の動機となり遂に轉宅が決行されたのだ。笠を被り洋服をつげ草鞋をはき古來未曾有の裝立で手づから車を引く者もある。七人の中には眞綿にくるまつて風にもあはぬ坊ちゃんもあつたらうにさりとては〇〇塾の殘酷さよと僕は嬉し涙を外套の鈕で拭

ふて見た。

夜の七時に辛うじて全部運搬済み、寄つてたかつて牛肉をついた時の甘さ、恰度古事記にある八頭の大頭蛇が酒槽へ首をつき込んでゐる様な風、手傳へに來た三名合して十頭の大蛇とても言はう。鍋の中にも生存競争が盛に行はれて居る、但し逆自然淘汰。荒宿の婆さんの羈絆を脱して來た八人の暴くれ男も今日は籠の中から逃れ出た七匹の小雀の様に感じた。人間も不思議なもの、大きくなつたり小くなつたり吹けば膨れ吸へば縮むあの軽い風船玉の様だ。雇ひ婆さん未だなし、二三自炊奇談あり。

(一)米を焚くに當り水加減説三に分る。○君説は米のある所まで水を入る可しと主張す、此れ妹のやるのを實見せしこの根據あり。中々頑固、第二K君の説二升の米にては水を米より二三寸にす可しとの主張、下女のやりし既往の事實に基く、第三はF説曰く凡そ五六寸とす可しと、斯道の大家H君悠々馬を陣頭に進め叫んで曰く、余は過去に經驗を有す余に一任せよと是れを見れば果然K説中鵠を得た様だ。○説に従へば米は粒々化して炭となり遂に變じて灰となる。F説に従へば米は液化して更に水分を蒸發し一個の凝固体とならむ、あゝ亦危い哉。

(二)A氏早起、茶碗をカチャ／＼洗ひしは感心、他は床中にありて冷水の耐へ難い事を想ひやり寒心。

(三)逸名氏澤庵桶に手を突き込み吃驚して叫ぶ曰く、零度下四。塾員中の自稱炊事通S君未だ火を焚くの術を知らず。嘲笑の矢蜩の様に集まる。S君例の憤慨をなせ共如何にせむかゝる場合に

憤慨は毫も効なく一時間を経て辛うじて焚き得たと、僕未だ其信僞は知らねどK君が痛快を連呼した事だけは事實として保證す。

轉宅當時A君のまめ／＼しく働いて呉れたのは特に旌表する必要がある。轉宅當夜談荒宿時代に於ける鼠族跳梁の様に及び遂に此の家の鼠の有無に及ぶ。M氏髻なき領を撫して曰く、鼠は今頃號外を出して居るだらう。秀句と云ふ可きだ。

十一月三日。紀念日 (塾會)

今日は天長の佳節である。塾が初めて呱呱の聲をあげたのも丁度十年前の今日である。今は京大に行かれたN先生などが育て上げられた我が塾の生の叫びが活ける、四高の歴史に沿ふて今日に至る迄興味ある十年の波動を以て塾十歳の歴史を彩つて居る。二三日前玄關近く八疊の爐を囲んで塾生會議は開かれた。社會の平均とはよく云つたものだ。社會を作る凡てのものは凡て押すなく／＼で而も押されて行く。人の頭に押され／＼て其れが凡ての物價を押すと其處で家主の目が太くなる。太くなるぞ。○塾の本陣まで波及して來る。此處から割り出た家賃減少問題が當日の花であつた。此の問題が消えると同時に十周年祝賀會の動議が出る。勿論異論の出よう筈なく直に可決。A君とS君は準備委員に推された。

今日は其當日である。塾生七名二百目のビーフを引つ張り裂きつゝネギは血液の循環をよくすると説く筍子あり。音聲を良くすると悦がる自稱聲樂家あり。とに角ネギを云々するは、ビーフの正味の極めて少なく大食家連の唇を濕すに足らぬ故と知る可しだ。

其中M先生來臨、續いて諸先生來會せらる。依つて座敷(十八疊)に圓陣を形づくる。外泊の諸君も五名あり。雑談頻りに起る。されど局部と局部との迫合にすぎず。五人の師長あり、七ツの口あり。外泊諸君の口もあり。よし會衆一齊に同せなく其中一人の口を藉り衆人之れに耳傾くる提議が必要だ。快意之事莫若友、快友之快莫若談。しかも談の快なるは各人其信する所を述べて憚るなき處に存するのである。

果然砲門は開けた。M先生は禪味タツブリに曰く人は自分の短所を知ると言ふ事は極めて難い。極めて難い所其處品性淘汰の必要がある。たゞ世に理性を以てのみ活きんとする人はど憐なるはない。ニイチエ罵倒論者を以て目さるゝF君美的生活論と聞き損ねてか色漸く動く。A君之を目撃し煽動甚だ勤めたのでF君むきになり熱を吐いて大に肉迫した。S君美的生活を良く解し其善美を知るものならば何を苦しんでか理想主義の前に服さむやと咆哮すれば外來のY君美的生活主義はたゞ之翻案主義のみと嘲弄一番した。

口角泡を飛ばす聲、センベイを囁る音、騒然として共鳴して居る。漢字廢止説も出た。A先生は漢文廢止に先ち思想界の危機を想像せよと説かる。先生の砲先漸く遠雷の響あり。提出者Y君辛うじてセンベイを食ふの勇氣出づ。其間にK先生の史見出でM先生の十とせの述懐談出づ。

かくて更漸く深く庭前にはもう秋聲はいたましい囁を送つて居る。美的生活の遠雷も何處にか失せ、センベイはとくに影をひそめ、雑談も其の音を絶つた。やがて先生去られ外來諸君も去られた。思ひ出多き一日は今方に過去帳の裡に消え去らんとして居る。卓然とし雲霄に聳立した盛時

を追、し今の我が身果してこの遺鉢を傳へ得るや否や。眞に千斤の石を左手して冷然思ひをこらすの難きを感じたのである。

一月二十日 冬の日曜

雪が積る寒さが増すも思ひ出の記の西山塾ならば此の頃は夜具の上に漬物石を乗せて寝る可きであるが矢張り寒さに堪えられないのか連りに爐邊が繁昌する。灯の様な氣焔が立つ。噪いだ果が空腹となる。ひるの食場は凄い光景を呈して居た。

夜は早くから皆な寝込んだ。をのこらも寝込み姿の他愛なさ、時に天なる神の入らしましゝてこの悪戯好きのをのこらよと睡れる胸に手して微笑み玉ふ。人間を優ぐれたと抽象するは野暮だと夏目先生も云はれた。矢張り人間は赤裸々の方が増しか知らん。(S生)

先輩の來訪

十一月六日

秋も漸半頃、例のしと／＼雨が降る朝であつた、恰ど木枯に吹かるゝ木の葉の如くひら／＼と一葉のはがきが舞ひ込んだ、これは舊塾生で現に法科大学に居らるゝR・K君から來たので用向は今夕六時に久々で塾を訪問するからと云ふのであつた。簡單ではあるがこの一葉のはがきは全塾生の若い血を躍らした、其の理由は只に君が筆舌に秀でゝ且つ精神家で嘗て南下軍の主唱者だつたと云ふばかりではなかつた、實に君は在學中なるに不拘本年度の文官高等試験に優秀の成績で通過

して居らるゝのである、一時も早く其の得意と元氣に接して見たいと云ふのが主な部分であつたらしい。

○〇塾特有の肉飯も出来た、今や遅しと御本尊の光來を待つ程もなくR・K君は制帽制服にゾックの靴と云ふ、かい／＼しい、學生らしい装束で「御免!」……其の聲に元氣が溢れて居た。やがてM先生も來られた、この楽しい會合に於ては、實質少ない肉飯も確に山海の珍味に勝つて味はれた、ミラクル!と云いたい位である。

さすがの豪傑連も、やゝ阻む色が見えた頃、例の温情溢れる如き笑を湛へて、Y先生が來會せられた、「諸君、これは酸いかも知れんが」と風呂敷を解かれると、數十個の蜜柑が躍るが如く轉げ出た、早速、手に／＼渡ると、好個のデザートとなつて、感謝と共に其の影を匿した、食ふ者、語る者、誰一人として口を休ませて置く者がなく、懷舊談が出る、先輩後輩の交際論が出る、各々深く吾人の胸底へ反響して居た、就中R・K君は最も快活な、何人をもチャームせねばやまぬ底な調子で、巧妙なヂェスチアールと痛快な皮肉を交へながら次の様な話をし出した。

○東京、京都孰れを選ぶべきか。

僕は少し法科大学のことを話して見たと思ふ、第一諸君の迷ふのは京都、東京孰れの大學を選ぶべきかと云ふ問題でしよう、兩者の優劣と云ふ一寸困難ですが文官試験を受ける人には東京の方が試験委員が多いから確に有利である、然し經濟のみから云へば京都の方が學說等は新しいかも知れぬ、東京は競争が激甚で京都は平和である、だから京都へ行くに適した人を擧げて見ると、第一、身體が虚弱で競争に堪へ得ぬ人、第二頭腦が劣等で學士の名稱さへ得ればよいと云ふ人、第三天才であつて外界の刺激なくして充分に其の才能を發揮し能ふ人等であらう、其の他は須く東京へ行くべきである、諸君、激烈な反抗に打ち勝つて名

譽の桂冠を得ると云ふことは男子の取るべき當然の道でないか。

○何科を取るべきか。

法科は大体五分されて居るが其の中何科を取るかと云ふ問題は各人其の好む處によるべしであるがもし茲に自分は孰れに適するかを自覺し得ぬ人の爲に參考にまで其の状況を述べて見よう。法律科では獨法の評判が甚だよい、英法は獨法へ入るには餘りに獨語に未熟な人或は特に此の方面に興味のある人が入る所である様に思ふ。法律は既に組織が立つて居るから創造の才餘り必要とせぬ、細心な人が此の方面に成功する様である、之れに反して經濟の方面はまだバーデン、ソイルと云ふて人の手をつけない部分が多いから創造の才のある人は之の方面には大に天才を發揮することが出来ると思ふ、判檢事辯護士になる目的の人は是非獨法科或は英法へ、高等文官志望の人は政治科へ入らるゝが一番よい。經濟に特に趣味のある人は經濟科に入るべきも經濟科と政治科は大同小異である、商科はまだ定評がない、第一教授に不足して居る様である。

○大學に於ける勢力。

法科大学内で最も眼につくのがやはり一高出身である、素より彼等の中に感服出来るものがあるが優等生の多いのも事實である、酒を飲むことは彼等の唯一の缺點であるが、もし彼等にして酒を飲まなかつたら更に以上の成績を擧げるだらうと思ふ、彼等が校長の思想の力は實に法科大学内に勢力ある一大潮流となつて現はれて居る、此の團體は實に新人とも稱すべきものである、彼等の思想の豊富なる實に羨ましい位である、思索と云ふ点に於ては確に地方高等學校出身は一步遅れて居る、また彼等には先輩後輩の交通が頻繁に行はれて彼のノートの授受など實に遺憾なく行はれる、また彼等は東京の空氣を多く呼吸して居るだけに其の事情に明い、大學内の呼吸などは充分に先輩から教へられて居る、また大學に轉じてからも外界の刺激に變化がないから特別に誘惑が増加する憂もないのである以上の諸点は凡て一高の特色で同時に地方高等學校に缺くる所である、之れ實に彼の向陵の健兒をして徒に名をなさしむる所以である、吾人は頭腦に於て一高と地方校との間、しかく間隔があるとは信することが出来ない、諸君は決して彼等に劣る者と早合点してならない、充分備ふる所あらば彼等を十分に凌ぐことは決して難事ではないのである。

○諸君の用意

先づ在校中は眞面目に勉強せられねばならぬことは勿論であるが願くば教科書以外に出来得るだけ多く讀書して貰ひたい、讀書

は實に思想の源泉である、思索と云ふ点に力を用ひない人は墮落し易い云ふことは一般に認められて居るのだから諸君は大に帝都の惡鬼と戦はんことを欲せば先づ健全な思想を養はねばならぬ、薄弱な考の人は必ず墮落の悲境に陥ること火を見るより明かである、また原書を読みなれることを力めて貰ひたい、此度獨法科の生徒が大半が落第云ふ悲運に遭遇したのも實に原書を充分に讀めなかつたためであることだ、本校でも本年は法學通論に原書の拔萃を用ひて居らるゝ様子であるが至極賛成である、尙諸君が出京の上は先輩の訪問を怠るのには甚だ不得策である、宜しく先輩より大學内の事情を聞くべきである、之れが成績に非常に關するものである、昨年の入學者で常に勉強し、頭腦もよい人で成績の案外惡かつたのがあつたが之れは勉強ばかりで先輩を訪はぬから其の勉強の仕方が拙であつた云ふことに起因して居るらしい、とにかく先輩後輩の親睦は道徳上から云ふてもよいことである、序に吾が母校に願ひたいことは常に大學内部の事情を調べて之れに相當する教育法を施されたいことである、之れ實に本校生徒の聲價を高からしむるの唯一の手段であるからである。

○文官試験に就ての経験

此度の試験で得た自信は、吾人の頭腦は、決して一高出身に比べて劣るものでない云ふことである、僕の頭位の頭は誰れでも持て居る否僕は他人より劣つて居る、僕は御承知の通り長く神經衰弱に冒されて居たので、本年漸く克己云ふ一種の精神療法で恢復したばかりである、だから何人にも在學中に文官試験を通過する資格があるのである、且つ之れをやるに卒業試験が非常に易く出来ることになるし、また將來就職に甚だ都合であるそうだ、だから諸君は奮んで在學中に受験せらるゝが得策だと思ふ、之れに就て注意して貰ひたいのは文章を鍛練すること、多くの事實をサンメーションする力を養ふて置くことである、文章の上手なのは答案に於て二割の得策があるし、また受験するには身長程も積み重ねたイトトを短日月に讀まねばならぬのだから今から之れ等を練習せらるゝも決して惡くはないと思ふ。

夜も大分更けた。先輩の口を突いて出る一言一句は痛切な余韻を胸臆に残して居る。食ひ残りの煎餅を嚙つて更に深い――先輩の追懷談を耳にした。

萬籟寂としてもう音も無い。廊下の燈火は風なきにゆれた。

和歌詠草

四高和歌會

○

其月

事多き嗚呼日なりき日記書きて燈火消す間の
輕き誇らひ

南國の夢を包みし玉の如赤き林檎を戀ひわたる
かな
享樂のあはき影をばしたひ行く群をめあての心
地して行く
新道の切り開かれし其の日より巡查の靴の音の
よきかな

一群はまた加はりぬ黄昏の杜を輪にまふひわ四
十雀

美果に照る灯火明くゆらぎ居る八百屋の前の心
地よき秋
居酒屋の群に交りて獨身の夜の長さを慰さめか
へる

とかくして歌とはなしぬ本地の疵巧にかくす塗
師に習ひて

影暗き湯槽のふちに足投げて興するまゝに秋の
夜はふく

河北潟蒲の穂波のゆれ／＼や湖心に浮ぶ木の葉
舟見ゆ

藻花

一筋の糸に縋りて洞深く木乃伊あさらばかくや
淋しき

○
水に住み水に花咲く河骨の花美みぬ熱病む我は

踏切りの左右鐵路のはる／＼と只直ぐなるが心
地よきかな

筆立の使ひはてたる古筆の二三本立つさびしか
らすや

○

まさな

はの暗き闇をすかしてほの白き蓮の花立つ秋の

けだかさ
老人の齒の抜けしごと大木の葉は散りてあり一
葉一葉に

秋雨にひたりし菊の大輪は涙につかれ倦みし姿
に

壁塗れる左官の脊なる白き紋高き工事の上に見
るよし

蛤城

秋晴れを出船の帆をまきあぐる滑車の音に神経
いたむ

夜の町のごよみの底を抜け出でて我は淋しう丘
の木による

雨に濡れて軒行燈の亂れ文字酒屋に淋しき晝の
三味弾く

白菱

横に押す車もあらばわれ乗らん男女の苦き顔見
て

落魄の骨にはた／＼衣うつ秋風寒き夕となりぬ
歡樂はしだれ柳にさら／＼と流れてあはき川沿
の町

糸切れて結ぶよしなし戀の曲色彩くづれよ／＼と
伏し泣く

静也

おとなしき性の君かな我胸を躍らすのみを例外
として

くつ脱に揃へし君が長靴の拍車にのりてい／＼と
なく朝

此の想去れよとばかり縁日の群衆の中を汗流し
ゆく

蠟燭の心を切る時一しきり明るくなるに心地よ
きかな

封筒の糊をしめして切手など貼るにも似たる心
安さよ

大詰の幕あく時に拍子木の音きく如き心地に語

る

三石穂

久

なぐさみに机に立てし人形の二寸の髪を秋の風
吹く

新開の町に残れる荷車の轍の跡の霜柱かな
やるせなく心倦む時なつかしき者を見る如停車
場に行く

時計いま時うち終りセコンドを刻まんとして起
る淋しみ

聴診器胸にゆらぎてよき聲すわかき血潮のさ／＼
めくらしき

我が影のさ／＼やかながら数々にうつるがうれし
水晶の珠數

しげる

何事か思ひて今日も野と別る秋風立ちて草白き
夕

うつろなる壁をた／＼けばぼ／＼と音する如き
哉

歌を作れり

○

讀むに倦み書くにも倦みてした／＼かに机を打て
ば錢の音する

悔の草疑の草茂り合ふ野邊に追ひきて君を失ふ
足もとに心おかれ猶全き戀の陶器抱き給ふ君
すまもの

琴月

人に倦み所にあきて西東五軒の宿を一年にかふ
沈む日は杜をく／＼りて町はづれ花賣る店と白壁
に照る

美絃

旅にして知りし小さき伶人の哀歌を思ひこほろ
ぎを聞く

「Sちゃんの靈に捧ぐ」と我れかゝん歌集の上に
紅く小さく

碧瑠璃の海よ白帆よ白鳥よ夏はうれしき磯小村
哉

筑波嶺や裾を捕へて利根川は眞晝大野を蛇にまね行く
客あらず白雲たゞに漂へる寂しき北のステーションかな

○

祐次

月を負ひ立てる我が影砂の上に暗きは闇の我が心かな

風寒く今宵も月に更けぬるをなほくりやまぬ糸の小車

○

聆川

風にゆれ白味がかる無花果の葉の裏見するいとかなしかり
立つ時と歸りし時と同じかる淋しきなりき十月の旅

黒塗の箱にうつりし我が顔の影のうすぎがいとかなしかり
自働車のたてしほりにつゝまれてひとりさば

とぼうなだれて行く
よれたる足をなげ出し野に寝ねぬかるきつかれの快きかな
いたましき追懷の根をたつ如く交殻をやき心やはらぐ
我が髪が床屋のゆかに捨てられて踏みにじられてあるがかなしき

ようもの云はず

井田 美絃

——はいらんはあまりにかたし詩の扉
せてて覗かん願ひとおぼせ。——

秋來ればようもの云はすうなだれて涙せし子を思出づるかな。
人見れば口籠る故に森に行き泣き居しわれの性

なりしかな。

君が歌は水仙切ると友禪の袖に淡雪はらふ子に似る。

雁啼けば徐ろさびしき故里に落髪數ふ母をおもひつ。

吾れ死なば白き小鳥となりて君住む嶋に鳴かと思ふ。

我が思ひ遠離の君の思出と空にもつれて降る雪と見る。

ぼんぼりや奈良の時代の繪巻物見るがやうなり廻廊の人。

呪はんに力なき身ぞ世の風に冷たう吹かれん身なりとおぼせ。

銀瓶を流るゝ水の音のごとき少女の歌は胸の戸を揺る。

御聲はいと艶きて聞こゆなり紅行燈に戯歌書く宵。

君に逢へば吸取紙がインクをば吸ふ時のやう胸迫るかな。
淋しきは死靈のあまた町毎に叫ぶに似たる冬の夜の風。
暗室の燈のごと森然と茂れる森にもゆる夕日は。
羞ひは温泉の如く絶えずわが小さき胸に湧く年は來ぬ。
梅の實を食む時齒なご浮く如き心地にありぬ君と行く宵。
冬されば尺餘に長き垂氷せし藁屋の家を北國に見る。

——あてもなう走る狂女の亂れ髪に
似たる歌よと自ら笑みぬ。——

四高俳句會句鈔

聯絡船明けつくを待つ夜長かな
黎明も洲明りとのみ夜の長き
岩を脚に渡す奇橋や鮎落つる
しだり尾の夜長逸話の更け過ぎて
村合併又も異論の夜長かな
笹鳴や落葉すべりに釣垂れて
道心を湖亭閑たり長き夜に
歸去來晩學の愚や鮎落つる
堤切れて根こそげ柳散る日かな
よべ落ちし星かな花野紫花ありし
棧道は工事難の爆破落葉かな
葛藤を流す漁村の鯨かな
北風や漁曆捕鯨の時ありて
書に學ぶ唐竹割も夜長かな
蜻蛉や不獵につく漁家の空

雨童
同
乙養堂
同
蛤城
同
同
同
同
同
同
天嶺
同

笛造る蘆切り干しぬ今朝の秋
落鮎や調度古びの名残宿
山遊記鮎鯖ふ頃に筆止めて
大越の喘きも花野來て癒ゆる
煙山と鏡湖と花野二タ名所
河水の逆流れ日や散る柳
休日の大門閉る落葉かな
曳網の總唄や鯨沖を過ぐ
長き夜や羽疲れ虫も書の上に
夕日さす蘭田刈り残る蜻蛉かな
川に出て橋見當らぬ花野かな
出遊に猿樂奏でを花野まで
模様置くに型にりもす夜の長き
腑に落ちて眠る夜長の圖按かな
染幕の火干せ香漏れも長き夜や
捨て鑛^か洋の夜長水際の薄光り
勸降を暗示す宴の落鮎や

天嶺
雲外
同
同
同
同
同
透樓
同
走月
吐風
絃子
同
同
同
同

鯖鮎の水に透き見ゆ瀬落つるや
子持鮎重々しさに瀬落ちたり
墓柵修繕見積りに行く日柳散る
散る柳名僧流人の綱とめし
妖雲と陰火と花野來て見ゆる

鷹^{まが}ひ錢

絃子
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
雲外

蜻蛉や上へ向け尻の鯖錨
櫓休めも下りの癖や飛ぶ蜻蛉
御國旗の見榮えも異域飛ぶ蜻蛉
今朝秋や水増す井戸のゆるみ繩
蠻地奇習

絃子
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同

まがひ錢 音に見分けや今朝の秋
八時蜘蛛縁起を思ふ今朝の秋
日計木植ゆまで竿や飛ぶ蜻蛉
歌心燃ゆ駕底すれの群萩や
松瘤がふくるゝ思ひ残暑かな
塾庭にかくし柿あり弟子知れる
銀杏高な柿底な處繪馬堂あり
襖皆草を畫けり蟲の宿
行軍途上吟
秋雨や屑石炭を積む人等
へだるさを雨濡れ薄頬を撫でゝ

雲外
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同

界標打つ評議も果てゝ銀河澄む
屯田の井戸堀る音引く秋の空
峽紅葉舟吞む岩出て又洞あり
鐵漿遺習ある京洛の紅葉村
繪貝干す濱沖風ぎの秋晴れて
朝寒や温泉上り客の白襦
啼かぬ鳥枝に動かぬ朝寒し
燈影長き岬の砧夜寒かな
標石を抱く紅葉の口碑かな
染汁の溶けぬ盥や秋の水

同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同

散文詩

いさを

そーと唇の戸を叩く、と、
白粉剝げた賣女のやうな
庸吉の血は、鈍い、だらしない
表情で、唇の破れから出て來た。

庸吉

夜が來た。
解放された
囚人のやうに、庸吉は工場の
門を飛び出した。何か空虚の
胸へ盛るやうな、甘い
果物を見出し度い。
ど、いそ／＼、
夜の街を辿り出した。

青い絹糸のやうな瓦斯の光が

強い歡樂の感觸に、かろく
おのゝいてゐる處女のやうな
若い對話の一連が、ふと耳に入つた。
吾知らず庸吉は立ち止つて
「枯骨の軋るやうな機械の音より
こゝろ聞えただけでも、まだ
此の方がましだ」と呟いた。……が、
すぐまた歩き出した、
明るい廣い通から
暗い細い小路へ曲つた。
好ましい物何一つ見出さず、

どう／＼家へ來てしまつた。

彼は空辨當へ心を詰めて
痛強く臺所へ投げやるなり
そのまゝごかりと倒れてしまつた。

「起さんかい」

宿の主婦に促されて

澁々起ち上つた。

そして物置の隣の

自分の三疊へ上つていつた。

そこには獨を詫びた二分心が

顫へて泣いてゐる。

その聲が薄い心臓の膜に
いたく反響へる、

「もう寝よう」

文苑



——何處へ行くんだらう——

獨語しながら寢床を出して
投げる様にして擴げて見た。
(これはどうしたんだ)
石のやうに堅い昨夜の夢が
まだ床にくっついてゐる、
庸吉は急に寝るのが厭になつて
ふいと戸外へ飛び出した。
十時も過ぎてゐるのに

漫言

軍容成らんとす

白根の峰秋色已にあせ、犀川の私語いつか枯れ渡り鳥も瘦せる北國の冬には生氣悉く息まんとするに幾し。恐る可き自然の力に惨しき潜蟄を惱む我が精靈に今微かなる生氣の蠢めきを覺ゆ。軍容は今や成らんとす。世は新陽の椒觥に酔ふ時西京洛の牙城に迫らんとする劍道部諸士が鐵蹄の響きを聞けば我血沸き我肉躍る。

情趣盡し難き滿山の錦を外にして悲憤耐へ難かりし百萬遍の一夜の思ひ出は更なり、歡聲三十六峰をゆるぐ迄と友が痛恨の筆あとを忍べば今更に云ひ難きおもひのする。白箭敵の容るゝ所とならず悵然として金城をあとにしたる友を想

へば「時しも御空に妙音聞ゆる」華やかなる野球部が功の賀宴にて歡喜のそこにそこひなき冷涙を禁じ得ざりき。柳絮頻りに飛び寒風外に狂ふ時も滿身の熱を漂したる無聲堂場裡憂々の叫びは云ひやらぬ深き思ひを宿したる也。

我鳴かず。而かも我鳴かんが爲めに鳴かず。此の處大なる飛躍あり。紛々たる毀譽の外に立ち靜かに涵養し得たる鐵腕の力は北辰健兒の意氣を心行く迄漂はせ三尺の秋水洛陽軍の心膽を寒からしむべし。思へば若き血潮の躍る。

陰雲天に滿つる尾山城下、蒼白萎靡の徒一本のノートを擁して超越の旗色鮮にたい暗空の下に呻吟して求利の奔走に疲るるある時吞天の意氣と猛烈なる練習とは勝負を離れて優に劍道部の歴史に光輝ある數頁をものし得るに足る。彼の星宿新に回り青陽の光天地に滿つる時待たるゝは洛陽仇讐の大快戰。(宗玄生)

思想界情眠永し

北辰思想界一度花誘ふ惠風の香に酔ふて、昏睡甚だ深し。春風徐ろに至らば春蕾笑ふ時もあらむに我が思想界は永遠の眠より亦起つ能はざるにあらざる乎。

自然に近づく可しとの要求の叫びが一度文藝の歸趣を迷はしめてより推移したる時代の事象を偲べば渾沌遂に盡くるなし。宗教今や光消え道學遂に力盡き、彼「神秘」の絲園に隠るれば我自然の花に戯むる。新舊相呪ひ相搏つて極まらず、阿毘叫喚處々に起り焦熱地獄の慘狀眞に目睹す可き也。然れ共北辰思想界未だ醒めず、靜寂まこと死人に似たり。

一校の意氣が一本の鐵棍、一個の熱球によりて動くが如く一校の生氣は靈性根本の問題に對する痛切なる悶の聲によりて躍る。思想問題の爭

議盛なる時代にありし賣校分子の活躍を聞かず。若し眞面目なる思想問題に觸れて情眠覺醒の警鐘を打たんとする人あらば尊むべき執着の力に依りて不朽の譽を收め得たる勇士に對するが如く此の心靈沈痛の叫びに萬斛の信を吐きたる壯舉に對し不滅の鐵筆を運ばざる可からず。

大聲尊む可し。天真流露の懷更に尊む可し。思想界覺醒の率直なる聲は方に起らざる可からず。急轉直下、走馬燈の如く此の思想界の推移に觸れたる熱烈なる叫びは起らざる可からず。一歳三回提供せらる可き北辰會誌は存在の意義一に思想統一の根本に基き歸趣を明示する唯一の力也。然れ共統一は難からず。思潮未だ動かす。北辰思想界情民未だ醒めざるに秋風の響き微か也。(宗玄生)

存在の意義

金城三ヶ年は修學の時代にして研究の時期にあらず。與へられたる智識を其儘腦裡に貯ふれば足る。料を四方に求めて之を研め之を究め、工夫し、發見するは未だ其時にあらず。彼の記憶理解の能力が其發達常に觀察推理の能力の退歩に比例すもとより其の所と云ふ可し。

講談部は茲に立つ。雜誌部は茲に起る。偏倚なる教場内の科目が徒らに記憶にのみなづむの弊を救ひ他の智識を更に活用し了解し工夫し斯くて得たる見識を發表す。彼の往々吾人心靈の一角をかすむる一瞬の感想にして百代の眞理に優るあるよく人の見る所也。

筆と辯、誰か區々たる小技に過ぎじと云ふや。健全なる頭腦の運轉機は唯この二者に於て見得べきのみ。而して赤裸々とせられたる人格の欺

かざる反影也。

故に筆と辯とは實なるを要す。空なる可からず。口筆評價の定まる樞機一に此處に存す。兩部成敗浮沈の運命は此の間の一呼一吸によりて知る可し。頃者口筆あげて空虚の弊に走らむとするは決して喜ぶ可き現象にあらず。輕薄なる軟文學と駄法螺とが一般校友の意を得るは更に嘆す可し。唯時の力に依り人の知らざる間に新らしい竣功を得ば幸也。(宗玄生)

逝く秋

空は高い、地は廣い、荒蕪たる秋の野に立つ。紅黃紫白身を裝へて老秋の光さすがに影淡い。仰げば眠る白根の峰、ふせば潺々淺川の私語、自然が致す神秘の力はたゞ譯もなく我が胸を打つ。實在の生は決して自然に離れ得るものでないと云ふホイットマ

シの痛切なる叫が耳に響く。刻一刻と深いメチテーションに壓せらるゝ頭のそこに超越の聲がさゝやく。權勢もない。執着もない。金もない。點數もない。

瘦せきつた樹の上に赤い旗が動いて居る。ジッと見詰めると凡ての周圍が無になつた。果ては「我」の存在が疑ひ度くなる。然れ共「我」の疑ひは「我」の解決の第一歩だ。見つめきつた眼の力が旗の上から引き去らるゝ時嚴肅の氣は天地に膨脹して居る。眞面目の啓示は野に満ちて居る。立脚の地盤を確定す可き「我」存在の解釋が油然而して現出する。嚴肅の氣と眞面目なる力に壓せられた我が精靈には憧憬なく憧憬なく而かして不安なく恐怖ない。宰相となつて一國消長の樞機を握つても特待になつて羹望を集めても自己の精靈に不安を感じたら何んの効があらう。僕は人生の活文字に綾なされた僕の胸懷の記録

を此の雄大なる秋の前に提げ得るを喜ぶ。此の瞬間に寫さるゝ靜平な心の像は塵に満ちた世の塩である。

秋は偉らい。偉らい秋も息む事ない時の力には抗し得てもう逝くであらう。逝くものは斯くの如きかと云つた孔丘の嘆は今更に胸をつく。

(宗玄生)

鈴木穂花兄に呈す

青花兄、秋色漸く老ひんとして滿庭の虫聲白露に碎くるの時、兄は三浦、熊谷二子と共に我が雜誌部を去る。二氏は去らざる可からずして去るに兄は去る可からざるに去らざる可からざる也。今にして暗窓の下兄が雜誌部の三ヶ年を想ふ。一望の風露眞に恍として夢の如くに覺え候。兄が燦美の文字、眞摯の筆常に北辰文學の花と歌はれて四高文壇獨り君ありて心強からしむる

は校友の等しく認むる所に候。遮莫我が雑誌部が兄を失ふ苦痛よりは寧ろ近來振はざるてふ赤門文壇に兄が雄筆の現はるゝの一歳遅かりしを慨嘆措く能はざる所にして勃々の情を徒に吟腔に收めんとする兄が苦悶推するに餘りあり候ふ。而かも事は起る可くあらざるに起るべく餘義なくせしめられしに至りては心外言ふ可からず。杲然己を失ふもたゞに兄の天才を知る七百校友のみならんや兄自身の亦然る可くと存じ候ふ。

青花兄、世に詩的罪人なるものあり。彼の寂として落英青台に布き一痕の鎌月梢に隠るゝ時身を躍らし垣を越え馥郁たる花一枝を手折る。下りて走る數間忽ち嚙噬地上の塵を拂ふ笛聲至る。足いつしか止まり花枝掌中を離るゝを知らず。彼は正しく罪を犯したる觸法の罪人に候ふ。然れ共人彼を罪するに刑法第何條を以てせむと

するか。彼は盗まんとして盗みしにはあらず。彼は手折らんとして手折りしにはあらず。彼は天籟の妙曲に接して幽婉の詩情禁する能はず。自己忘失の無我の境に入りし也。彼が胸憶の琴線に布るゝあるもの他の解するを許さざる也。何故となれば彼自身己に解し得ざる秘事に屬すれば也。兄の事之に比す。素より遠しと雖も不測の鐵槌が往々兄の如き天才に下るを目睹して此の感殊に深きを覺え候ふ。由來官學文傑を生む少しの聲あり。事の是に至る亦故なきに候はじ。

青花兄、余兄と相識る茲に一歳兄が夷和虚懷にして而かも敦厚温籍其一度筆を呵すや能文滔々流るゝの觀あり。殊に彼の徒に星望を口にしたゝ、空想的事物の追求にのみ憧憬して詩人の天職已に盡せりと咆哮する輩と大に異なるは生の畏敬措く能はざる所に候ふ。兄已に雑誌部を出

と云ふ人は一個無心の鑽石も打てば中々の熱を吐くを知らぬ人である、僕は絶対的服従論を尊敬する。而しながら到底實を収め居ないの故を以て服する事は出来ないのである。

づと雖も北辰文壇を出でしにあらず。願はくば尙一歳名篇玉稿を投じて荒寥たる四高文園に爛然の花をさかしめよ。(宗玄生)

一事一言(一)

宗 玄 生

○工夫が鐵槌を振りかざす時に彼の頭には仕事の觀念がきざす、下つた鐵槌が鐵砧に觸れた時仕事妨害の事實が認めらる、此の時精細の觀察は彼に同時に發する熱量は妨害の度に比例するを示すであらう、然し乍ら熱の發作を以つて工夫は怒る譯には行かぬ、打撃の力が鐵槌完成に致す効力と共に熱のかくれたる力を忘れてはならない、花咲く朝、紅葉しく夕、死人は筆を呵して自然の靜閑と云ふ、併れ其文明の利器は眠れる自然の贈物ではない、人も不平の生ずるは免がれぬ、胸臆に漲る不平の燃を絶對に嫌いだ

○大風暴雨は自然が贈る最上の賜物である、唯だ活用である、團體に不平の生ずる素よりさけ難い事實である、不平誘導の巧拙が團體消長の樞機を握つて居るのだ、不平其の後を絶つは已に不可能の事實とすれば之を誘導するに多大の注意と思考とを要する、若し不平が之を自然界に見る様に之を鑽石の間に目睹する様に進歩の要諦となる様に運用せられたなら不平にも不平は無いであらう、唯だ往々團體の假面の下に潜む偏狹なる私怨は憎まねばならぬ。夢の如くに現はれ夢の如くに消ゆる不平は更に笑はねばならぬ。

○理屈を以つて凡てを律せむとあせる人程愚な

るは無い、理屈以外の理屈を求むる人程床しいはない。

陰雲に満ちた北國の空が強ふる蟄居的精神傾向に抗する唯一の機會として運動會の提供は歓迎す可し。たゞ往々意氣の奔逸が極端なる偏部心を誘起して毎年の審判紛擾を見るのは遺憾である。萬能の天賦を有せぬ少數人間より成る審判が完全を期し得ぬ素より知る可きである、僅に片々數語の理屈で各部が圓滿なる瀾散作用の阻止を見るは運動會の價值に關する問題に外ならぬ。此の点に於て今年の各部競技の大紛擾が一に交譲の美德によりて解決し得たのは後年に垂る可き誇りあるレコードである。

秋風の嚴も春雷を動かすに足らない。校友相互の難問を動かすはすて難い春風の暖味である。

○北辰會各部が年と共に盛り行くのは慶賀す可

き事である、各部の發達は何か故に生れ何か爲めに生きつゝあるやてふ換言すれば自己が生存の意義の解明にかゝつて居るは言を待たぬ、若し疑問の中に生れ若し疑問の中に育ち居つたものがあるとするれば少く其疑問解決の努力に依つてでなければ自ら生命を裁するの止むなきに至るであらう、

山中の一日は活世界の一歳と云つて居る、四高聖地の二ヶ年半は音楽部の二日間の如く覺えたのである、創立者が淫歌流行の防止、剛健なる校風の發揚、乾燥生涯の慰藉等其聲明の極めて大であつたにかゝはらず爾來二年僅に一回紀元の佳節をかざり、數回五六の人々が物理教室を賑はしたるに過ぎなかつた呆氣なき徑路と微弱なる力は北辰會經費乏しの聲高き今日音楽部をして幽冥捕捉し難い一個の疑問物として提供せらるゝの感あつたは何人も認むる所であらう。

鐘聲、至つて夕陽西山にうつづ、音楽部が將來の救済を策らんには先づ音楽部が貴重なる自覺の聲に聞かなければならぬ。

○今學年音楽部委員諸子の胸中に痛切なる自覺の私語あるは今學年中同部が著しく面目を改めた点に於て看取るに足る、現狀維持か少く共同部の基礎を危うするものと云ふ確實なる信念が行渡つて居るのを喜ぶ、往時寒潮の事かまびすき時温薄部の語が一派人士の口頭に漂ふた事もある、過去は現在に取りては絶好の教訓である、忌まわしい過去の土塊の中に一粒の清涼劑を啄ばみ得たら足るのである。

○藝術の目的は藝術の人の精神である。我々が心靈を以て仰ぎ、更らに憧憬し、渴仰す可き深大なる理想は藝術の目的であつて而して藝術の人の生命である。苟くも藝術を云爲する人々は少く其確固たる覺悟を具備せねばならぬ。確固

たる覺悟は理想を明にする要諦である。理想が藝術の第一義であるてふ觀念が新たになつて藝術は輕々の娛樂に止まらず時代に取つては濟世の大業、一校に取りては校風の振起となるのである、たゞ其理想が虚偽にして夢幻なる人格の響きであるとするれば藝術の目的は薄弱にして淺い、藝術の第一義は根本的たるを得ず持久の美性を欠くのである、理想實現を生命としたる生ける藝術家の生命は虚偽と假面を脱つた人格でなければならぬ。

音楽部の精勵が慶す可きだけ更に其活動の根本的なを求めざるを得ない。確固たる人格の響は之やがて永遠の理想を産むのである。

○歳は將に暮れんとして居る、逝く秋に故山を思ひ、桑梓を忍んだ人は日頃の希望を載せて金城の地を去るであらう。逝く者は追ふ可くも無い。目を瞑つて過去帳を封する。願はくは静や

かな心を以て初春を迎へ新らしい力と新らしい
氣とを以つて新らしい紙上に相見えんを祈る。

雜 報

叙 任 辭 令

七月三十一日

第四高等學校教授 石倉小三郎

任第八高等學校教授

叙高等官六等

八月二日

第五高等學校教授 高畠 喜市

任第四高等學校教授

叙高等官七等

八月十六日

陸叙高等官六等

教授 高畠 喜市

八月廿七日

講師ヲ囑託ス

野村 行一



講師ヲ囑託ス、

伊原敬之助

八月十五日

第四高等學校教授 高橋 周而

任學習院教授

叙高等官六等

九月廿二日

依願囑託ヲ解ク

講師 田邊 盛親

九月廿八日

陸軍歩兵特務曹長 淺野藤四郎

講師ヲ囑託ス

十月十四日

陸叙高等官二等

教授 浦井鋳一郎

陸叙高等官五等

教授 田中 鉄吉

陸叙高等官六等

教授 雪山 俊夫

同

教授 岩城準太郎

同

教授 西川 巖

同

教授 重光 蔭

友 を 送 る

白根の雪、犀川の流、微笑んで友を迎へてより
星霜巡り巡りて茲に三年、雄心落々今や金城の
秋を後にして都門にひしめく我友の意氣いと高
し。徒に兒女の痴を學ばむは心なけれど離れて
は亦還りやらぬ梓弓の止め難きを思へば分襟の
情緒斷ち難い哉。
顧る。我等初めて友と手を把りしは至誠堂場裡
煌々たる電燈の下にして四千の萬頭と三十貫の

薩南子とを屠りつゝ友校風を論ずれば我真情を吐いて亦之に應ず。肝膽よく相照し、至誠よく相結び、秋氣満々たる遊子の胸臆に春光の融々を認めしめしは牢として忘れ難き我等の思出なり。

當時寒潮事件の餘動尙収まらず。劇烈なる對外活動の後を受けて熱氣時に尙進らんとするに當り友が健實なる內的修養の必要を看取して其二年間を自己修養の爲めに尽したる苦心の跡は種種の方面に於て認むるに難からざりき。然共其後半期に至りて吉田平原の大捷、公開演説の如き北辰の頁に特筆す可き活動亦無きにあらず。之を要するに友が二年間は四高が自ら調ふるの時代に外ならざりしなり。今や駸々として文明の力は弱者に鞭つて進み行く。科學が強大なる進歩の力は一步は一步と徳義を埋めつゝ進む。口笛を以て輕佻なりと呪はれたる時代より絃歌

に狂ふて怪しまざる時代に誘はれたる聖代の學生、其主義と云ふも徳義と云ふも其學問と云ふも一個の修飾術としか見えざるにあらずや。思ふに友が北辰の聖地に自ら調へて得たる力を試み力を舒ぶるは必然の時の求めとや云ふ可き也。

友よ行け。東台の明月、嵐峽の風光、友を待つや久し。然共聞く都門紅塵深しとかや。こゝに禿筆に托して友の健在を祈らむ哉。(宗玄生)

卒業證書授與式

若葉涼しき七月五日午前九時より第二十二回卒業證書授與式は本校至誠堂に於て朝野貴賓の前に開かれたり。歡樂の氣堂に満ち、嚴肅の感云ふ可からず。

文部大臣の祝詞に曰く

祝詞

本校教育ノ實績年ト與ニ舉リテ本年亦俊秀有爲ノ卒業生諸子ヲ獲タルハ本大臣ノ欣喜ニ勝ハサル所ナリ

蓋シ十丈ノ樹ハ其根必ズ深キヲ要シ九層ノ臺ハ其ノ基必ズ堅固ナラサルヲ得ス修身講學ノ道ニ於テ最モ長キ行程ヲ有スル諸子力進ミテ各自ノ擇フ所ニ從ヒ學藝專攻ノ途ニ就カントスルニ方リテ諸子カ自ラ期スル所國家力諸子ニ望ム所豈少ナルコトヲ得ンヤ

諸子ハ洵ニ將來地位ヲ社會ノ上游ニ占メテ國民ノ儀表タルヘキモノ獨リ專攻ノ學藝ニ於テ其器能ヲ大成シ國運ノ進歩ニ貢獻スル所アルノミナラス宜シク常ニ修養ヲ怠ラズシテ高尚ナル人格ヲ鍊成シ國民ノ典型トシテ國家ノ綱常ヲ扶持スルヲ以テ念トセサルベカラズ是實ニ國家力諸子ニ囑望スル所ニシテ亦諸子ガ本校教養ノ旨趣ニ副フ所以ノ道ナリ

茲ニ諸子ノ卒業ヲ祝シ併セテ諸子カ心身共ニ健全ニシテ克ク其ノ志業ヲ成就センコトヲ望ム

明治四十三年七月五日

文部大臣 小松原英太郎

次いで吉村校長の告辭に曰く

訓辭

卒業生諸子 本校ハ本日茲ニ諸子ノ爲ニ卒業證書授與ノ式典ヲ舉ケ以テ諸子カ正ニ本校所定ノ課程ヲ修了シ我々卒業生ニ要スル所ノ資格ヲ具備スルコトヲ證明ス是實ニ諸子ノ榮譽ニシテ亦予カ大ニ祝スル所ナリ而シテ諸子ハ此榮譽ヲ擔ヘルト

同時ニ其眞ノ所ノ責任ノ重大ナルコトヲ忘ルヘカラス

惟ミルニ晩近我邦國勢日ニ隆盛ニ赴クニ隨ヒ成スヘキノ事業守ルヘキノ道義月ニ多キヲ加フルヲ以テ内ハ益々實力ヲ培養シ外ハ愈々國威ヲ發展セサル可ラサルノ時ナレバ我國民タルモノハ確乎不拔ノ精神ヲ蓄積シ勇往邁進以テ事ニ當ラサル可ラス此時ニ際シ或ハ苟且偷安因循姑息以テ一時ヲ糊塗シ或ハ奢侈淫逸ヲ事トシ或ハ輕佻浮薄ニ流レ而シテ報國ノ心薄ク奉公ノ念乏シキ者漸ク多キヲ加フルカ如キコトアラハ國家社會ノ前途果シテ如何ソヤ今竊カニ我國ノ現狀ヲ考察スルニ身中流以上ニ位シ當ニ國家社會ノ根幹トナルヘキ人士ニシテ苟且偷安ノ者アルナキ乎因循姑息ノ者アルナキ乎奢侈淫逸ノ者ナキ乎輕佻浮薄ノ者ナキ乎口ニハ文明ヲ唱ヘテ身ニハ野蠻ノ行ヲ爲ス者アルニ非ル乎自ラ一等國民ト稱シテ劣等國民ニ恥ツル者アルニ非ル乎斯ノ如ク社會酒々トシテ此等ノ毒風惡俗ニ浸染スル者年ニ増加シ正義ノ心廉恥ノ徳ノ如キハ月ニ減退スルモノアルニ非ル乎思フテ此ニ至レハ實ニ寒心ニ堪ヘサルモノアルナリ是レ識者ノ常ニ憂ヘテ止マサル所トス實狀果シテ斯ノ如シトモハ苟モ高等教育ヲ受ケ智識ヲ備フル者ハ再思三考大ニ奮勵努力スル所ナクンハアラサルナリ

諸子ハ本校ニ入學以來刻苦勵精ノ功ヲ積ミ茲ニ其業ヲ卒ヘ今將ニ進ンデ大學ニ入ラントス他日大學ヲ卒業シ專攻ノ學術ヲ以テ世ニ立ツノ時各々其責務ヲ自覺シ其業務ニ於テ功ヲ成サントコトニ勉ムヘキハ論ヲ俟タス亦一面ニ於テハ社會ノ率先者

トナリ世ノ惡風醜俗ヲ打破シ以テ眞個ノ文明ニ貢獻スル所ナ
クンハアラサルナリ
又昨明治四十二年九月ノ佳辰ヲシテ制定シタル校旗ノ下ニ
於テ卒業ノ式典ヲ舉グルハ今回初トス故ニ茲ニ特ニ一言ノ
告クヘキモノアリ抑モ北辰ヲ以テ本校ノ精神ヲ象徵スル所以
ノモノハ實實剛健ノ德ヲ尙ヒ勤勉力行ノ風ヲ養ヒ之ヲ貫クニ
至誠ヲ以テシ本校ヲシテ四面瞻仰ノ中心タラシメント欲スル
ニ在リ願ハクハ諸子本校ヲ去ルノ後ニ於テモ常ニ本校教養ノ
主旨ヲ体シ人格品性ノ修養ヲ怠ラセニセス自ラ北辰ヲ以テ任
シ社會ヲ誘導センコトヲ期スヘシ彼ノ最高學府出身ノ者ニ於
ルモ往々ニシテ或ハ末技ヲ事トシ小利ヲ追ヒ或ハ奢侈ニ耽リ
輕佻ニ陷リ人格品性ノ尊重スヘキヲ解セサルノ徒アルヲ見ル
ハ竟意スルニ彼等ハ所謂物質の文明ニ眩惑セラレ徒ラニ名利
上ノ事ニノミ腐心シ途ニ自己ノ本分ヲ忘ルヘニ至リタル罪ニ
坐セルナリ諸子幸ニ深ク此ニ鑑ミ益々其志ヲ遠大ニシ其業ニ
精勵シ日々進進シテ怠ルコトナクハ庶幾クハ學德共ニ成就
シ以テ國家ノ期待ニ答フルコトヲ得ン諸子勵ヲ勉メヨ
明治四十三年七月五日

第四高等學校校長 吉村寅太郎

最後に卒業生總代の答辭あり

答 辭

本校ハ茲ニ生等ノ爲ニ卒業證書授與ノ盛典ヲ舉ゲラル生等ノ
光榮何事力之ニ加シ

思フニ生等非薄ノ才ヲ以テ本校ノ課程ヲ卒ヘ至高ノ學府ニ進
ムヲ得ルハ偏ニ校長閣下教授諸先生ノ誘掖指導ノ賜ニ外ナラ
ス此レ生等ノ永ク肺腑ニ銘記シテ忘レザル所ナリ今又文部大
臣並ニ校長閣下ノ懇篤ナル訓辭ヲ辱ウス生等不敏ナリト雖モ
兩閣下ノ訓辭ヲ服膺シ各所期ノ目的ヲ果シ本校教育ノ旨ニ副
ヒ國恩ノ萬分ニ報センコトヲ期ス謹ンテ答フ
明治四十三年七月五日

第四高等學校第廿二回卒業生總代 新保十寸穂

かくて式を終ヘ別室に於テ動植物及び器械標本
を陳列シ受持諸教授の説明ありて來賓の觀覽に
供せり。

校友茲に二百名思出多き金城を後にして春の
如き洋々の途に上る。白根の嵐犀川のさゝやき、
此の日陽々の樂を奏して勇士の門出を盛ならし
めぬ。(宗玄生)

卒業生姓名

第一部英法科 六十五人

赤間 信義 富山 米林 純一 富山
古田 正武 岐阜 神田 外茂 夫石 川

關屋 延之助 石川 鈴木 徹雄 東京
平田 勳 東京 山本 七五三 滋賀
藏重 久山口 磯江 泰雄 東京
寺井 嘯逸 青森 山田 昌作 富山
泊武 治石川 三本 英和 歌山
廣瀨 康雄 愛知 岡田 省三 栃木
橫光 吉規 大分 大村 利昌 石川
本田 秋憲 岐阜 秋元 牧之助 神奈川
矢島 正昭 長野 妹尾 恭一 岡山
平賀 馨 石川 守山 茂松 石川
得田 信次 石川 黑岩 順三 群馬
鈴木 信三 北海道 河原 井葉 靜岡
船越 達廣 島 齋藤 省一 福井
長基 連石川 松村 久太郎 石川
中村 泰治 新潟 瀧 六郎 愛知
平田 順滋 賀 神野 悅郎 愛知
吉崎 興吉 石川 中村 岩次 郡 京都
三橋 楠平 三重 押尾 正二 群馬
宇野 耕純 石川 伊東 與義 富山
古山 志郎 東京 前坊 重德 奈良
高野 松太郎 群馬 平手 松藏 愛知
檉田 精一 石川 佐々木 忠福 井
町田 三郎 茨城 渡邊 沈千 葉

竹村 川二 靜岡 永田 正之 福岡
宇尾 要次 郎 富山 保阪 成治 新潟
山田 正 靜岡 阪元 由太 夫福井
結城 善之 富山 鶴飼 務 京都
小林 一郎 福島 三上 群司 千葉
河田 重 茨城 阪井 末吉 石川
吉岡 重 梧新 潟 近藤 好德 長崎
西脇 虎二 郎 兵庫

第一部獨法科 十五人

廣田 七郎 三重 近藤 三郎 茨城
松浦 欣岡 山 渡邊 達也 山梨
帶川 市右衛門 長野 山口 作之助 富山
熊谷 誠 福島 齋藤 熊雄 北海道
淺井 圓四郎 福井 湯本 二郎 長野
森本 達也 三重 古山 茂夫 新潟
帶金 悅之助 東京 阿部 斗二 新潟
酒井 英次 郎 秋田

第一部文科 二十五人

赤澤 寅三 東京 三浦 光雄 青森
上村 邦良 新潟 伊藤 吉之助 東京
橋本 梅吉 大阪 飯島 秀雄 群馬
京極 逸藏 廣島 河上 和一 山形

大岡純雅新潟 櫻井賢文石川
板垣邦器青森 山田敏一富山
深谷行康東京 武藤儀亮秋田
林義善神奈川 中村虎之輔埼玉
齋藤武之助埼玉 宮森學英新潟
宮内暉平静岡 阪井正一石川
熊谷覺性廣島 關口一男東京
大原龍三千葉 陽文友富山
中西九市愛知

第一部獨文科 二人

金元佑啓石川 玉泉大梁石川

第二部工科 三十二人

早 上 陽清富山 池田廣千葉
元尾大巖石川 本多慶太郎愛知
塚田豐敬富山 伊藤勝藏三重
中村實石川 岩井芳通栃木
及能錠三石川 園田幾久雄兵庫
寺尾與三富山 山根廣清富山
増田雄之助京都 林將治東京
長谷川吉十郎福井 高田實茨城
松井穰福井 中川幸太郎福井
福光外次郎石川 平山季七福島

富田繁秋茨城 渡邊一布北海道
田中正太郎石川 淺野進一岐阜
寛巳丑生福井 高橋良吉暇手
井尻良雄京都 山姓芳太郎京都
行方進千葉 谷口源吉新潟
稻本安二石川 吉村福三福井

第二部理科 六人

甲田裕東京 秋馬臺五兵庫
片山篤福井 日比野信一東京
大塚親福井 高橋林造静岡

第二部農科 十人

新保十寸穗新潟 牧隆泰三重
田中丑雄東京 赤木救新潟
御郷脩一山口 寺崎良策新潟
西村實二石川 大森四郎新潟
石田義雄石川 山本清治愛知

第二部藥學科 二人

桃谷幹次郎和歌山 西村眞一郎東京

第三部醫科 三十九人

田宮猛雄大阪 森尻麟之助富山
山田詩郎長野 岩倉信珍石川

新井吉郎福井 田島榮吉佐賀
郷原瞭京都 伊藤留三郎兵庫
山口敏治石川 杉木喜和治栃木
日比平彌岐阜 山田國廣富山
森田權平埼玉 酒井源吉新潟
岩田昇岐阜 富永孟滋賀
安田安二福島 飯田四郎神奈川
曾根源作新潟 澁谷猛夫京都
長谷川篤新潟 岡田柔郎石川
水郡長英大阪 五味愛介東京
小西棟平香川 安藤二平愛知
澤太一千葉 竹内多登市長野
長谷信次愛知 仁木九郎岡山
川邊治作新潟 窪田主一新潟
島崎光賴長野 小岩井靖長野
井上恭三郎山梨 中野保石川
米澤信吉青森 福田正也神奈川
伊藤勘助山形

始業式

九月十二日、校庭の梧葉風に動いて秋聲微に生

新入生諸君を迎ふ

出来掛つた北辰の園は残されて友は去つた。敗荷にすさむ野分の音は次第／＼に近づいて來

する朝、靜勝館は久々に豪邁と雄壯の氣を以て満された。山川の間に自然の頁を繰りかへしたる友、故山に臥して骨肉の温味を求めし友の笑聲歡語は若々しい新入諸子の囁きと共に時ならぬ融々の光を漂はせて居る。
吉村校長の森嚴なる訓示、至誠の二字に抱括せられたる四つの綱領は生ける力を七百校友に求めた。駒井先生の訓告は更に一層の生氣を與へた。
北辰校一歳の活動の幕は此の間數十分にして切り落されたのである。此の日森嚴の氣が與へたる氣呵は永遠の深き印象である。(宗玄生)

る。今も尙、離にかゝる、鶯かつら、未だ、尽きやらぬし、草を除かむ爲めに、友を迎ふる。新らしき友を迎ふる我等の限り、無き歡喜の情を傳へ度い。

徒に眼瞞の美を好み、鼻椒蘭の香にのみ憧る人には作り上らない北辰の園はおどろ深き一荒園に見えるかも知れない。嘲笑と默過は利慾榮達の一關門への通税として代償せらるゝかも知れない。唯、舊き友の血と涙とに、築き上げられた土橋石磴によりて、光榮ある、四高の歴史から生きた幽趣を感受する友があるなら、友は我等の待ち詫びた新らしき友である。亦なき生靈をささげ度い友である。

眞面目である。四高の聖園は戯れとふざけとを以て汚さるゝを許さぬ。今北辰の光に隠れて、汚れたる自我を貫かんとあせる人には、四高三年の生涯は、尽し難い其人の苦痛である。廣坂半空

の赤煉瓦は蓋し其人の恐ろしいお門相違であらう。若し熱と汗とを以て作りかゝつた小園から爛然の花を購はんとつとむる人があるなら、此等は我等の赤心を語り度い。まことである。而して眞面目の問題である。

もごより變遷は現實の事象である。推移亦避け難き常相であらう。併し不變不住の常相もこの聖園にみなざる友情の露に固められたる土壤の崩壊は許すまい。我等は常に我等の舊き友がにがき執着の悶に依つて捕へ得たる吉田の原の勝ちを誇るものである。市井輕薄な新紙に對する打撃の舊き友の聲は、牢たる我等の印象である。ア、さらば我等が新らしき友と求むる小園の花が馥郁の香を放つは何日？ (宗玄生)

新入生歡迎會

四高を離れて校友なきが如く、校友を離れて四高なし。四高を愛すると云ふ者同時に校友を愛するの士たらざる可からず。新陳代謝の原理は之を大小の細胞に見て、生命保持の根本意義なるが如く、一校の生氣は校友流動の事實に基く。今北辰の光芒に憧憬して千里を遠しとせず、集ひ來れる新來の校友は多大の熱誠と赤心を以て迎へられざる可からざる也。

十月三日、控場の一角に一片の檄あり。講演部及三年代議員の主唱にかゝる新入生歡迎會の開催を傳ふるや、會て蒙りたる歡迎の深大なる印象を喚起したる舊生は、已に定刻前に至誠堂に満ちて新來の客を待てり。冷靜にして毫も動かざる土井氏は、先づ開會の辭を致す可く登壇せり。徐ろに口を開いて曰く。

士は己を知るものゝ爲めに死す。我等不肖と雖も新來の諸君の爲めに犬馬の勞も辭せざる也。而かれ共國に國風あるが如

く一校に一校の精神換言すれば校風の存在する素より然り。吾人の諸君に求むる實に我校風の精華を發揮するにあり。次いで世人が四高校風に對する見解の誤れるを指摘し、四高校風は平凡に似て而かも其間に無限の趣を含む。時ありて之に一個の精神を與ふれば、即ち足れりと、最後に校風問題に對する所見を述べて退く。吉村先生此の時壇上に現はれ玉ひてかゝる好會合に對する喜悅の情を披瀝せられ、澤柳氏の學生觀を紹介せらる。

自己が初一念に向ひ突進するは之世に身を成すの最も近き徑路也。志を立つる事堅固ならずして徒に高きを求む。世に斯く程本末を過れるものあるまじ。

區々たる世評に動かされて自己信念の根本を左右する程愚なるもの無し。苟も籍を高等教育の内に置かむと欲する者の考慮すべき点實に此の處にあり。靜に溫容を持して説かるゝ處眞に感胸をつくを覺えしむ。

次いで岡氏登壇、熱誠なる辯を振ひ、難關を潜

つて四高に入りて新生を祝し彼の往々個人主義を唱ひて平然たる人士を責め、犠牲的精神を説いて降壇、代つて兒玉氏壇に立ちぬ。氏は新入の喜悅が却つて靜慮を欠くの虞あるを警め高校三年間は自發的奮闘努力を要求する基礎教育の時代也と切言し更に轉じて曰く。

局部を捕へて全体を批判せむとするは人間の通弊也。ユダヤ人を悉く高利貸と目する輩の少からざるは何ぞ。偶々一二腐敗分子の輩出を以て悉く一校々風の消長を卜し得たりとするは寧ろ滑稽の事實にあらずや。斯くの如き偏見に基く校風批判の聲には毫も借耳の必要を見ざる也。

次いで立てるは井上氏なり。雅趣深遠なる氏の快辯はよく満場の氣を収め得たり。蘆花が「自然と人生」の一畫家は用ひたる世にも不可思議なる繪具は彼をして永遠に活きたる畫をものせしめたり。何となれば其繪具は尊き活きたる青春の彼の血汐にして彼の存在の歴史は斯くて不朽の歴史を語らしむるを得たる也。

旅人の客舎に於けるが如き程無意なるものは無し。

至誠堂あり無聲堂あり。胸臆三寸の熱を望む北辰の誌あり。グラウンドは盛装已に待つ久し。氏が三年間の無意義を戒むるもの當れりと云ふ可き也。

四壁に響く拍手の音、滿堂の血漸く湧き熱自ら加ふ。吾人が胸臆の琴線に觸るゝ辯者の叫び痛烈恰も老秋の聲に似たり。吾人は我が校幾多熱血の士あるを誇らざる可からず。

時習寮を代表して倉知氏立つ。

流水の矢の如く悠々として吾人思想界に入らむとする一種の力あり。吾人は之に向かつて渾身陶汰の力を注ぐ、之吾人の責任にして而して亦無き特權なり。此の氣此の特權を把持して立つ時習寮にあらずして何ぞ。

時習寮の爲めに萬丈の氣焔を吐きたる氏は更に超然の意義を説く切也。自ら超然の旗色を鮮明にせむと努むる氏の如き眞に愛寮の士と稱す可き也。

今四高の一員として一生の畫紙にものす可き畫題は何ぞや。至誠也。至誠也。至誠は吾人に取りては絶好の畫題にあらずや。次いで中納君登壇。

世に校風を標榜する者に蠻中の蠻あり。ハイカラ中のハイカラあり。自ら相銜ふかざる風習は尤も忌む可きものにして我校風は此二者永炭相容れざるものを混入し燦然たる光輝を添へたるものに外ならず。換言すれば英國マ風の如き尤も之に近からんか。

校風保持の問題は決して至難の事にあらず。要は四高學生也てふ自覺だにあらば足る。論じ來りて熱氣顔面に現はる氏の如き眞個愛校の士と云はざる可からず。

公德心の欠乏は尤も忌む可き現象なり。教室内の喫煙の如き事小に似たりと雖も決して校風保持に看過す可き事にあらず。

柴野氏は悠々として壇上の人となる。氏は至誠の人、靜聽せざる可からず。

吾人は一個の生物なり。己にして生ある上は其存在亦明かならざる可からず。存在は責任を生む。花の如き三年間を送る、

是に於て北辰會各部を代表したる辯者は起てり。校内各員の交情を連結し、校が單なる大學通用門の觀を脱せしむるもの之北辰會の神聖なる力也。一校の死活は擧げて各部の消長にかゝる、今代表者が各部の爲めに其抱負を披瀝せむとする者宜べなりと云ふ可し。茲芳名と所論の概要と認む可きものを掲ぐ。

鈴木氏(庭球部)

十七歳より二十五歳迄之を身体の成長期とす。國家の成長期は換言すれば英雄時代の現出也。此の時に當り風雲に乗ずるの氣無くんば永遠池中のものたるに止る可し。

四高の現状は方に此の時代に遭遇せるにあらずや。激興の機運こゝに至る。鳴かざる可からず而して飛ばざる可からず。

世に生きんとする努力程尊きはなし。生きんとする信念程眞面目なるは無し。生きんが爲めに吾人は満身の力を注がざる可からざる也。

氏は南下の敗辱を想起して感に耐へざるが如く

庭球部將來の大なるを説いて退く

野寺氏(遠足部)

氏は登壇、先づ世人に閑却せられむとする北陸の天地が幾多史的寶庫を隠くせるを説き冬天の快、北海の雄姿を紹介し懇切を極む。問題は理論にあらず。實地にあり。遠足部の使命亦大なる哉。

宮野氏(擊劍部)

登壇先づ要求し度き土産ありと絶叫す。土産とは何ぞ、他無し至誠之のみ。氏は迫まらざる態度を以て四高劍道部の現狀を紹介し劍道が心身支配上に具備する絶大なる効果は囁々を要せずとて更に要求して曰く。

劍を把持して真面目の境に入る時渾然として起る雄大なる精神は閑居安逸を欣求する輩の知る所ならむや。而も劍道部の隆盛は一に諸君が齎す至誠の力に依らむのみ。

津山氏(柔道部)

諸君が苟くも我運動部に活躍の天地を求めむとするに當り知

らざる可からざるは光輝ある我が柔道部の活歴史也。

熱誠顔にあらはれて京都、岡山に於ける大勝を、追想し勝利の教訓を説き來る。是に於てか自覺なかる可からず。責任の自覺は歴史が當然に要求する第一歩にあらずや。

勝つて而して酔ふは其光輝ある事實の短き生命を物語るもの也。柔道部の運命を双肩にする諸君の責任亦重い哉

成川氏(野球部)

我が四高は何故にグラウンドを有せりや之先づ氏の説かむとする處也。

進歩發展は之を國家に見て欠く可からざる特性なるか如く一校に於ても消長の運命を把持する重要特質也。物質方面に於て幾多遜色ある我國が今や世界強國に列し得しは何故ぞ、進歩發展の特性に依るのみ。

進歩發展の特性助長の爲めには凡ての舊衣を脱却せざる可からず。四高がグラウンドを有する亦此の意義に外ならず。斯道の爲めに絶大の勞を惜しまざる氏の如きあるを見る。四高野球部

の隆盛今日ある蓋し偶然にあらざる可し。

文室氏(語學部)

語學を修得するは難事也。遮莫世界に雄飛せむとするもの誰か之を閑却す可けんや。語學部は日頃の練習を發表し進歩の如何を示す唯一のメートル也。輕快なる辯を鼓して氏は語學部の意義を説く、病餘を忍んで論ずる所一々首肯に當るを覺ゆ。更に轉じて長驅校風問題に入る所老熟の着眼眞に敬服の外無し。

校風の本體は至誠なり。四高に於て求む可き美質は實に此の精神にあり。此の精神を維持するは在來生徒の責任たると共に諸君の責任たるや明也。

氏や大につとめたりと云ふ可し。

宗玄氏(雜誌部)

登壇、北米平原横斷せる友人の一實話を紹介して新舊兩生間の温情は四圍が要求する自然の數也。と説き更に校内思想界の現況を論せんとする。

馬鈴薯黨と牛肉黨とに區分せし獨歩の故智に倣ひ今校内に三

大思想傾向を明分し得んか。彼の徒に盲目的愛校心に驅られて確乎たる信念を保持せざる一派、抱負實現の努力を怠んで極端なる超越主義を選ぶ輩、之也。

更に他の一派を以て獅子心中の虫黨なりとし至誠堂の神聖は此の派に付き云々するを許さずと直言し思想統一の問題に入る。

校風振起の先決問題は思想統一の大問題なり。校内漲る二大思想の調和は校風振起を云々するものゝ着眼すべき点に外ならず。

雜誌部の使命は詩人文客を輩出せしむるにあらず。自然派デカタンを論決するにあらず。雖然たる校内思想界統一の機關として提供せられたるもの也。唯に雜誌に於てのみならんや。雜誌部は雜誌部の雜誌部たらざる可からざるが如く亦各部は北辰會の各部たるを期せざる可からず。講演部代表者が實に思想統一の急を再言せしもの蓋し妥當の言と云ふ可し。

畑山氏(講演部)

氏は先づ時勢の要求に應じて呱呱の聲を擧げたる本部は諸君の後援に依らざる可からずとて今學年に於ける抱負の大体を披瀝し校風問題と講演部に付き論じて曰く。

四高講演部の歴史は換言すれば校風問題の徑路也。曾て一度蒙りと逆潮に抗して嚴然たる對外發展の秋は講演部の活動は如何に目覺しかりしよ。今や校風漸く整ひ靜寂として内脩修養の期に入るに際し講演部の取る可き道亦此の所にあり。

家康を説き松蔭を誘ふ。最後に各部の發展を祈り思想統一の必要を説いて降壇す。熱誠に説いて止まざる所氏や勉めたりと云ふ可し。此の時新入生總代として早上氏は靜に登壇、徐ろに謝辭を述ぶ。多年憧憬せし四高に入るを得たる喜悅の情を吐露し、唯自ら相努め先進の意に副はん事を誓ふ。戶外に滿つる暮色愈々深くなりて至誠堂裡は電燈煌々として閃めき渡る。

松嶋氏最後に立ち巧妙なる譬喩を以て來會者の熱誠を謝し閉會の止むなきを告ぐ。かくて一

同北辰校の萬歳を三唱し、例の立食の饗筵に移り散會せしは七時半頃なりき。(以上宗玄生記)

行軍記事 (南軍)

(各部三年生粟津方面行軍の概況)

波間に云い難い凄氣漂ふ時蛟龍は深く池中に時を待つの時である。大なる休養は大なる活動の要諦に外ならぬ。靜寂林の如く潜に鍛へられた我々の意氣は唯今一泊の行軍に依り千里の野に揮はされんとなしつゝある。而かも其響は驚ろく可く大、大なる響は獨り北辰校が不斷の誇りであらう。

秋風既に深く、梧桐に滴る蕭々の咽びに夜半夢驚かされて明日の門出心元なく覺えたが明くれば雨脚いつしか絶え空澄み渡つてすがすがしい朝の氣色はわけもなく健兒の血潮を躍らせたのであつた。

十月四日午前六時半、溥々たる玉を双の草鞋にふみ別けて校庭に集合、當日の部署は左の通りである。

統監 吉村寅太郎

統監部員 今井省三

同 駒井徳太郎

同 市村 塘

同 赤井直好

統監部書記 上村茂次郎

衛生部員 渡邊宗一郎

演習指揮官 小林平藏

第一中隊長(一部) 大野平作

中隊附 淺野藤四郎

第二中隊長(二三) 小谷仁十郎

中隊附 松本慶照

第一中隊第一小隊長 土井滋治

第二小隊長 松嶋亮二

第三小隊長 永田良作

第四小隊長 加藤仙之助

翼准士官 佐々木吉太郎

書記 柴野操一

給養係 倉知行禮

第二中隊第一小隊長 鈴木文吉

第二小隊長 進藤隆一

第三小隊長 清水多榮

翼准士官 木越重政

書記 宗玄順吉

給養係 原 勇三

小林指揮官は名だたる荒馬〇〇に乘じ嚴に全軍に令して曰へらく。

演習想定

坂井港ニ上陸シタル南軍ハ金澤市ニ侵入スルノ目的ヲ以テ北陸街道ヲ北進中ナリ
北軍ハ三湖台附邊ニ敵ヲ擊攘スルノ任務ヲ受ケ小松ニ諸兵ヲ集中ス

軍隊區分

- 一、司令官 某少將
- 二、步兵 二ヶ聯隊
- 三、騎兵 一大隊（二ヶ中隊欠）
- 四、砲兵 一大隊
- 五、學生聯隊

命令

一、當三年生大隊（二ヶ中隊）ハ某少將ノ急ナル要求ニ接シ午前八時十八分金澤發ノ列車ニテ小松驛ニ下車セントス
二、給養員ハ金澤停車場ニ先行シ司令部ノ指揮ヲ受クベシ
終つて嘸曉たる叭聲の勇ましく軍は肅々として停車場に向つた。

第一日 出發

列車の走るは名にし負ふ加州の太平野、諸所に山嵐の衣を襲ふ秋の淋しみは深く身にしみた。兩側に積み上る黄禾の香、戦のよそほひを促す鶏の叫び、鋤を遣ひ鎌を操る農夫の姿、潮風に吹きたわめた小舞子の松林など錆びたる活畫は刻一刻と走り去る。九時十五分、小松についた。黄雲の間を辿つて浅井村に到ると我が中隊命令

は下つたのである。

中隊命令

坂井港に上陸したる南軍の一枝隊は粟津を経て浅井村に到る。情報に依れば敵は我軍を阻止するの目的を以て全力を小松に集注するが如し。本軍は粟津方面に退却せむとす。第一小隊は後衛尖兵とし他を本隊とす兩者間の距離は地形に依りて選ぶ可し。

斥候衝突

第一小隊長は中隊命令と共に第一分隊より斥候三名を放つて前進す。殺氣は今や天地に満ちて居る。長蛇の如く進み行く我軍は浅井川に至つて更に六名を放ち河畔の叢間に敵情を偵察せしめた。時は十時三十五分、望めば連山悉く之黄雲、三谷の里は夢の様に惡魔の如き森林の中に佇んで居る。森中に本隊の消え行く約五分にして忽ち四邊の寂寞を破つた。

斥候の衝突!! 十時四十五分に至り斥候の報告あり曰く。

敵の歩兵約百五十名浅井を去る二十町の浅井山附近に現はる。田間に潜行する敵の斥候は已に我斥候と衝突奮闘中なり。

第一小隊長は更に第二分隊を柳河河畔に配置して敵を待たしめた。バラ／＼と二三の黑影左側の疎林に入ると見るや第二分隊は之を追撃せむとし盛んなる交射は行はれた。

三谷村附近の戦闘

三谷村は一面に沿ふ森林より廣大なる田圃に開いて居る。敵は道子山の南軍追撃の目的を以て已に右側に尖兵を派し本隊は狹路を辿つて左方に夢の如く蛇行せる森を貫き突進中である。我軍は更に一個分隊を敵の尖兵阻止するの目的を以て左翼に陣を布かしめたのである。戦機已に熟した、我れに倍する敵に對し猛烈なる射撃を開始せしも數は場合の多くを定むる、且つは方

寸帷幄の中であり道子山の本隊に背進したのである、勢に乗じたる北軍は方に破竹の其れの如くに突進して來た、乗馬のまゝ高粱の中に佇んで居られた小林指揮官は眞一文字に躍進して全軍を督勵する、彼の我校戦史上記念す可き道子山活劇の幕はかくて落されたのであつた。

道子山の決戦

山は粟津三谷間にある天造の險である、粟津滞在の南軍の運命は唯この山の一握に任せてある。鬱茂の叢林を戴き山の極りは田圃を劃し前面に三個の高地を控ゆ。左側は柴湖畔の清影で金風に揺れる千古の水は限り無い幽趣を帯びて居る。最左翼の高地は三部小隊之を占め右方高地の第一、第二小隊と共に砲列を布き巨礮を備へ死を思ふ幾多勇士の義心は眉の間に表はれて物凄け限りである。

午前十一時三十五分、約五十名の敵兵畔路に出

現すると見るや中隊長は砲兵に命じて之を粉碎せしめんとし砲聲轟々山河震動せん許り、敵は右側の畔路を取り我軍の背後を衝んとするや我軍の浴せかしたる巨弾に算を亂して倒るゝ者幾百なるを知らず。十一時四十分之實に交戦尤も旺なるの時であつた。

幾多の犠牲に依つて邁進又邁進漸く肉薄し來つた敵は我軍の右側を一舉衝いて來た。小谷中隊長は、第三小隊をして之に向はしめ茲に未聞の大戦争は現せられた。左側の虚を看取した敵は急ぎ我軍の左側を抜き敵の攻囲茲に成つて猛烈なる攻撃を開始したのである、我軍應

戦甚だつとめたが後援更に續かず第一小隊の第三分隊は敵軍の攻囲に陥り殆ど全滅に歸し死傷更に續く、茲に豫定の退却命令は下つたのである。

整々堂々と退却した我軍は儀容毫も亂るゝ無く

後方高地に陣地を移し第二小隊は田間ハザを利用して敵襲に備へて居る。忽ち霹靂轟然として宇宙震動せむ許りの突撃の聲が響いた。道子山を得たる敵は更に後方陣地の攻撃に従事したのである。第二小隊長は期する所也と督勵猛烈なる逆襲を敢てした。第一、三小隊亦銃劔を携へて我後れじと死物狂ひに進み來る。忽ち見る之

修羅の巷、暗烟濛々として白刃閃く。いつ果てむと見えないので小林指揮官は休戦喇叭を吹かした。兩軍茲に兵を収む。これ十二時を過ぎる半時。

當日の講評は左の如くである。

審判官講評

本日ノ勇敢ナル行動モ間然スル所ナシ。唯斥候ガ敵發見ノ際血氣乏シキト射撃中目的物附近ノ地情ニ配慮セザルハ本官ノ稍々遺憾トスル所也。

終るや小林指揮官は當日一般の動作に付き精細なる講評を下された。

指揮官講評

第一集合ガ出發ノ際甚シク遲引セシハ甚ダ遺憾ニ耐ヘザル所ニシテ凡ソ軍ヲナス時間ノ勵行程肝要ナルナキハ之ヲ千八百四十年佛獨大戰ノ際ノ實例ガ示スカ如シ。心ス可キ事也。次ニ斥候ハ其任務ヲ遂行スルニ先チ其遂行ノ手段結果等ニ就キ十分ノ靜慮ヲ要ス。亦自己ガ進路ノ地形等ニモ十分ノ配慮ヲ怠ル可カラズ。

北淺井ノ河堤ニ於テ南軍ノ尖兵校隊ガ敵ノ尖兵ヲ射撃セシハ稀有ノ良好地形ヲ有セルニハ惜シム可シ、之ノ場合尖兵ヲ狹路ニ誘導シ本隊ニ對シテ射撃セシナラバ少人數ニテ多大ノ損害ヲ與ヘシナラン。三谷村端戰鬪ノ際北軍ノ尖兵ガ南軍ノ退却ニモカ、ハラズ滿チ持シテ追撃セザリシハ提典ノ原則ニヨク適合セル所業ナリ。コノ際南軍第二小隊ガ施セシ一齊射撃ハ士氣ノ確立ヲ表ハシテ遺憾ナカリキ。北軍ガ大部隊ヲ以テ敵彈飛雨ノ間チ敢行シテ森林ニ入りシハ實戰ニハ猪勇ノ譏ヲ免ヌカレザル可シ。最後ノ突撃ニ際シ砲彈ノ不足ヲ以テ稍威チ欠キシ觀アルハ演習ノ精神ニ違ザカルモノト云ハザルヲ得ズ。要スルニ今日ノ演習ハ士氣旺盛大体ニ於テ成果ヲ收メ得タルガ如シ。

栗津宿營

二時半全軍栗津に入る。

朔風啾々として楓葉を飛ばし、白露滴々遠征の

人を泣かした、嚙喰たる吠聲に嚴なる宿舍命令あり、一同宿營に就かむとする刹那栗津藥師山方面に當り突然二三の銃聲起つた、敵の殘兵尙潜むと見えたり、小林指揮官は急に令を下し第一中隊をして右翼を扼せしめ第二中隊をして後方に向はしめた、第二中隊が田徑を辿りて藥師山背後を衝いたが砲聲已に収まつて敵は已に退却した様である、大隊長は別に搜索隊を派し宿衛は成つたのである。

第二日

明くれば五日、晴れ渡つた秋の日はたゞ譯もなく健兒の心を躍らせた。當日の命令は下されたのである。

中隊命令

北軍ハ南軍ノ應援部隊ガ安宅港上陸ノ報ニ接シ北陸街道ニ退

却ナリ。南軍ハ之ヲ小松街道ニ擊破セントス。八時三十分此ノ地ヲ發シ急進シテ符津、八崎、今江ヲ經敵ノ左側背ヲ衝ク可シ。第三小隊ハ尖兵トシ他ハ本隊トス。

三十分粟津出發、直に斥兵三名を放つ。敵情偵察の任務を果したる三名は急に歸來報じて曰ふ。

敵は歩兵約百名御帽子山々道を通過し北陸街道に向ひつゝあり。

松本中隊長は直に尖兵をして田間の間道を取らしめ本隊をして御帽子山背後の本道を取らしめた。勝算已に帷幕の内に決す、我中隊長は辭色嚴然、督勵甚だつとめられた、已にして行く事五、六町突として斥候衝突の轟が耳を貫いた。齋す所血か肉か、戰は再び始まつたのである。四十分。我が尖兵と敵の後衛の間に猛烈なる交射あり。嶋村に於て更に斥候三名を放ち行く行く敵情を探らしめた。符津村に斥候三名更に派し敵が其主力を三湖台の嶮に集め鐵條網、鹿柴の準備怠り無いと云ふ情報を得た。

三湖台總攻撃(空前の快戰)

三湖台は小松、今江の間にあつて天造無二の嶮である。山頂望む所三湖の清景、訝にひく水の囁き、木陰に落つる露のしたゝり近く辿つて柴山の水とつきて居る。右側には一條の鐵道蛇行して山との間には稍左方に當り桑森深し、苔青い一帶の墓地との間には蕪鬱たる枝葉を頂いて四圍暗邃を極はめて居る。其の所榛莽荆棘路沒して進む事も出来ない。

敵は已に此の天嶮による、死のみ、死のみ勝利を購ふ爲めの死は光榮也、我尖兵は山道より鐵道線路を横り今森林に向ひつゝある間に本隊は鐵道線路を辿りて潜行し墓地桑森の三面より茲に猛烈なる攻撃を開始したのである。之より前に敵の一小隊は森林一帶の有利地形を利用して我軍を伏撃せむとし却つて機先を制したる我が第三小隊の奇襲に遇い退却するや我軍之を追撃

し砲聲轟々死屍壘々として山をなした、森林より狹路に出でし我二小隊は勇敢にして知謀に富む第二小隊長により狹隘を扼し猛烈に砲撃を開始する、邁進々々肉迫し來りし第一小隊は墓地を利用して攻撃し茲に空前絶後の大激戰が起つたのである、時よしと中隊長は突撃の命を下すや、聲天地を震動し十時十五分遂に休戰の叭聲が起つたのである。

歸 校

隊を整へ御幸村を経小松に晝食、同地特志家増田氏の迎送を受け午後一時二十分金澤に發車した。隊伍肅々二時半校門に入る。

活きては歸らじとかくし難き決意を眉間に閃めかしたる幾百の勇士敵を千里の外に驅逐し今嬉嬉として金城浜々の秋風を聞く快幾ばかりぞ。尙當日の講評左の通りである。

指揮官講評

栗津村宿衛ハヨク靜肅ニヨク整頓完全シ集合(出發)モ遅引ナカリシハ本官ノ満足トスル所ナリ。
尙當日ノ戰況ニ付キ講評ヲ試ミンニ南軍斥候ノ行動ハ勇壯敏捷共ニ賞ス可キモ唯時々猪勇ニ走り幾度カ北軍ノ爲メニ捕ハレントセシハ遺憾ト云フ可シ。攻撃軍ガ攻撃ニ據ビシ位置、熱心、勇猛共ニ賞ス可シ亦北軍指揮官ガ桑森ヲ利用スル敵ニ對シ掩隊ニ後方ニ長形ノ排置ヲ取ラシメタルハ其ク之ニ應ジ得タルモノ也。唯高地ノ一ヶ小隊ガ敵ノ肉迫ニ對シ一人モ殘サズ退却セシハ戰術ニ長ジタル動作トハ思惟サレズ。コノ場合必ズ二三ヲ殘シテ多數ノ退却ニ便ナラシメザル可カラザル也。

之ヲ要スルニ本日ノ演習ハ間然ス可キ所ナク近來ノ快戰ナリシ。

次で校長は靜に進み出でられ昨今兩戰が眞面目にして毫も擬戰的特色を表はさず奮闘せしは大に慶す可く今回の演習の如き快事は近年未だ見ざる所也、昨日の宿舍狀態も殆ど理想的なりきと滿腔の喜悅を述べらる。

午後三時一同解散

(宗立生)

行軍記事(北軍)

(十月四日各部三年級一泊行軍)

第一日

初秋の香が物としもなく肌に沁み込んで、心の底に染々と、人の世の力が感じられる様な朝である、高く瑠璃色に澄み切つた蒼穹を仰いで校庭に馳せ参する健兒二百五十。噉が蒸々と靈府から燦爛十方を照らすと、戎衣が星くづの様に輝いて、五條六條露ゆらな草原を斜めに貫いた軍列は實に目覺ましいものである。

やがて軍容堂々整ふや小林指揮官は馬上高らかに本日の演習想定を傳へらる。

出 發

行進の曲は豁かに朝の町を揺がせて、足並の響はいよゝ高まつて行く、冷めたい朝風の流れをまともに切りながら、衢を過ぎ過ぎて貔貅は悠々停車場に入る。

八時十八分鐵車は南へ南へ、我等は漸く敵に近づいて行くのである、窓から加賀の野を見る、海を抜いて高まる事九千尺北陸の第一峯白山と秋や紫香ふ日本海の潮とはまさに此偉大なる自然畫の主廊である、星光りする柿の實、藻の様な磯馴松、畑の男窓の女、これ等は其主線を麗はしくも淋しくも彩つて江山の秋色は千條の糸よりも容易に我等の詩思を牽く。

十八哩、三十分汽車は小松に着く、仰げば空は霽れに霽れて糸遊がちらつくかの様、九時二十五分假設敵は白帽を上げて一揖し去る、やがて大野中隊長は長劔を撫されて徐ろに左の命令を傳へらる曰く、

命令(於十月四日午前九時)
小松停車場

一、情報ニ依レバ敵ハ一部隊ヲ粟津方面ニ迂回セシメ北軍ノ工事ヲ妨害セントス

- 二、學生聯隊ハ本場附近ニ進出シ圖上AB線ニ完全ナル防禦工事ヲナシ敵ノ進入ヲ阻碍スベシ
- 三、當中隊ハ前衛トナリ南淺井、三谷ヲ經テ本場ニ向ヒ前進ス第一小隊ハ前兵他ハ前衛本隊トス
- 四、余ハ前衛本隊ノ先頭ニアリ

注 意

- 一、敵ハ帽ニ日覆ヲ附ス
- 二、五十米突以内ニ於テ發火スルヲ嚴禁ス
- 三、赤腕章ヲ附着スルモノハ審判員附隨者トス

十時十五分戰鬪隊形に移り停車場前を左に折れて町を縫ふて行く、町の南端に出ると野はそこより展開される、見渡せば蓮代寺三谷の森が黒づんで其後方の丘は逶迤として夢の様に南と北とに走つて居る、敵や何處、我軍は死を決して進む。

戰鬪開始

中隊命令に依り土井小隊長尖兵長となり踴躍先づ前進を起す、斥候を放つて行き行く程に町の南端を去る南方約三百米突(南淺井村)の一堤防に俄然白煙あがり敵の斥候先づ發砲し愈々戰鬪

は開始される、けれ共我が勇める尖兵は敵の少數なるを知つて敢て應戰せず只管前進を續けるので敵は心怖れに怖れて退く、此時土井尖兵長は猶斥候を増加して邁進したが十時五十五分南淺井村南端に於て一斥候の報告を受けた曰く前方約二百米突の山代川に敵二分隊程出沒するものゝ如しと。

我尖兵は警戒をさゝぐ怠りなく進むと果して山代橋を挟むで、敵は左右から盛に彈丸を浴びせかける、これを見た尖兵長は逡巡する處なく直ちに我尖兵を隴畝の間に散開せしめて當日我軍最初の火蓋は殷々としてこゝに切られたのである、敵は到底わが敵ではない此堂々の陣に驚き算を亂して三々伍々敗走する、機やよしと見てとつた我軍これを追撃すれば橋梁は大本を以て防止せられ、一時此處に停滯するの止むを得ざるに至つたのである、時に十一時十分

即ち尖兵の交代があり暫時英氣を養ふ、望遠鏡を覗く敵は退路を誤つて連代寺村を迂回して三谷村に向ひつゝある、中隊長は好機逸すべからずとして捷徑を真直三谷村に向ひ敵の退路を遮斷せんが爲め再び進行する、黒い影が簇然と蠢いては連代寺村から南へ急ぐのがよく見え、我尖兵は此敵に急射撃を浴びせかけると敵の後衛尖兵と覺しき一隊が小高地から應戦する（此間約八百米突）我軍は掩護物のない不利な地形上にあつたけれ共激戦能く努め敵の退却を余儀なくせしめた時十一時二十五分。

三谷村南端の激戦

晝も猶暗い三谷の村落に我斥候は二つ三つと影を没して秘密は將に曝露されんとしつゝある、暫らくして一斥候は吐息荒々しく馳せ來つて報ずる様敵約一小隊三谷村南端を去る六百米突左方の高地に據るありと、即ち我軍は勇躍心氣を

勵まして三谷村を過ぎ密かに敵狀を窺へば敵は今や其總てを収容して最後の抗戦を決しつゝあるが如きである、此時我本隊も來り合し我軍士氣充溢谷を隔て、應戦猛射遂に殺氣暗憚たる大活劇は現出された、時に十一時三十五分激戦數刻けれ共敵は頑として動かない、遂に中隊長は斷乎嚴命を永田松嶋兩小隊長に與へて敵の右翼へ迂回突撃せしむ、時に我掩護射撃は盛なもので堂々死を決して水田中を突進する我軍容は又目覺ましいとも目覺ましい、敵は此地に據つて飽くまで防がうとしたけれ共英氣感發斗膽將に天の如き我將士の猛撃に堪え得て左翼からボツ／＼退却するのが見える、此機を見た中隊長は一齊に躍進、追撃の命を下すと敵はあはれにも散りに散つて敗走する、

決戦突撃

退いた敵は直ちに木場村東方の高地に據り決戦

の再舉をはかつて居る、彈丸は空を切つて盛んに飛ぶ腥風が何となく戰士を魅する、

晝食、講評

今度と云ふ今度は敵を全滅させないでは止まないといふ勇みたち躍り立ち我全軍は頻りに發砲する「活潑に活潑に」の號令は重い煙を傳はつて起る敵もこれに應じ般々の響きは九天に震ひ地軸に轟く。

對峙久しく何時決するとも見えない我中隊長は此時左方森林の中を迂回密進せしめ敵の右翼を突かしめんとした永田小隊の般々たる銃聲をかすけくも聞くや長劔を閃かして大聲叱呼突撃！

遅しと待ちし我軍は此號令を耳にして全線は砂塵を捲いて眞一文字に突喊に移る敵も劔戟を揃へて我に迫るあはや悽愴たる白兵戦は遠慮會釋もなく起らんとする一刹那あゝ楽しい哉平和の響休戦の喇叭は響き渡つたのである時に正午を過ぐる事十五分。

破顔一笑敵も味方も収獲の濟んだ田圃の中に圓い輪を描いて晝飯に取りかゝる、西の方木場渇の水は鏡と澄んで薄荷萱などが夢の様に靡きながら秋の雲を呼んで居る、友は三宅さんの畫の様だと云ふ全くさうだ、東は近く岡山つゞきがなだらかに走つて椎木林には櫓が五六本さ紅葉して居る其間を筑紫琴にも似たる音をたて、秋の水が斜めに流れる、ふと雀が白い和毛の腹を秋の日に向けて落葉と欺きながら東に飛ぶ、二百余の健兒は此風光の裡に晝食を終る。

午後一時指揮官は全軍を集め會戰の講評をせらる、それに先立ち淺野審判官は大要左の如き意見述べらる。

余は就任日猶淺く諸君の演習行動を見るは本日をして嚆矢となす然るに本朝來軍に従ひ其運動を見余の豫期以上至誠熱誠なるものあるを知り余は中心至大なる満足と愉快を感ぜり

余は主に北軍の歩兵及斥候に就て述べんさて斥候は敵を發見したる際は斷乎たる即時の裁決を要す停立茫然たるが如きは未だ其大策を悟らざるもの也而して斥候は尖兵の爲めの斥候にして斥候自身の斥候にあらざるが故に常に其連絡を失ふべからず猶尖兵は只散開するに當り敵の在處を最も能く確知し其射撃方向を誤るべからず

尖兵は一方には前方よりの報告を本隊に通じ一方には前面を搜索し進軍すべきを以て常に機敏なる頭腦を要す、本日土井尖兵長野村斥候長は此意味に於て大に余の心を得たりと謂ふべし

小林指揮官講評(概略)

本日の校庭の集合は實に遅々牛歩春日の感ありき甚だ戒めざるべからず由來日本人の欠点なるが兵式行動の際に殊に此惡慣に犯さるゝ事勿れ

斥候の敵發見の際決斷なきは先づ其斥候に出づる前其任務進路を再考三思せざるにあり而して敵の在處を知らんには斥候は地形の判斷力強きを要す、北軍が三谷村南端を占領したる機敏は良しされ共一個小隊なりと覺ゆ一度敵前に其体を現はし又森林に隠れたるは策を失せるもの也

最後の陣地に於て既に彈丸盡き寥々たるものありしと雖學生の演習には彈丸は不要なりと信ず何となれば學生は其頭腦を以て機に投し變に應じ充分なる行動を爲し得るか故也

時に一時三十分これより隊伍整々歩武堂々今晚の宿營地なる栗津に向ふ、中途南軍司令官より傳令あり(二時五分)

- 一、南軍校隊ハ動橋ニ進軍スベシ
- 二、當學生大隊ハ栗津ニ緊急營スベシ
- 三、斥候ハ約一時間前々方ヘ派遣セリサレド未ダ何等ノ消息ヲ得ズ

二時三十五分栗津着、將に舍營に着かんとするや非常召集の喇叭は急を告げて響く、同時に東方の高地から銃聲が聞え屋根にバラ／＼と彈丸が散る、土人の間諜によつて敵の一部が營舎に襲來したのである、けれ共これ只に敵の殘黨直ちに擊攘してやをら宿舍に入る、宿の庭先の金木犀が奇しき香をうす暗に散らして栗津の秋の日は靜かに暮れて逝く、あゝ健兒今宵の夢や如何に。

第二日

明くれば五日秋の空は氣味の悪い程限なく晴れ渡つて居る歐人は此様な空の色を「地中海青」と云ふそうな、

午前七時集合

南軍司令官よりの命令(五日午前七時)

- 一、坂井港ニ上陸セル南軍ノ應援部隊ハ安宅港ニ上陸ヲ企圖スルモノ、如シ
 - 二、北軍ハ午前六時此地ヲ撤シ手取川右岸ニ陣地ヲ占領セントス
 - 三、學生聯隊ハ午前八時其地ヲ發シ左側衛トナリ符津村今江村ヲ經小松町ニ於テ本隊ト合スベシ
- 注意前ノ如シ

淺野中隊長の命令が終ると松嶋小隊長は二小隊を率ゐる左側衛後兵尖兵長となり八時温泉を出發する、顧れば栗津公園の木立は惘乎として紫の煙に軽く浮んで居る、隊は蕭々朝寒むの里道を西へどりにとる。

尖兵は栗津を西北約三百米突の小川の堤防に斥候二名を残して退いて行く、八時三十五分敵の

斥候三名栗津の西端に現れ我斥候は先づこれに向つて火蓋を切る銃聲は轟々と森より谷に應へて六合に今日の戰籟を傳へる、敵はひるまず猛進して來る、我尖兵は漸次豫定の退却をしたが敵の斥候は後方何等の援助もなく無暗に邁進してくるので何を小癪など勇敢な我斥候は逆進してこれを容易に捕へ後方へ収容した、其勇猛賞すべきではあるが根本を忘却するのも甚だし、八時五十分津波倉村東端より約六百米突の東南方森林中に劍光が閃めいて敵の本隊が密かに其叢林中を縫ふてくるのが見える、これに彈雨を浴びせかけたが突然敵の斥候が側方より現れたので敵本隊の近きにあるを知り下栗津方面へ退却する、これに釣り込まれた敵の前兵は津波倉村を出で漸く四面開濶の野へ現れる、此機を見た我後兵は島南端の高地から一齊に地軸も碎けよとばかりに急撃を浴びせかけたので敵の

死傷者は忽ちに山をなし、凄慘は言外である、時九時十八分

此處に我尖兵は交代して加藤小隊長尖兵とな、我軍は敵の猛進を避け符津村矢嶋村を過ぎ三湖台へと急ぐ、此間我後兵尖兵は能く敵を防禦し我斥候の機敏勇敢實に目覺ましいものがあった、

符津村矢嶋村此邊りは村莊の園圃竹林桑園十數丁に連互して点々蕎麥の花が夢よりも淡くうす青い野にチャイニースホワイトを彩つて居る兩軍の斥候の衝突は此間に五分をへだて四秒をへだてゝ起る、矢嶋村をはづれると遙かに三湖台一帯の高丘が見える彼處を今日の決戦地である、我本隊は既に其處に據り鳴を鎮めて敵を待つて居るらしい、三湖台は絶好の防禦地である身は高丘にあつて前方桑園廣茫の中に明かに敵を指呼する事が出来る、正十時敵は漸く近づい

て来る。

我右翼の一小隊は先づ前面約五百米突の鐵道線路上に現はれた敵の前兵に一齊射撃を施すと硝煙はばつと三湖台上の榛莽をかすめて蓬々勃々然として空に消えて行く、見る處察する處敵は桑園中を北へ北へと其主力を我左翼へ集注する氣合である

十時十五分我左翼の前方約四百米突に敵の主隊が現れて頻りに熱彈火丸を送つてくる、此邊りは一帯密林陵墓で苦衣を被り文字蝕擢せる死石は縱横散在して一層の凄慘を加へて居る、中隊長の命に依つて松嶋小隊は前方に躍進して猛に應戦し最左翼の永田小隊は杉林中より敵の側面を突かんとして居る、今や兩軍肉迫あはれ肉飛び骨挫くるの大慘劇は起らんとし、怒る野分は横様に煙りを千切つて遙かに空へ攫つて行く、黒煙濛々砲聲殷々四邊只殺氣に滿つるのみ

何等の凄慘ぞ、此時兩軍の隊長は見事敵蹴破つてくれんと突撃を叱呼し血流一時に渦巻かんとした

が其一瞬音吐朗々休戦の呟聲は初秋清明の氣を貫いて覆載に響いたのである時十時二十分。

歸途

此地に又銃二十分の休憩の後二百余の健兒は小松町へ向ふ、背戸の畑の葉鶏頭がわけもなく目を引く其處から撮み出されたかの様水色の空にちぎれ雲が浮かんで秋の晝野は懐かしくも淨土の妙相を寫し出して居る、午後一時三十五分小松驛を發車する軍歌俄かに起つて健兒の胸はひたぶるに躍る、金澤驛に鐵車をすてゝ三時七分校門をくぐる、雲に冲りて聳り立てる校舍は久遠の愛を以て我等を迎へてくれる、庭にはこほろぎが鳴いて夕べの風はうすら寒く征衣をなでゝ流れる、古松の下指揮官の講評を承り斯く

して我等最後の一泊行軍は了つたのである。

講評(統監)

昨日來の演習は諸子の熱誠により極めて良好なる結果を見たり殊に宿營の如きは秩序整然一糸亂れざりしは余の滿心なす處猶此精神を今後の努力に注がれたし。

講評(小林指揮官)

粟津村は敵の舍營し通過せし跡なれば武器或は人質を収め置くべきの處これを等閑に附せしは失策なりき。各隊舍營の狀態及今朝の集合は余の期望に適せり。南軍の斥候の捕はれしは後方との連絡を失いしもの大に戒めざるべからず北軍の歩兵の動作は殆んど欠点なかりき。三湖臺の決戦は實に實戰の觀ありき北軍の一小隊が最高地を占領し敵の密集部隊を猛撃せしは其効實に大なりしと云ふべく又南軍が桑園中を隱然北軍の左翼に迫りしは當を得たりと云ふべし、最後に昨日來の諸子が至誠一貫せる行動に對し深く喜ぶもの也。(しばの生)

行軍記事(各部二年級一泊行軍)

第一日(十月十一日)

夏の木蔭を徘徊した歡樂は、其の行くべき方

向を失した。木の葉は凋落の歌を唄ふて、重た
 そうな灰色の雲が低く漂ふて、冷やかな秋雨が
 北陸の野山を洗ふてゐる。寂しいと云つても神
 秘的な幾多のローマンスに育てられた校庭の松
 も、音なくしとくど降り注ぐ雨にも屈せぬ健
 兒の雄々しい軍装を、なつかしげに見守つてゐ
 る、見守るその瞳が偉大なる時の變遷を語つて
 ゐる。あゝ、満天の星斗とともに輝いた鎧冑は
 何處へ行つたのであろう。尾山城下の空に漂ふ
 た陣縹く陣鼓の音は、永劫にかへらぬ曲節だ。
 今は苦むす城跡から、雨にぬれた朝の静けさを、
 胸を躍らしむる様な喇叭の音が響いて来る。降
 る雨の糸くくにも、華やかなりし封建時代の
 騎士の怨恨がこもつて居る、あゝ怨恨よ、我等
 は眞紅の熱血を流して奮戦するが故に願くは晴
 れむことを。

若き戦の子は燃ゆる生命を戎衣に包むで、十

月十一日午前七時、校庭に整列した。
 尙當日の部署は左の如くである。

統監	吉村寅太郎
統監部員	水蘆幾次郎
同	岡本勇
同	重光茂
同	岸重次
統監部書記	松本重次
同	山岸勘太郎
衛生部員	福岡喜洋
演習指揮官	小林平藏
第一中隊長(一部)	小谷仁十郎
中隊附	大野平作
第二中隊長(二、三部)	松本慶昭
中隊附	浅野藤四郎
第一中隊長	新木榮吉
第二中隊長	野崎朋近
第三中隊長	千家鐵磨
第四中隊長	小野淡路
翼准士官	中村敏
記録係	中村敏
第二中隊長	金子源一郎
第二中隊長	原口忠次郎

第三中隊長	鳥居武雄
翼准士官	南日良吉
曹長	中川諭
給養係	松谷正
記録係	山本勇

出發に先ちて統監は左の訓誡を與へられた。

當二學生生ノ發火演習ヲ行フハ今回ヲ以テ嚆矢トス、

故ニ諸子ハ或ハ不熟練ノ点アラムモ、余ハ諸子ガ全力ヲ盡

シテ事ニ從ヒ、苟モ當校ノ名譽ヲ毀損セザル様、余ハ諸子

ノ精神ニ信賴ス。

次て小林軍指揮官は馬上高らかに左の件々を
 注意された。

- 一、諸子ハ各自學生隊ノ一員トシテ充分ニ本分ヲ盡スベシ。
- 一、列車乗降ノ際ハ必ズ鐵道規則ヲ遵守スベシ
- 一、行軍中ハ能ク苦痛ニ耐エ、艱難ニ打勝ツベシ
- 一、戰團中ハ藥盒ヲ必ス前方ニ廻スベシ
- 一、分隊長ハ各自ノ分隊ノ人員ヲ注意シ、且少敵ト射撃ヲ交
 換スル際ノ外ハ必ズ安靜彈ニカクル様注意ヲ怠ル可ラズ
- 一、宿舎ニ於テハ學生ノ本分ヲ守リ、苟モ大聲ヲ發シ騷亂ノ
 行爲アル可カラズ
- 一、火災ニ對シテハ充分ニ注意スベシ
- 一、宿營地ニ於テハ衛兵ハ風紀ヲ嚴重ニ司ルベシ

出 發

想 定

一、北軍ハ小松町ニ於テ學生諸隊ノ動員中ナリ。

午前七時半、母校に告別。血潮を躍らしむる
 喇叭の音と、一絲亂れざる歩調の響とは、雨に
 煙る市街の毎戸に訪れて朝の平和を驚かせた。
 斯くて金澤ステーション着。

八時十分發車、團々たる黒煙は離別の情を載
 せて、後へへと消えてゆく、其の黒煙を眺め
 やりたる勇士の胸中はどうなだつたろう。頑健
 鐵の如き勇士の唇をもるゝ悲壯な軍歌を乗せた
 列車は、野より村へ、村より林へと、荒涼たる平
 野に華やかな勇氣の一線を畫して南へへと走
 る。名もやさしい小松の町へ到着したのが九時、
 同停車場前に整列、第二中隊は南軍となりて先
 發、秋雨は霏々として止まず、戎衣にしたゝる
 雨滴はますます烈しくなる。

午前九時四十分、北淺井で遂に想定は下された。

- 一、南軍ハ北陸街道ニ進出シ之レヲ妨害セントス。
南軍學生隊命令
- 一、南軍ハ小松町へ進入ノ目的ヲ以テ大聖寺驛ニ物資ヲ集合中ナリ。
- 二、當學生隊ハ動橋、栗津附近ノ物資ヲ徵集シ動橋驛ニ運搬セムトス。
- 三、第二、三部中隊ハ淺井驛ニ進出シ徵集掩護隊トナリ午後二時ニ栗津村ニ歸還スベシ。
- 演習ニ關スル注意
- 一、北軍ハ帽ニ日覆ヲ附セズ。
- 二、空包ハ本日携帯ノ全部ヲ使用スベシ。
- 三、赤旗一本ハ歩兵一中隊、紅白旗一本ハ一小隊トス。
- 四、彼我五十米突以内ニ接近シテ射撃スルヲ得ズ。

戰鬪開始

戰雲が棚引いて、空模様は益々險惡だ、其の空の下に金子第一小隊は命令とともに活動を開始した。近藤第一分隊は斥候となつて、北淺井

附近の敵狀視察に全力を盡し、第二分隊は、蓮代寺村に至る通路との分岐点に派遣され、第一斥候と尖兵本隊との連絡を確固たらしむる任務

を帶はしめられた。

かくの如くにして、尖兵本隊は金子小隊長指揮の下に、三谷村を去る約六百米突の地点にある雜木林に散開し、斥候退却の際の收容、並びに敵尖兵の撃攘に備へた。

午前十四時四十分、遂に敵斥候と、我が近藤斥候との間に交換された銃聲に依つて戰鬪の幕は切つて落された。平和の園は修羅の巷と化した。敵軍はます／＼接近する、其の射撃は刻一刻と猛烈になつた。我が斥候は次第に壓迫されて來た。壓迫されながら絶えず敵と接觸を保つて退却した。其の退却に際して北淺井後端の獨立家屋附近の長さ約十米突の橋梁を破壊して引揚げた。多少敵の進出を妨害したらしい。

前十一時敵の斥候に次で、敵の前哨本隊は我が視界に入ると同時に、我が金子小隊は斥候收容のために獐猛なる掩護射撃を開始した。

道路上の敵は何等遮蔽物なきに加へて、我が猛撃のために前進を阻害され、空に鋭い響を傳へて銃丸が、北と南とへ雨よりも烈しく交換される。時は進む。戰も亦劇しくなる。敵は一刻

かに横つて居る、或はその冷やかさに似た一種の旅情が戰友の胸中に横つて居るであらう等と、耽つた迷想の翅は破られた。より烈しき戰鬪は開始されたのだ。

一刻に數を増して來る。遂に我が斥候の收容の終ると同時に、金子小隊は退却せざる可からざるの不得止に至つた。多大の功績は同小隊の頭上に飾られた。其の退却に際して、帽に野の花の一輪を挟むで退却した戰士があつた。赤い赤い花の強烈な色が、どんなに我が胸を躍らせたか。やさしき心根の若人の面影が今もなほあり／＼と我が眼底に宿つて居る。

右方の松林中の秋の小鳥や鳥が周章して飛散すると見る瞬間、敵の砲火は發せられた。これに應じて發射する我が軍の猛烈なる射撃は、好良なる陣地と相待つて多大の効果を収めた。雨は斜に注ぐ、銃丸は一直線に飛ぶ、敵軍は肉迫する、天は黒く、地は眞紅に、餓鬼修羅道とはこんな處を云ふのだらう。

かくて戰鬪は稍々平穩になつた、三谷村後方の高地に倚つて原口第二小隊の散兵線は構成されて居る。左側は道路上の敵に、右側は向つて

此の間、十餘名の敵兵が左方の道路上に表はれた。然し猪勇のみ、直ちに撃攘されてしまつた。一方松林中の敵

右方の松林中に進入する敵に對して備へられた。陣地の左手には、木場潟が雨に煙つて冷や

の大部隊の猛撃は、益々我が軍を苦境に落ち込ませしめた。遂に恨みを飲むで退却を開始した、殿軍の決死の防戦によつて隘路も容易に退却し

得た。

最後の劇戦

戦闘は遂に最後へと落ちて行く、水田を前に我が軍の敷いた陣地には、夢の様にはの白い蕎麥の花が咲き亂れ、其れが黒色の戎衣と對照して一種悲壯の色を呈して居る。十一時三十分、動橋、栗津附近にて徴集した物資を運搬するための車輛が、泥土のために其の運搬を迅速にする事が出来ないとの飛報を得た。依つて我が本隊は、頑強なる防戦する事となつた。決死の意氣は我が戦友の眉間に漲れてゐる、第二小隊の退却を收容した後十分、我が軍を急追撃した敵の銃弾が雨よりも烈しく發射される。渦巻く砲煙、大空を裂く様な喊聲、奔流する血潮……猛撃に猛撃は我が軍の頭上にあびせられる、然し、勇敢なる鳥居小隊は右端の高地を死守して去らない。其の猛烈なる射撃は刻一刻に殫猛の

度を加へ、遂には其の極に達した。天は踊り、地は狂ふてゐる、砲聲の咆ゆる響、死屍の墓、狂暴の力は遂に破烈した。我が軍の彈藥は欠乏を來した。敵も亦、死傷多大、將士疲勞の極に達し、以上の力戦に耐えず、遂に白兵戦は演出された。大突貫、大突撃、遂に最後の修羅道を現出せむとする刹那、休戦喇叭は嘯唳として血雨の間に響き渡つた。時正に正午十二時。

講評概略

一、北軍ノ命令ハ間然スル處ナク勵行サレ、而シテ又、隘路進出ニ迅速ナリシト、前衛ノ動作ノ活潑ナリシハ充分ニ之ヲ認ム然レドモ、部隊ト部隊トノ交戦ノ際ニ於ケル彈丸ノ使用方法ハ、兩軍トモニ當テ得ズ

一、南軍ノ斥候長及ビ部下ノ行動ハ敏捷ナリキ、然レドモ北

淺井ニ於テ橋梁ヲ破壊シタル際、其ノ傍ニアリタル材料ヲ流失又ハ焼却セザリシハ遺憾ナリ。又隘路退却ノ方法ハ可ナレドモ、退却後ニ於テ陣地ヲ撰定セムガタメニ汲々トシテ其ノ動作ニ遲鈍ナラセシモ亦遺憾ナリ。

一、大体ニ於テ、本日諸子ノ動作ハ降雨、泥土ナリシニ拘ラズ迅速ナリシハ予ノ大イニ満足トスル處ナリ。

宿 泊

午後一時、津波倉神社出發、一小坂を下れば瓦葺の村が我等の瞳に入ると同時に、吾等の心は雀の如く躍つた。小止みなく降つた雨脚も靜かに一時半、栗津村に入ると、其の湯の臭が慈母の聲の様な、なんとも知れぬ懷しさを覺えしめた。

山間の温泉の秋の調が、戦争と平和とを織り出して、黄昏れ行く空に漂ふてゆく。午後八時の點檢も終るや、健兒の夢は黒き夜の幕に包まれて安息と休養とに導かれた。

第二日(十月十二日)

裏の山林に鳴く山鳩の聲に夜が明けた。秋雨は依然として降り注いで居る。平和より戦争へ……

午前七時整列、七時半北軍出發。

本日の南軍(二、三部中隊)の想定は左の如くである。

南軍想定(第二日)

小松町ニ於テ動員ヲ終リシ北軍學生諸隊ハ三湖臺附邊ニ防禦工事中ナリ。

南軍校隊ハ此ノ敵ヲ撃破シ本隊ノ前進ヲ容易ナラシメムトス。

南軍學生隊命令

一、軍ハ大聖寺驛ニ於テ物資ノ集収ヲ終ヘ小松町ニ向ヒ前進中ナリ

二、當學生隊ハ即時當地ヲ發シ軍ノ右側衛トナリ下栗津、符津、矢崎ヲ經テ三湖臺ニ向ヒ前進セムトス。

三、第二部乙小隊ハ前衛、他ハ前衛本隊トス、余ハ本隊ノ先頭ニアリ。

戰闘開始

茲に於て原口小隊は前衛となり午前八時出

發。白楊の葉がばら／＼と散る、もう栗津は後方に残された。

栗津の村端を出づるや否、敵の斥候の銃聲を聞いた。我が斥候は道路上を馬車の陰に隠れつつ前進し敵狀の視察に勉めた。其の結果敵の殿軍の約一小隊が本隊の退却を掩護しつつ退却して行くのを知つた。雨は降り止んだ。一方に於て戰鬪は益々劇しくなる。

津波倉村の東端に散開した敵の退却掩護隊は、其の良好なる陣地を利用して盛んに砲火をあびせかける。然し我軍の猛烈なる攻撃に耐え兼ねて忽ちの間に撃攘されてしまつた。稻の收穫された後の荒涼の秋の野は慘劇の巷と化してゆく、かくて下栗津の東端に陣を敷いた敵の殿軍の力戦も、我が神速なる追撃戦に逢ふては何の効もなく、徒らに死傷を増すのみだ。

午前八時四十分、鳥居小隊は原口中隊と交代

して前衛の勤務についた。時は流れる、戦は進む。符津村端に於ては、二三敵の銃聲を聞きたれど、同村中には更らに敵影を見ず。餌をさがす秋の小鳥と、柿の實の赤きとが我が印象を引くのみ。行く／＼敵狀を視察して進む。忽ち前方、櫟林中に聲あり、敵の砲火猛烈に我が鳥居小隊に注がれた。我が軍直ちに戦列を敷いて應戦する、然し前方に沼池あり容易に進む能はず、苦境に落ち入りたれど、前衛は精銳類なき鳥居小隊なり。其の悍猛なる攻撃に對して、どうして支へられ様、多大の損害を負ふて撃退されてしまつた。時に午前九時十五分。

追撃に追撃を重ねて、矢崎村の北端に至ると前方の斥候より左の報告を得た。

敵の約一個小隊は三湖台の高地にあり、敵の本隊は該高地と鐵道線路との中間松林中に陣地を構成しつゝあるものゝ如し。

茲に於て鳥居小隊は直ちに線路に沿ふて散開し、高地に陣せる敵に對して猛烈なる攻撃を開始した。散兵線には、小さな野の花が、火と煙との間に微笑して居る、花瓣は銃聲にゆれて地に落つる。丁度戦死する武夫の魂を包むで散るかの如くに。敵も其の天險に倚つて、我か軍を俯下して一齊射撃を以て我れに應じて居る、肉は爛れ、骨は焼け、天地も暗黒に、幾千萬の雷が一時に轟いてゐる様だ。また雨は烈しく降つて來た。世界の滅亡する時の様な氣がする、砲火の間に銃劔の閃き、銃劔の閃きの間に砲火が轟く、戦の終極が不明だ、然し、難攻不落と見えた敵の陣地に動搖の色が遂に見えた、と同時に

あゝ最後の最大劇戰。敵は遂に逆襲に轉じた。たい血の雨が降つて居る。……

休戦を告げた喇叭の聲に、兩軍此處に兵を収めた。時正に午前九時四十分。

小憩の後、十時に出發小松に向ふ。木場、今江、柴山の三鴻を眺望し得らるゝ三湖台を後に……三湖台よ去らば。最後の劇戰の跡を吊ふ松聲は、其の台上に建設せられたる日清、日露の兩戰役に戦死せる英靈を祭る忠魂碑の面に流れる。雨よ、風よ、嵐よ、三湖台上に狂はざれ、其處に我が祖國に殉せし勇士の靈、夢安らかに眠ればなり。去らば三湖台……

歸 途

我が軍の中隊長は秋水を抜き放して、決死の勢を以て本隊の先登に立つて、松林中に突出した。銃劔の光、喊聲の響、美しかつた松林も忽ちに火炎に焼けてゆく。敵の陣地に全く亂れた。

今江村に十五分間休息、十一時小松町着、同停車場前に於て晝飯を喫し、午後一時半同停車場發車、午後二時半金澤停車場着。

逝く秋の北國の街に、木の葉がばら／＼と散

つて、灰色の空の下に鉛色の川が流れてゆく。
この倦怠と悲壯さに満ち／＼た自然と、我等が
戦闘するのである。平和よ去らば、歡樂よ去ら
ば、戦闘よ來れ。

活動よ來れ、我等は絶えざる努力を以て大自
然と戦はざる可からず。かくて遂に、雨の戦は
結了した。余は勇敢且つ雄々しき戦闘に従事し
たる事を心より感謝する。

最後に統監及び指揮官の講評は左の如くであ
る。

講評(指揮官)

- 一、昨夜宿營地ニ於ケル舉動ハ可ナリ。
- 一、今朝ノ集合ノ有様モ可ナリ。
- 一、斥候ハ勇敢ニシテ敏捷ナリキ、然レドモ敵狀ヲ觀察シタ
ル後、之レヲ本隊ニ報告セザリシハ不可ナリ。
- 一、第一回ノ部隊ノ衝突ニ際シ、照尺ヲカケズシテ射撃シタ
ルモノアリ、コレ自己ノ力ヲ捨ツルニ等シ。
- 一、隘路退却ノ方法ハ可ナリ、而シテ之レヲ追撃シタル南軍
ノ原口小隊ハ稱揚ニ價ス。

- 一、矢崎ト鐵路トノ間ニ於ケル戦闘ニ道路上ヲ退却シタルハ
不可ナリ、ソノ射撃ニハ欠点アリタルモノト認ム。
- 一、最後ノ三湖臺高地ノ陣地ハ可ナリ、而シ其ノ一齊射撃ハ
不可ナリ。
- 一、北軍ノ松林中ノ責任重大ナル部隊ハ最初ハ可ナリシカ
ド、後ニ於ケル行動ハ不可ナリ、殊ニ中隊長ニ必要ナル報
告ヲナサザリシハ遺憾ナリ。
- 一、北軍退却ノ方法ハ不可ナリ、故ニ一絲整然タル尖撃ヲナ
シ得ザリシハ自然ノ理ナリ。
- 一、南軍ハ北軍ノ防禦工事中ニ攻撃スベキニ其ノ期ヲ逸シタ
ルハ不可ナリ。
- 一、又南軍ノ主力ノ進ミタル方向ハ其ノ當チ得ズ。
- 一、一般ヨリ云ヘバ、熱心且ツ勇敢ナリキ。

講評(統監)

演習ノ講評ハ今指揮官ヨリ述ベラレタル如シ、余ハタゞ諸子
ガ雨天ナリシニモ拘ラズ、ヨク其分ヲ守リ、熱心ニ、活潑ニ
演習ヲシテ成功セシメタル諸子ニ感謝シ、併セテ尙將來ノ努
力ヲ祈ル。(完) (山本)

第四高等學校第十八回 陸上運動會記事

十月二十六日。創校紀念日

うつら／＼にまだ夢の惜まるゝ時分、勇まし
い號砲の音が、西ひがしに散らばる若き人々を

盡してこの一庭に集めむとばかりに響く。玉の
やうに明け行く空の、見るからに心地よく、只
譯もなく微笑まれた。門前の石垣には、様々の
戯れ畫が張られて、行く人の心を運動會へとそ
そる。場内の設備も其のうちに出來上つて、開
會が報せられたのは、九時過ぎであつた。

第一回到二丁競走が置かれるのは、いつも
氣味がいゝ。單刀直入と言つた様な味のするレ
ースだ。冷たい朝風を切つて、冷たい土の上を、
輕快な脛が飛ぶが如くに駆ける。名譽ある勝を
西村氏が占めた。

第四回は障礙物提灯といふ厄介物、雨宮氏が
目覺ましい働き振で易々難關をパスした。

第五回四丁競走、山根氏の疾走が人の眼を驚

かした。二着大屋氏。ハンヂを付けた岡氏を頼
もしく見て居たのに、とう／＼抜き得なかつた
のは残念だつた。

學術には田中氏、旗取には小坂氏、障礙物に
は杉坂氏に、それぞれ一等が歸した。

第十回二人三脚、山田、田江氏が第一着だつ
た。釣氏の頭が田中氏の乳の邊にしか届かない。
其の二人が釣るやら釣られるやらして、眞赤に
なつてよろ／＼走つたのは、全く珍だつた。そ
れでも二等を占めたのだからえらい。

第十一回の二丁には、ハンヂの八賀氏が悠々
として、今年も先頭に立つた。二等藤岡氏。

晴れ渡つた空に時折、ふんわりと白い雲が浮
ぶのも物懷かしい。十月の日の、人の心を融か
すやうな光に、廣坂の通は輕い埃を立てる。洋
服の人が来る、袴の人が来る、赤毛布が来る。
潮の様に寄せる其の間を縫つて、お下げの子が

シヨールの人に手を引かれて来る、ステツキの尖、バラソルの彩どり、これ等がみんな吸ひ込まれる様に學校の門をくぐる。

靜勝館は、例年の通り三部館にあてられた。動植物の標本や、色々の實驗に見物を珍らしがらせてゐた。こゝで賣り出した繪葉書はよく出てゐた、スタンプも。

第一部の法文亭は、館の北の松の蔭にさつぱりして建つた。紅白の布で飴ん棒の様に巻かれた門の上に、部旗と、ボートレースに得た優勝旗とが、かざられてあつた。茶菓を出したり、スタンプを捺したりして、玆の委員も忙殺されて居た。例の法文タイムスが出された。

時習寮の造り物は、今年是一般に公開として、襟度を示した。「文武」や「鷺」などは、精巧で着想が質實だといふので、評判がよかつた。中には「稀代の猛虎、懷館の氣人に迫る」ツてな張り出

しで、濶々した山野の間に、小ッぽけな張子の虎が二足蹲まつてゐるのがあつた罪の無い。ユーモアーに人を嬉しがらせてゐた。

寮の北に二部館が陣取つてゐる。委員の苦心で、二年振りに其の異彩ある建物を見るを得たのは有難い。銅色に光つたドームや、尖塔は、確かに人を威嚇するに足るものであつた。

廣い校庭は、行き交ふ人で隙もない。外野はもう群集の十重二十重に取り巻かれた儘、競技が進んだ。

番外として時習寮の野仕合があつた。凜々しい武者振で、寮の爲めに氣を吐く萬丈。

第二十回四丁、一着西本氏、二着八賀氏、三着山本氏。第廿七回竿飛び、長い競争の後に、小林啓一郎氏が一等と極つた。第卅一回六丁、山根氏之にも一着を占めて、其快速力を認められた。此の間に第一部の人種行列が行はれた。先頭

は白足袋高帽の日本人君、脊の短い癖に高下駄の上で延び上つて、突つ立つた口鬚を仰向かせて、睨めまはして行く。續く殿原には、長烟管の朝鮮人、ツボンの釣上つたバリのハイカラ、アツシのアイヌ、手の長い支那人、カーテンの中から眼を光らせた印度人、棕櫚の葉を戴いたアメリカンインディアンの面々が、樂隊に合せて練り出した工合は、見物の眼を欬てしめた。一周した後で、人種競走をやつた。棕櫚もカーテンも山高も、遮物々しとばかりかなぐり捨てて、眞黒になつて走つたのには腹をかかへさせられた。高下駄の日本人が第一着を取つたのは好かつた。

少し後れて、二部の交通行列がまはつた。人力車が行く、電車のベルが引ツきりなしに鳴る。郵便國がかたがつて動き出す、自働電話からはクス／＼笑ひが洩れてた。汽船、自轉車、機關

車、空中飛行機なんごいふ曲者が、暫く止つてはゆらり／＼。

時習寮對醫專寄宿舎綱引は、對手も是非重なる敗辱を雪ぐ意氣込だつた相だのに、競技法のことから意見が合はず、其儘物別れになつたのは飽氣なかつた。

第卅八回公共各學校選手競走、學校は一中、二中、工業、農業、師範は與からず。一中は去年の平栗氏、やはり遙かに優勝のまゝに二等。二中の上田氏二等。農業の北野氏第三着となる。各部選手競走が近づいて、赤、白、緑、の應援旗が群集に分けられる。應援隊は要め／＼に陣取つて、旗を振り／＼咽喉も裂けよと應援の歌を怒鳴る。

第卅九回醫專學校選手競走、小嶋氏、氷室氏、久保田氏、それぞれ一、二、三着となつた。一種のごよめきが互つた。石油の罐が持ち出さ

れる。幾百の人の血を吐くやうな聲援の叫びは、烈しさの極度に上る。一部獨特の赤毛布の旗が風を捲いて、暮れ近きグラウンドには、凄惨の氣が漲つた。やがて歡呼を受けて選手が入場する。かうして當日の花の舞臺。

第四十回各部選手競走に入つた。

第一周、第二周、千家氏先頭に走つてゐた第二周半、田嶋氏が出た、鈴木氏が出た、田嶋氏抜く、鈴木氏また抜いた。もう野次もあつたものでなし、満場ひたと息を凝らす。と、鈴木氏線に入つて、田嶋、村田氏相續いて入り光榮ある勝利の冠は右三氏の手に歸した。

各部の人々は其の選手を擁して去つた。薄冥き場内には、群集皆散じて、風寒く霽を吹く裡に、

第四十一回、一哩競走が行はれた。一等千代與一氏、二等西本恭三氏、三等森寛治氏、四等

上野操氏、五等渡邊源太郎氏。かくて運動會も終りを告げた。折から焚かれ大篝の火が、建物や林や人々の面を明々と映してゐた。(よし生)

時習寮より

秋暮れ、冬北國に入りてよりこゝに久しく天地うたた荒寥、朔風ひたすらにすさみ、海むげに鳴り、窓うつ霰の響またおどろおどろしう狂へるが如く哮けるが如く、此裡に三寮の兒は暖爐を擁して愈々冬籠の状態に移り申し候、これよりは蜜柑や芋の一包に、心ゆくばかり満腔の感慨を吐いて、内心に云ひ難き或ものを獲得するの時が來り候、人が云ふジェイルの様な灰色の寮はやさしくも若い人の血に温まつて行くべく候、

寮は今年秋九月、百余の新らしき友を迎へて今處各寮満員、意氣潑刺たるもの有之、いや高

き主義に渾一せられて雄々しくも明るみに急ぐ

子は、幸に揃ふて健全に候、御存じの如く我寮は超然と云ふ名稱をもてる一個の主張を抱擁致し居り候、これは何等深い意味が含まれて居るにては無之、思ひ起せば五歳の昔、吾人の先輩が春の曙、凄惨なる焼野ヶ原の一角にたちて、

勇ましくも絶叫せし聖き明らかなる主義にして、これを見て茅ヶ崎邊りの肺病患者や貌姑射の峯に霞を吸つてゐる様な風人を聯想するはもとも愚の大極、到底共に語るべからざる懷疑家に御座候、主義の名稱其ものに依つて其内在物を推すが如きは慎まざるの甚だしきものにして、總ての歩調はこれより皮相化するものと愚考仕り候、若し一度吾人の先者が此主義を至誠と呼びたりしならんには、必ずや其サウンズはより嚴そかに響きしならん、而かも其内的實在の久遠に等しきに至つては、空虚の聲の凄じく

も吼ゆる浮世に候はずや、

曾て二とせ前の秋の夕べ、散歩歸りの寮生の一群が寮歌の節おかしく校門を入りし時、後より、チヨーゼンと叫びかけたる者有之候ひき、と見れば此影は常に至誠堂裡堂々の論を吐く君にして、やがて暗に逃れ去るが如く没し候、あゝ何等の矛盾ぞ、沈思や、久しくして吾人は密かに冷笑を禁じ得ず候ひき、これや其時代の体具的表象にして猜疑なき感謝多き今より追憶すれば恰かも夢の如くに感ぜられ候、さるにても皮相の解決を以て難問題最後の答案なりと信ぜし時代は禍にてありし哉、

世に不明なるものありとせは狐疑逡巡隱岐を是れ事とするより甚だしきものは無之候、激浪の岸に打ち寄するが如く軽々皮相の帷を撤して中を窺ふ体の者は至つて少なく候、これが爲めに人は邪情悲憾に魑魅せられて泛々又飄々、途上

碌々の徒隳々の輩のみ多く候、
吾人は言はずもがな創造に依り努力に依りて吾
人が力を永劫の苦業に感度候、これ吾人が
内心の叫びにして又人生の第一義と信じ候、此
大觀を抱くものには必ずや皮相の見解、支義の
謬察は仇敵にして、全然鼓を打ち鉦を鳴らして
驅逐すべきものに候、無頓着なるレジネフでさ
へ熱狂はなか／＼に貴いものだと思したる様覺
え居り候、吾人は影暗い裡に、紫の唇を蠢めか
して冷やかに笑ひ嘲る變りものよりも、雪崩の
壑を割つて落ち來る様に痛快に動き、堂々と反
抗する者が物としもなく懐かし候、冷やかな
る隱健なる思想家は嗤ふやも知れざれ共、創造
なき努力なき怒號は實に無責任なるものと考
へ候、
思はず筆は横道へ逸れ申し候、墨を新たに
これより暫し寮便りに基き何かや寮内の状況に
ても御報申す可く候、イートン校の校風は其寄
宿舎に依て發揚せられしと云ふ、吾人は同じく
此自覺を肝に銘じて四高校風の發展に資し度き
決心に有之、出來得る限りの努力を盡し居り候、
望むらくは我四高も全員を擧げて寮生たらしむ
る時代を迎へ度候、然し目下戦後の經營難に
して堂々雲に冲りて聳え立つ四高寮の建設は遠
き未來と存じ、遺憾またやるせ無く候、只吾人
は敬慕する通學生諸君の熱心なる援助に依り相
俟つて北辰校々風の至美をはかり度候、
寮生の生活と申しても至極單調なるものに候、
そうかと申して別に丹青を書畫に点じて青山白
雲に出入すると云ふ譯にても無之、一口に申せ
ば何等外飾なき明ら様なるライフと云ふに過ぎ
ず候、寮には北辰會を縮めたるが如き寮風會と
申す機關有之、談論制裁乃至運動方面は皆これ
に屬し居り候、而して靜に動に、常に目的を四

高發展に置き、二百の兒は相共に精勵致し居り
候、雜誌など發行致し居り候が之れは單に寮内
事業の報告書にして、後日樂しき日の追憶に資
せんが爲めのものに御座候。
本學期の寮外的活動の重なるものは秋季運動會
に於ける壯舉にて候ひき、各室の裝飾、繪葉書、
新聞、野仕合等可なり成功致したる心算に候、
今年に人間を入れると云ふ意味に於て總ての人
に觀覽を許し候間、當日は朝より暮れ迄萬余の
寮觀覽者を受付申し候、此社會の諸有る靈物を
して寮に存する或ものを感得せしめたりと迄に
自惚は致さず候へ共、何となく胸が透き透きし
たる様覺え申し候、當日寮の飾物に於て最も喝
采を博したるは、南寮四號の肥蜂文武の蜜を集
むる處、南寮七號の掃除道具を以て作られたる
大鵬、中寮四號の穴へ穴へ、人生の好縮圖、北
寮一號の超然兒山を攀づるの處、北寮三號の現

代學生の二大寄生虫、北寮五號の古物展覽會等
にて候ひき、他と雖も見捨難きもの有之例へば
北寮二號の兎と龜との駢競べが頑是なき兒童を
欣ばせたる、南寮一號の本校及寮の夜景が其眞
を現はしたる、中寮一號の歡樂銅臭に走る空人
姿が中年者の低回を誘ひたる、中寮六號の星座
肅々北斗を圍みて廻る壯景が觀者の胸を躍らし
めたる、北寮八號の樂は苦の種、苦は樂の種、
よく其心とする處を寫し出して、弱者の夢を覺
ましたる、皆五指を以て數ふべきもの、一般に
剛健質朴何等の不安なかりしは吾人の喜ぶ處に
候、
繪葉書は本年は大評判にて運動會前日に賣切と
相成り候、爲めに運動會當日はスタンブ係も氣
が抜けて居りし様見受け候、猶當日寮新聞「超
然」は彩なき寮生の所論雜報を載せて、一段の
花を添え申し候、いつもの醫學專門學校公認下

宿對寮の綱引は本年は満場の観客を落膽せしめて、中止と相成り候、事件の發端結果は此處に記さずとも一般衆人の認識せし處、又吾人は事しくも筆を走らすを好しと致さず候、吾人はこれに依つて今更にはあらねど、堂々たるカレッヂ學生の沒常識と非禮とに驚き、一個の教訓を與へられたる次第に御座候、要するに客を招いて馬鹿を見たるわけ、天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉の慨有之候。

烏兔勿々乎として最早や運動會も遠き過去と成り、咫尺の間に學期試験を迎ふる様に相成り申し候、これより暫し、沈黙に入るべく、來學年よりは寮にも娛樂室も出來候間續々通學生諸君の御來遊を仰ぎ度く、第二學期に開かるべき通學生寮生合同大茶話會の歡樂を期望して、こゝに筆を擱く可く候(しばの生)

部報

講演部報告

嚴然たる金城の秋は活ける力を提供して我々の前に至つた。久しく耽つた故山の夢破るゝ時蒼穹微に北辰の光に接する我々の心奥には止め難き思想の動めきを覺ゆる。彼の大鵬の翼を張り

鵠鴻の雄飛を見るも蓋し此の時であらう。一校の意氣は辯論部の消長に依りトす可しとは常に云ふ所である。講話部を併せたる演說部は今や講演部の新らしき生命と抱負を抱いて一切思想の中堅を期して居る。思想分離は校風のバチルスである。思想統一の聲は今や凡ての先決としてうごき來つた。この聲は他ならず新生命を得たる我が講演部の呱呱の叫びに外ならぬ。

諸君の前に提げんとする我が部の紀念章は貴重なる思想統一の努力に對する唯一の紀念を表示して居るであらう。

第一回演說會

十月二十九日、暮色漸く校庭に逼る午後六時を期し至誠堂に於て第一回演說會を開催した。當日は岩城教授の出演もあり。聴衆は早くも堂内に波だつた。小石が水面に生む大波紋に頭を悩ました大人もある。時勢の要求、時代の思潮を窺はんものは乞ふ先づうら若き青春の胸懷にひそむうごめきを聞け。

一、開會の辭

畑山 委員

二、三寸の舌は三尺の劍に優る

小河内 忠三郎

三、自己の觀念

加内 三郎

四、降魔

谷山 惠林

五、吾人青年の覺悟

林 徳一

六、現代と男

中田 秀夫

七、武士道

木下 幹

八、主義

小坂 義雄

九、國民讀本に就いて

岡 弘二

十、東天紅

文室 重敏

十一、國民と時間的觀念

本間 才一郎

十二、囚はれたる讀者

田中 正名

十三、弱点

中納 錠松

十四、書窓より見たる現代社會

倉知 行禮

十五、現代思想の統一

巢山 了徹

十六、閉會の辭

宗立 委員

(一)演說法を説く懇切を極めた。雄辯は人格の反映なりと叫んで其實例を引證し部將來の方針に言及した所は首肯す可く、何と云つても辯論は深嚴な背景を持たなければ至れりとは言ひ得ないだらう。

(二)雄辯は銀、沈黙は金の一句を短刀直入切り捨てたは敬服、辯も稍々錆びて居る。態度も至極良く雄辯亡びて正義なしと咆哮する邊り意氣縦横、君の前途廣しと云ふ可である。

(三)君の辯は意氣の辯である。奔流直下岩を越え石を飛し殆ど極まる所が無い。痛快なれ共稍重厚を欠くの嫌なきにあらざる乎。所論素より新奇でないが併し此だけの材料は君の努力を想起せしめて嬉しい。

(四)所論は簡、而かも明、態度も重味あれど唯口吻内容が餘りに佛臭を帯びて居たは聽者を服せしむる力に於て大に考ふ可き点である。誘惑至る時は胸臆自ら降魔を叫ぶ可しと云ふ点は態度音吐共に良かった。

(五)音聲もよい。所論も頗る妥當、大言壯語を花ありて實なき山吹に比せし所三又氏の妙句を想起せしめた。唯調子が極めて平坦、暗誦的口

調を取りしは遺憾、態度も今少し壯大ならしめなかつた。君は好望なる前途を持つて居る。

(六)眞の男は成敗を度外視して唯意氣を尊ぶ、其天性無邪氣にして淡泊也と。引證該博快辯流暢、所論妥當實に四高講演部の花である。而かし滿開世人を魅するには尙多くの培養を要する。

(七)此の説は已に度々聞かされた。辯は稍々輕薄に失して居るらしい。而かし輕快な口調捨て難い妙味もある。

(八)主義を以つて行爲の標準と見做したのは五月蠅い倫理學の見地を離れて尤もと思ふ。抑揚もあり聲音の高低度に副ひよく萬堂の氣を収むる事を得た。唯だ一時新聞に論議せられた政界の新事實を引證するは却つて意義を淺薄ならしむるの恐れがある。

(九)僕が聞いた君の演說中尤も卓越せるものと

信ずる。國民讀本が諸方面に及ばす力を説き極めて要を得て居る。瞑目靜聽して一々首肯に價するものあるを見た。ゼスチュアールは惜しむ可し壯大を通り越して居る。今少し沈靜に持したなら恐らく當夜の花であつたであらう。

(十)輕快の口調と隱健なる所論とは君に於て殊に見る可きである。問題は朝鮮民の同化策である。唯時間が許さなくて十分に氏の論を聞き得なかつたので何處となく物足りなく感じた。論壇の老將益々健在ならむ事を

(十一)一々例を引いて國家の消長が國民が時間に對する觀念より基因するものだと説き最後に運動會開會時間の遅引を咎めて降壇す。

(十二)氏が豊富なる文藻から繰り出さるゝ讀書觀は中々に聽者の注意を引いた。イブセンの諷刺を詩味たつぷりに紹介して批評的態度を以てしたなら如何なるものも讀破して可なりと云ふ

結論を下した。之を大にして社會教育上の問題となり小にしては家庭疑問となつて居る。大に考究す可き問題であらう。

(十三)態度、口調沈着であつて悠々たるものだ。併し君の辯は常に平野を辿る大河の流の様だ。高低に絶へず同一の時間を経て同様の度合に繰り返へさるゝ。君の微瑕は實に此の一点で辯論進歩を遅引せしむる様に感ぜしむる。惜しむ可し。併し其論点の堅固なる我校言論界の珍として誇るに足る。

(十四)當夜第一の雄辯だ。態度音聲共に本部の珍寶として記念す可きである。思想も豊富雅趣も十分元より論議のあらう道理はない。唯だ絢爛の言辭は聽衆の心を引く事大だが記憶に止まる事少いのも事實だ。而かし之を以て素より君の雄辯を云々するに足らない。

(十五)之を大にしては一代思想の統一小にして

は校内思想の統一君は此の好個の題目を捉へて論じ尽した。凡ての点に於て君は長足の進歩を示して居る。態度音聲申分ない。君あつて我が部千金の重味を覺ゆる。

(十六)最後に僕は舊委員の通信を紹介し無邪氣と雄大を有する我部カラーを要求して閉會の辭に代へた。(宗女生)

講 話

傳説の發展

岩 城 教 授

先づ傳説の意義を明にし次に浦嶋傳説發展の徑路、思想推移の關係を興味十分に説かれた。彼の泰西文界の大傑作も其多くは幼稚なる傳説に基くもの多し、先生は其一例としてファストを詳細に其發端にさかのほられた。日本文壇の「行きつまり」の救済策は先生の結論として現はれた。數多く而かも往々埋滅し終らんとする日本古來の傳説は陰鬱の氣に満ちたる現文壇局面展

十一月二十六日至誠堂に於て開く。近時北陸言論界寂寞を極む。言論は氣力だと云つ事がある。若し一般の意氣がうらがれ行く金城の秋と共に心あく惰眠に入らうと云ふならば由々しき大事である。茲に本校主催となり各公立學校を招いて意氣のバロメーターを作り出した。當日午後六時、そぼ降る雨を衝いて至誠堂は數百の氣の人、力の人に依つて満たされた。

開會の辭

松 嶋 委 員

現代思潮は病的だ。行路難を以つて唯一の言辭とし、咄辭を以つて唯一の逃辭として自ら思想

發展の好機を失するは何事ぞと例の壯烈な口調を以つて開會の辭を終へた。

第一席 悲しむ可き青年思想

本校 酒井忠次郎

實利思想や世紀末思想が現代青年の頭腦を支配し、冬枯の淋しい野を行く狐の様に實利の漂浪に迷ふ青年多いを慨した。抑揚音吐と騒然たる罵聲の中に悠々の態度を持したは敬服、其の見解は稍々極端に走しつて居る様だ。

第二席 ルーズベルト論 小松新山榮次

英雄は天賦の試金石だ、ル氏に學ぶ可きは奮闘主義だ、現代を開くは奮闘の力にあらずして何ぞ。所論も旨い音吐もよいが今少しく沈靜な態度を持したら中々の雄辯が聞かるゝだらう。

第三席 製造化學に付いて 本校 今井教授

製造化學の意義を説かれ、彼の混濁極まるカラータールグ尙良く幾多艷麗の色料を産むを述べ

られ後實驗と幻燈を以つて硫酸製造の現況を説明せられた。眞に懇切を極めたものだ。

第四席 商業の價值 商業 眞鍋 金午

商業の意義は明にして明ならず。黃金暢悅を以つて一に商業の本義となすは過れりと説く。十分の場馴れが無い。君はアートを絶対に閑却して居る。十分の修養を望む。

第五席 絶えざる力 本校 野崎 朋近

萬堂を壓する大聲を以つて英雄を見よ。チムールを見よと叫ぶ。天才と云ひ傑出と云ふ。絶えざる力の深遠なる響を聞け。

論旨は元より論難の余地無い。壯大なるゼスチヤ、雷様の音吐、其高調に達するや滿堂は云ひ難い氣呵に打たれ君亦滿面血の漲ざるを見た。絶えざるベストレーブング之天來の妙音だ。

第六席 偉大なる文藝的要求

二中 近藤榮太郎

時代の慰撫者たり。清涼劑たる之藝術の眞義也。余は此の点に於て自然に返へれよと云ふ叫びを忌む。藝術を害するは藝術也。

文藝の要求に對する結論は少しく明確を欠いた。然し乍ら靜かに淳々と説く處老夫子の感がある。君藝術の爲めに怠る勿れ。

第七席 同化策に付いて本校 新木 榮吉

戰つて得るは易く、坐して撫するは至難の事だ。物を得るは易く心を得るは難い。君の朝鮮同化の策を立て更に彼の無定見なる虛無の一派を痛罵した時には覺えず拍手した。

結論も極めて明確だ。僕は浮薄なる政治論は好まぬ。而し眞面目にして眞摯な君の如き研究者は我が講演部が不斷の誇りである。

第八席 平凡の聲を聞け一中 津田 秀榮

議論は中々透徹して居る。唯馴れすぎて稍々態度口吻が浮いて見えるは遺憾だ。今少し重厚な

れ。満堂は漸く熱して來た。當日の來賓松原博士も此の時來席あつたのでいたく聴衆の注意を引いた。

第九席 自然の煙と人爲の煙

本校 宗玄 順吉

自然の煙と人爲の煙の意義を説き現代思潮界に眼を轉ず。二大傾向の間に介在せる危き青年の立脚は余が會つて見たる自然人爲の壓迫也と、更に幼年時代の美しき記憶を辿り至誠堂に於いての新渡邊博士の言を引き青年の危険なる立脚はもと之深き根柢を世紀末の社會狀態に在くと更に立脚安定の結論に入らんとし煩悶が伴ふ淋しみの力を論ず。伊藤公と云ひ四高野球部の歴史を述べ。平凡なる友情こそこの生に觸れたる大問題を解決す可きものである。

第十席 米國生活 來賓 松原醫學博士

先生は短軀而かも精悍の氣は滿身を壓して居る。巧妙なる比喻と引證を以つて滿場を収められた。先生在米十ヶ年言々句々之皆先生の卓越せる觀察力の成果である。先づ米國の富力換言すれば國力の如何に充實せるやを諸々の方面に依りて説かる。然れ共米國は拜金の裡に尙良く取りて良く散するの意氣あるを閑却す可からずと更に女權の當る可からざるを實證し、進んで米人が常識涵養に尽せるを説かれて曰く、米國に於ける無數の夜學校を見よ、巡回博物館を見よ。新聞經營の巧手段を見よ。余が病院の園丁は夜間學校の中學生たりしに驚けりとして米人が外人同化策に腐心せる跡を述べられた。夜はいたく更けた。秋聲微に聳あり先生の聲は益々すみ渡つた。

問はず表はるゝ我ながら驚きたり。忠君愛國の大精神は根柢深遠今更に言無し。と先生は最後に米國の櫻と我帝國の櫻との標本を示されて一は見る影もなき單調なる花一は華麗馥郁たる武士の香、兩國民の意氣以つて占す可しと拍手聲裡に降壇された。

畑山委員の閉會の辭で本會も終へた。北陸學生界は眠つたのではない。旺盛なる當夜の意氣に見よ。之聽て大なる飛躍の要諦である。

(委員宗、順生)

劍道部報

増り草かをる十一月五日、我部は市下各學校聯合軍を迎へ、無聲堂場裡に紅白勝負を舉行せり、勝負の結果は左の如し。

(聯合軍) (本校)

兒家を去つて初めて父母の暖味を覺ゆ。我れ故國を去つて在米數年祖國に對る赤誠の時と所を

大井(滴) 辻 岡〇〇

○○大山(師)——辻岡○
 ○○大山——池原○
 ○○大山——宮内○
 ○○大山——六人部
 大山——相蘇○○
 久保(二中)——相蘇○○
 ○○岩本(一中)——相蘇
 岩本——淺水○○
 下田(商)——淺水○○
 ○○福田(師)——淺水
 福田——金本○○
 ○○平木(二中)——金本○
 ○平木——×顯影○
 武内(醫)——三邊○○
 ○久米(醫)——三邊○○
 ○○橋爪(二中)——三邊
 橋爪——新納○○

○野村(醫)——新納○○
 ○○羽田(商)——新納
 羽田——俣野○○
 ○○寺尾(師)——俣野
 寺尾——林○○
 ○○稻本(一中)——林
 稻本——千家○○
 高倉(醫)——千家○○
 ○○吉田(醫)——千家○
 吉田——福島○○
 山本(二中)——福島○○
 廣瀬(二中)——福島○○
 ○副將 佐々木(醫)——福島○○
 ○大將 辻(醫)——福島○○
 (二本勝負○印勝)
 我軍は不戦者柴野、持田、時枝、宮野、山田(副將)、稻葉(大將)の六人を残して勝鼓を打ち得た

りと雖、吾人の期望に比しては其成績、甚だ良好ならず、吾人は切に層一層の奮勵を望む。

短艇部報

頃者、わが一校友は我部が惰眠に冒されしにあらずやと疑へり、我部は敢て其言を甘受せん、然れ共、乞ふ安んせよ、我等の血は斯くまでに

秋の空は紺碧に高く澄み渡つた十月の十五日、此の春に優勝旗の新調と新艇の建造で一生面を開いた我が漕艇部の小會か、例の大野河で開かれた。

冷え、我等の腕は斯くまでに細り、我等の太刀は斯くまでに錆びたるにあらざる也、あゝ思へば我等は幾度か、敗戦の悲しき追憶を辿りて、か黒き腕を撫せし事よ、若き胸を躍らせし事よ、されど、機未だ熟せざるを如何せん。時未だ至らざるを如何にせん、我等は輕動暴舉を敢てするの勇氣と大膽さを有せざるが故に、惰眠惰眠てふ怒號絶叫の裡に遂に遂に沈黙を守りし也。

惰眠!! 其言やよし、我部は敢てそれを甘受すべし、然らば來らん日、我等が雪辱の凱歌を奏するの時、乞ふ共に起つて歌へ、あゝ是れ豈一片の放言漫語ならんや。(しばの生)

松並木が立ち列び艇々と長い金石街道を走る馬車は、校歌の節面白き北辰健兒の一團づゝを畝田の停留場で吐き出す、艇庫の秋は今が盛りだ。黄金の波の穂をゆるがす加賀野と、遠い薄紫の白山連峯とを背景として、沖は遙かに青瑠璃の日本海の舞殿に鞀轆と鳴る波の音を海神の金鼓の響とさく此處大野川には、秋の水揺う流れる、熱心なる田中部長及び委員諸氏の盡力で會場の準備が整ふた十時、競漕は始まつた。十一時頃に艇庫樓上に吉村校長の姿が見える而して船戦さは佳境に入る。スタートで號砲が水に響くと、岸の蘆の花が雪と散つて、赤白青の三艇は一齊

に大鳥の翼を叩く様に水上を滑る、麗はしいロングピッチに悠々と引くのもあれば、四十二三の急調で呵成的に勝を制せんとするものもある。

此學年に新に加はつた、新入生の若武者も中學時代に鳴らした技倆の、どろどろに見えて頼母しい決勝の砲の音と共に翻る色旗、やがて起る歡呼の聲、勝者は微笑を片頬に浮べて田中先生より銀メダルを授かる斯くする。事七回にして無事會は閉ざされた。

暖かい秋の夕陽は、海の彼方に沈みかけて吾人の宇治川は暮れんとする。あゝ競漕は濟んだ然して漕艇のシーズンは行つた。此の後は西比利亞の風が吹き荒んで、日本海の波は日々に高まつて、數ヶ月の間は吾人は河北潟の長汀曲浦や、粟ヶ崎の長橋と別れねばならぬ、然し來らん春の、岸に若草が萌えて、菜花が咲く頃は、吾人は腕の肉を躍らして、艇首に狂ふ胡蝶を友に、

再び大なる活動に入るのである。(ひでを)

遠 足 部 報

五箇の莊に遊ぶ

五箇の莊！と聞き給ふ人は誰れも肥後の五箇の莊を想像せらるゝであらう、驕る平氏一度義仲の火牛に苦しめられて空しく俱利伽羅の谷に消え、生き残るもの南奈良岳の麓、東藥師ヶ岳の麓に世を忍び一は今に桂となり、一は有峯となつて共に越中に於ける。明治武陵桃源を作つて居る、共に美しい山に包まれ美しき川に繞られて居る、桂の紅葉、桂の庄川の流れ共に天下に冠たるものだ。

十月十六日我が遠足部は五箇の莊清遊を壯舉することゝした、賛同するもの四十四名、午前まで怪しい雲の漂うた空も晴れ日は薄い雲間か

ら照り始めた、午後一時を少し過ぎて一行は出發した、二又街道を歩む、雨に濡れた泥道を避けて草芝の中を踏めば死にかゝつた蟋蟀がとび出る、空には赤蜻蛉が舞うて居る、三里の二又も二時間で到着、茶屋に休んで茶を啜る、福光まで三里下り道で停車場は町端れにあると委しく教へて呉れた。福光へと急ぐ程に短き秋の日は暮れ果てた、燈して進むほごにいつしか身は福光街道に停んだ、停車場に到つて八時三十分汚い瀛車に乗る、瀛車はわれらを乗せて闇を衝いて遂に身を越中南端の城端の町に運び呉れた。今宵は城端別院に泊る。化學室の山田君と二人で提燈つけて上田で宿る。

明ければ空全く晴れて星は空高く光つて居る、朝靄の中に城端を出で上田を過ぎて小瀬峠にどかゝる、道は幾度か曲つて行く、中途で後を顧ると醫王山が模糊の中に見える、登り詰め

て南白山を眺む惜しい哉判然と見えぬ。老鶯は

聲も惜まず歌つて居る、少時休んで峠を降るこころ一体に紅葉は徒らに訪ふ人もなき山の秋を飾つて空しく散つて土と化する、峠より卅分行程に小瀬村がある一軒のみ道傍に高く聳えて紅葉に包まれて居る、小瀬を出で、少し歩むと庄川の碧い流れが見える、西赤尾はそこぞと見えて遠い、十時過ぎ西赤尾に到つた。豫定の通りこ

こで辨當を食うて夕飯の分を辨當箱に詰める、一斗の飯も不足を告ぐるに到つた。こゝより飛驒芦倉を経て加須良川を逆上つて飛驒加須良に出で、桂に到着する豫定は加須良川の増水の爲め止むなく庄川の一支流飛越を境する境川に沿うて桂に出るより外にない、西赤尾の俗語に「桂三里で四里暮す」三里は天下に比なき紅葉の景、庄川の流れこれを見ずして脚の疲れに委せて西赤尾で泊つた三人こそ和氏の壁を地に棄た人で

ある、八波先生は庄川に沿ひて下りて下梨に出、四軒の主婦に宿を乞ふと心からの快諾風呂を焚かれ、西川先生は城端で別れて湯涌方面へ出られた。西赤尾を少し離れると三軒で一村の打越村がある、長い吊橋が架けられてある、吊橋を渡らずに少し進むと左一と足の所に橋が架つて飛越國境の標柱が立つて居る、飛驒の國にも足を入れる必要あるのか皆な橋を渡つて十歩の飛驒漫遊をやる、越中國に歸つて境川の流れを左に見て坂を超えて進む、清冷な流れが奇石怪巖を嚙んで流れる、岩上に燃ゆる許りの紅葉が岩を蓋うて居る、進むほどに栗の林に入る、木を振ると栗の實がばら／＼と徑に落つる、争ひもせず睦じく拾つてカバンに收め、三里の道もいつしか歩んで今や桂の村に入つた、皆な到着したのは午後四時頃であつた。上田から先發した僕等二人は加須良川の偽はられたる増水を涉つて加須良から桂に出た一時を過ぐる五分であつた、

ある、八波先生は庄川に沿ひて下りて下梨に出、四軒の主婦に宿を乞ふと心からの快諾風呂を焚く室に筵を敷く爐に薪が加へられる。到着したものはカバンや外套を置いて山一つ川一つ向の「飛驒の國へ遊びに行かう」と誘はれ「先程飛驒で遊んだぢやないか」と弱音を吐くものもあつた、大方のものは元氣よく飛驒漫遊と出掛けて、暮方に歸つて來た、風呂に入つて、夕餉に向ふ、米の飯さへ危ぶんだわれら意外な料理に驚かされて飯を了へた、爐を圍んで話をして居ると物珍らしさうに小供が洋服姿のわれらを見詰めて居る、年寄は不思議な顔をして卷賣の煙を見て居る、やがて栗を出して呉れる、われらは風呂に驚かされ未塗の腰高の膳に、甘い料理に驚かされ今又澤山の栗を呉れたのに吃驚した、次に何かわれらを吃驚させるだろうか、栗を焼くもの、疲れて横に眠るもの、婆さんに俗歌を教はるもの、爐邊は非常に嘻々として樂しげであつた、

夜の更るまゝに驚く程の立派な夜具にくるまつて華胥の國に遊ぶ。

温かい夢より醒むれば紺青の空晴れた、六時半桂の人々に惜しき別れを告げてブナナ峠に向ふ、桂より金澤に至る十二里ブナナ峠を以て至難とする、露にぬれたる落葉を踏んで行く程に音がある、峠の子のやうな低いものを越えて降ると谿流がある涉つて又峠の低いものを越す、又流れがある。水清冽にして寒冷骨に徹する思がある、満山の紅葉に見惚れてブナナの險所へとかゝる峠の頂上に近く「オーイ」と呼ぶものあり歩み後れし者停止し呉れと云ふやうに聞える、後の方に聞えず前の方に聞える、急いで聲に近付くと前日脚の疲れで西赤尾に泊つたもの三人が人夫に導かれてこゝにわれらを十分餘待つて居つたのである、三人も前日の疲れ全く去つて元氣に充ちて居る人夫に別れて諸共に頂上

に至つて食指の動くまゝに午食を喫した。十一時坂路を急いで峠を降る程右手に當つて紅葉濃やかなる山腹より白布の懸かるを見て路傍の耕女に名を問へど知らず、われこの瀧の爲め一片の同情を表する。これより右手に小矢部川を眺めて流れと共に下る刀利にて川と別れて小峠にかゝる、峠の頂上右足は加賀の水を迎へ左足は越中水と別れる、峠を下ると横谷、横谷を過ぎて石黒侯に到着甘藷の用意あるべき區長の宅と向ひの宅に入る。山なす二十貫の甘藷も空腹の遠足軍に平らげられて了つた、この甘藷は西川先生の御盡力によりて得たるもの、われは一同に代つてこゝに深く感謝して置く、甘藷食うた元氣で飛ぶやうにして皆な仙界を去りて又金澤の人となつた。空に星輝いて小立野の町には明るく電燈が燈されて居た。(いうち)

犀瀧を遡る

犀川の上流に一瀑布あり、人名付けて犀瀧といふ、高きにあらず、大なるにあらず、訪ふ人もなき幽谷に徒らに鞆鞆たる響をなして落つる一條の瀧なり、秋深くなり樹葉悉く紅粧する時紅白相映じて美觀なり、されば山水に心あるもの足跡をこゝに印せずして已むべけんや。校友茂木肥佐多の兩君昨年紅葉の頃、日頃の健脚をこゝに運び、更に奈良岳を超えて越中桂に出でんとせられしも險惡なる天候は遂に兩君を數千尺の雲上奈良岳の山懷に抱いて復た還さしめずなりぬ。これより犀瀧は奈良岳と共にわれら校友の胸に深くきざまれぬ。

我が部はこの思ひ出多き犀瀧を深く記憶せん爲め同志の校友を募りて探らむとせり。時正に九月十九日午後の課業を了へて集るもの四十

有餘名。道を倉谷街道に取りて進む、秋天高く澄み渡り氣清し、路傍の人皆な收穫に忙し、道は變化少なしと雖も時に脚下の犀川の清流岩に激して飛沫白珠萬顆を浮べて流る、進むほごに秋の日はいつしか西に落ちて四邊朦々日尾に近くして灯す、赤提燈の揺らぎて暗く幾度が路傍の石に躓きて倒れんとす。脚下の流れのみ夜の寂寞を破る、二又を過ぎて橋を渡るほごに早や倉谷見ゆ、區長の宅に入り、一行數家に分泊す、時に八時半を過ぐ、歡迎の夕餉に向へば特産の珍菜膳に上る、食後爐邊に團欒して楽しく語り合ふほごにいつしか十時に垂んとす、寢に就きてうまいせむとすれども溪流幾度が吾等の夢を驚かす。

起き出づれば空残りなく晴れたり、輕装の一行は東伊三郎氏を案内者として七時倉谷を發して犀瀧に向ふ、氏は昨年搜索隊の人夫として多

大の勞を取りし人なり、倉谷鑛山の廢れたる採掘場を過ぎて道を上るやうやく峻坂となり朝露重げなる薄を分けて進む。道はいよく傾斜の度を増して烏帽子峠にかゝる、途上紫色に熟せる山葡萄の累累として樹間を綴るあり、爭うて口にすれば味亦佳なり、進むほごに絶頂に達す、こゝには鑛山の運行機の空しく冷骸を横ふるを見る。目前に迫るもの三方山、奈良岳の攢簇するあり左なるを前三方山といひ、最も右なるを奈良岳とす、襟を正して之を眺む、死出の旅路に急ぎ給ひし亡兩兄のこゝより奈良岳を眺めやられし時やいかに。長く憩ふべきにあらねば峠を下る、案内者道の坂を馳せ下るほごに多數取り残されて岐路に迷うて一條の瀧跡を枝に絶がりて下り西谷川に着く、道案内曰く、待つこと久しかりきと。

これより西谷川に沿うて溯る、奈良岳に發し

たる流れは岩に激し或は淵となり或は瀨となる、瀧に至るの徑もとよりなし、岩を飛び瀨を渡りて進む、岩を踏み誤りて潭に落つるうたた同情に耐へず、流れの右に沿ひ、或は左に沿ひて進むこと一時間餘突如響あり、見上ぐれば飛瀑四丈餘。是ぞ犀瀧なる、落ちて飛沫四方を濕ほす、瀧の附近に岩陰あり亡兩君の暖を取り山葡萄を食ひ最後の記名せられしもの今尙は判然として見るべし。一行襟を正してこの前に無言のまゝ、佇立する多時、想像は彼より是へと移りて茫然たり、吾等の双眸に彷徨するものは兩兄の英姿か。北辰會遠足部時習寮遠足部より寄贈の菓子はこのにて分配せらる。空腹を忍びてこゝに來りしもの辨當を披く、休息一時間。

盡きせぬ名残りを瀧に残して午後二時川を下る、瀧徒らに幽谷を響かすのみ、右岸を取り左岸を取り瀨を涉りて漸く峠の麓に到る、川に近く

二個の小家あり、搜索隊諸君は出で、空漠たる山頭に友の冷骸を覓めんとし、入つてはこの荒れたる小家に秋の夜冷たき夢を結ばれし所なり、思ふに至れば感慨胸に迫る。烏帽子峠の頂上より顧て奈良岳を見れば淡き灰雲峯を包んで見えず。ひた降りに降りて倉谷の村に到る、暮色四周を蓋うて溪流獨り聲あり、迎へられて家に入る、夕餉を了へて空を眺むれば碧空星寥々たり。菓子に分配せらる、疲れしまゝに寝に入る。

温き夢より醒れば怪雲空に漂ふ、二又より後谷に出で、歸る豫定なり、八時村民に送られて倉谷を去る、大多數は直ちに金澤へと歸路を急ぐ、残るもの十有餘名二又に到つて案内を雇うて峠を登る、途上の山葡萄を採り積んで山を爲す誰れやら云ふ「金澤へ運んで賣ればいいが」、峠の頂上案内者と別れ下りて後谷川に沿うて後谷に到る、雲益々黒さを増し雨今にも落ちんと

す、辨當も素早く了へて堂村に近く、時しも大雨沛然として至る、進むにつれて益々激しくなり泥土にりて歩むに悩む、野田山の松の雫に濡れをばつて金澤に入る、街道の電燈明うして晝の如し。(いうち)

音楽部 報

オルフォイス一度其のリラを弾する時無心の鳥獸木石は膝下に蜎集し齊しく其の妙なる調に恍惚として頭をうなだれた、黄泉の大王も死んだ妻を甦り去らしめた、月明の夜の笛の音は人の腸を抉つて故郷戀しに泣かしめるものだ。

惡辣な燃焼的な物質萬能の世の中ですら數節のメロディは人をして或は悲痛に、不安に乃至悦に平和に清楚ならしめ物外に逍遙せしむるのである無形の美術だとか性格を向上せしむるものだとか云ふのも蓋し此の邊の消息である、要す

に音楽窮極の目的とする所は外界の事物の概念を模寫するものでも無ければ觀念するものでもない唯純粹な感情の直接な發揮である。

由來我音楽部は創立も比較的新しくて加之男のくせにオルガンを弄つたり子供でもあるまいに唱歌を歌つたり等云ふ立場からして或は種々の方面から呪咀せられ冷笑されて殆んど其の存在を認められ無かつた冬期の大會も極く申し譯的の者であつた、現に今年等は湮滅して音楽部も廢止されぬかと思つた位だつた、此所に於て部員

のものは大に期する所あつてザレデアンノッツを試みたのである石倉先生の後を西先生が引受けられたのを期して新たに部則を制定して部員の大募集を試みたが應募者は百を越す事五十餘名で稍々愁眉を開いた。次で西先生と八波先生の御盡力で大西先生を招聘して器樂及音楽を教授して貰ふ事となり猶一週二回の練習を定めて

二三の歌曲を練習する事にした、十月下旬には随分苦心して西川製オルカンがやつと購入し得て二十四號の教室に備へて一般の使用を許して猶從來のハーモニウムも種々談合の末之も練習に使用する事にした。

略右の様な次第で漸うやく端緒は開けたが改新早々未だ吾々が期待する半分にも及ばぬそれに彼れ是と事務に紛糾されて秋期演奏會にも練習の間に合はなかつたが何れ來春早々花々しく開催する筈である。

確か安部磯雄さんが今の若い人は譜を見て直ぐ歌へる位音楽の素養が無ければ駄目だと云はれたと思つて居る、此一言は吾々の胸中を道破して遺憾ないもので慙か蛇足は廢して兎に角賢明な諸君の判斷に任して置く。

畢りに臨んで部員諸君否北辰會員諸君に眞面目と熱心とを以て此崇高なる趣味を涵養普及せら

れ延いては修養の一端とせられん事を切に希望して止まないものである。

尙本學年に入りて制定したる部則は左の如し。

部 則

- 一、音樂部は學業の餘暇高尚なる趣味を養成するを以て目的とす
- 二、此目的を遂行せん爲左の事業を行ふ
 - 一、音樂練習 一週一回 講師を聘し器樂及聲樂の練習をなす
 - 二、音樂會 年二回
 - 三、樂曲の備附 圖書課に備附部員の閱覽を許す
 - 三、本部の基礎を強固ならしむる爲め北辰會員中の有志者を以て部員とす
 - 四、部員は本部の行ふ事業に參與し總て備附品を使用する事を得

谷に到る部員にして不正の行爲ある時は除名す

樂器使用規定

- 一、本部備附の樂器は北辰會員一般の使用を許す
- 一、樂器使用の時限は午後三時より日沒迄とし土曜は午後〇時より日曜及休日は午前八時より日沒迄とす
- 一、樂器は大切に使用すべし若し使用中破損の箇處を見出したる時は直ちに委員に通知すべし
- 一、規定に反する者あるときは樂器の使用を禁止することあるべし

音樂會規定

- 一、音樂會は春秋二回之れを行ふ
秋期十一月三日午後一時より
 春期四月第三土曜午後一時より
- 一、音樂會は女子を除くの外一般の入場を許す
- 一、演奏者は部員を以てす

一、演奏樂器は西洋樂器とす但本邦樂器を使用せんとするときは其都度會長の認可を経べし

一、役員は本部員中より之れを定む

音樂練習規約

- 一、音樂の練習を享くるものは音樂部員とす但し當分水、木曜兩日に限り聲樂練習には一般會員の入場を許す
- 二、聲樂練者は物理教室器樂練習は第二十一號室とす
- 三、音樂部員は練習に必ず出席すべきは無論なれども不得止事項の爲め出席し難き時は其當日若くは前日各級委員に申出づべし申出難き時は其翌日委員に其旨届出づべし然らずして缺席數次に及ぶものは其事情により除名する事あるべし但し學科事業に缺席したる場合には缺席後初めて出席したる日

に届出づべし（學科事業の爲め出席し難きものは此限りにあらず）

- 四、毎週部員の出缺を調査すべし
- 五、練習歌曲等は印刷して毎回部員に限り配布す部員各級委員より受取るべし但し其當日出席せるもの又は其當日若くは前日申出たる者に限る
- 六、練習を受けんと欲するものは練習開始前に入場すべし遅刻する時は入場を許さるることあるべし
- 七、歌曲は常に持參すべし
- 八、ヴァイオリン志望者は練習當日必ず樂器を持參すべし

級委員規約

- 一、級の部員に關する事項を處理して委員の事務を輔佐すること
- 二、音樂練習の當日は部員及級の一般に注意

三、任期は滿一ケ年とす

音樂練習日割

聲樂之部

九月ヨリ
水曜
午後二時ヨリ
同二時五十分マデ

十二月迄及
翌三月ヨ 木曜 同

り七月迄
金曜
午後三時ヨリ
同三時五十分マデ

午後二時ヨリ

十二月三日
水曜
午後二時三十分
同二時五十分

迄リ翌三月 木曜 同
午後一時ヨリ

土曜 午後一時三十分迄

器樂之部

九月ヨリ
十二月迄及
翌三月ヨリ
金
午後四時ヨリ
同四時半

三月迄

十二月ヨリ
翌三月迄
土
午後二時ヨリ
同二時五十分迄

同
同

教授者 大西先生

同
大西先生

同
同

教授者 委員

同
大西先生

教授者 委員



旅　　の　　人

前田 阪重太郎 作曲
田中 正 名 作 歌

變ホ調八分ノ六拍子
淋シク

mp

<u>3</u> <u>3</u> <u>4</u> <u>3</u> <u>2</u>	<u>3</u> <u>3</u> <u>6</u>	<u>7</u> <u>6</u> <u>3</u> <u>1̇</u> <u>7</u> <u>6</u>	<u>7</u> <u>7</u> <u>0</u>
シヅクーノ なくむーし	アメニ たにて	ソーホーヌーレ こーがーらーし	テー のー

mp

<u>6</u> <u>4</u> <u>3</u> <u>2</u> <u>3</u>	<u>4</u> <u>3</u> <u>7</u>	<u>6</u> <u>7</u> <u>1</u> <u>7</u>	<u>6</u> <u>6</u> <u>0</u>
オチバーノ ゆくにーみ	ナカノ なかくる	キニヨレ たびのそ	バー らー

mf

<u>7</u> <u>6</u> <u>4</u> <u>3</u>	<u>6</u> <u>4</u> <u>3</u> <u>2</u>	<u>3</u> <u>3</u> <u>7</u> <u>6</u>	<u>7</u> <u>7</u> <u>0</u>
イラカノ かげみは	マーチノ わーひめ	クレカタ かリがね	チー にー

p

<u>1</u> <u>7</u> <u>3</u> <u>6</u>	<u>7</u> <u>7</u> <u>7</u> <u>7</u>	<u>6</u> <u>1</u> <u>7</u> <u>7</u> <u>3</u>	<u>6</u> <u>6</u> <u>0</u>
トー ふーる コ ロ	ナ ゲ ナ の	カ 子 ノ わ が ノ ー ー オ ハ ニ	トー る ー

旅
の
人

田中正名作歌
前阪重太郎作曲

一、雪の雨にそぼぬれて

落葉の丘の樹によれば

蔓いらかの町のくれ方を

所なげなる鐘の音

二、鳴く蟲絶えて木枯らしの

行衛見送る旅の空

影見えわかぬ雁か音に

故郷偲ぶ我が心

明治四十三年北辰會役員

會長	吉村寅太郎	副會長	今井省三	理事	駒井德太郎	委員	吉村政行	山岸勘太郎	講演部	長河合義文	枝光寅太郎	畑山四男美	新木榮吉	學科	長高橋郁治	八波則吉	ウガルフアト	土井滋治	兒玉九十	清水武雄	中性慶	音樂部	長西英盛	東穰吉	雜誌部	長浦井鎧一郎	篠原一慶	清水清之	宗玄順吉	山本勇	弓術部	長相良益次郎	松本誠	關口秀一	劍道部	長上原菊之助	淺野藤四郎	時枝薰	柔道部	長雪山俊夫	藤森千春	津山玄道	野球部	長塩釜正吉	伊原敬之助	楠正路	中山千秋	岸重次	柴野操一	山田卓爾	高山千里	橫山良盛	大野平作																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									</

明治四十二年度北辰會費決算書

(△印は朱書)

科目	區分	豫算額	決算額	流用増額	流用減額	殘額
第一款 經常收入		一、八七〇〇〇	一、八五九八〇	〇	〇	△ 八九八〇
第一項 特別會員寄附		二〇〇〇〇	二〇〇〇〇	〇	〇	〇
第二項 通常會員會費		一、四九二〇〇〇	一、四九二〇〇〇	〇	〇	一、〇〇〇

第三項	預金利息	四三〇〇〇	五九四八〇	〇	〇	〇	△一六四八〇
第四項	春季運動會乘艇申込料	一一〇〇〇	五五〇〇	〇	〇	〇	六五〇〇
第二項	臨時收入	二二〇〇〇	二二〇〇〇	〇	〇	〇	八九九〇
第一項	資金繰入	二二〇〇〇	二二〇〇〇	〇	〇	〇	八九九〇
收入合計		二、〇四七〇〇	二、〇四六九九〇	〇	〇	〇	〇〇一〇
第一款	經常支出	一、六六〇〇〇	一、六四六〇〇七	一〇一、二〇〇	三九六六〇	三三、一三三	一六七〇
第一項	講話部費	一一五〇〇	二二〇〇	〇	八五三〇	〇	一四九〇
第二項	演說討論部費	二〇五四〇	二四〇五〇	五〇〇〇	〇	〇	〇
第三項	語學部費	一七七五〇	二二八〇	三五〇〇	〇	〇	〇
第四項	音樂部費	一五〇〇〇	一〇九〇	〇	〇	〇	四〇一〇
第五項	雜誌部費	四三三六〇	四三三〇〇	〇	〇	〇	一三六〇
第六項	弓術部費	四三三六〇	四二六五二	〇	〇	〇	〇八四八
第七項	劍道部費	九八四六〇	九八四四〇	〇	〇	〇	〇〇二〇
第八項	柔道部費	九七〇〇〇	九七二〇	〇	〇	〇	〇
第九項	野球部費	一八七〇〇〇	一八六六〇	〇	〇	〇	〇三八〇
第十項	庭球部費	一五九二九〇	一五九三五五	〇	〇	〇	〇〇三五
第十一項	フットボール部費	八五〇〇	〇	〇	〇	〇	八五〇〇
第十二項	遠足部費	四二二〇〇	四二二〇〇	〇	〇	〇	〇七九〇
第十三項	漕艇部費	一五九〇〇〇	一八六六〇	二七七〇〇	〇	〇	〇〇三〇
第十四項	春季運動會費	一五〇〇〇	一七七〇	二七二〇	〇	〇	〇

明治四十二年度艇庫改築費借入金償却決算書

收入之部

第十五項	秋季運動會費	一九五〇〇〇	一六八四八〇	〇	二六〇〇〇	〇五二〇
第十六項	會務費	一〇〇〇〇	六七四〇〇	六二四〇	四四二〇	〇六八〇
第二款	豫備費	九一〇〇〇	〇	〇	六二四〇	二八六〇
第三款	端艇新造基金	二二〇〇〇〇	二二〇〇〇〇	〇	〇	〇
第四款	臨時支出	二二〇〇〇〇	二二〇一〇	〇	〇	〇
第一項	端艇新造費補足	二二〇〇〇〇	二二一〇〇	〇	〇	八九九〇
支出合計		二、〇四七〇〇〇	一、九七〇一七	一〇一、二〇〇	一〇一、二〇〇	六九九八三

支出之部

科 目 區 分	豫 算 額	決 算 額	殘 額
第一款 收入	一一〇〇〇〇	一一〇〇〇〇	△一〇〇〇
第一項 入會金	一一〇〇〇〇	一一〇〇〇〇	△一〇〇〇
第一款 支出	一一〇〇〇〇	一一〇〇〇〇	△一〇〇〇
第一項 借入金償却	一一〇〇〇〇	一一〇〇〇〇	△一〇〇〇

寄贈雜誌

校友會雜誌 三十九號、四十號
校友會雜誌 二十一號、二十二號
雄辯 每號
輔仁會雜誌 八十號
校友會雜誌 三十二號、三十三號
校友會雜誌 六號
學友會雜誌 二十二號
學友會雜誌 三十八號、三十九號
校友會雜誌 十二號
校友會雜誌 九號
養德 每號
校友會雜誌 二十四號、二十五號
嶽水會雜誌 四十五號
六條學報 每號
藝文 三號、マ
白樺 一號
校友會雜誌 三十二號
嬌々會雜誌 九十八號、九十九號
校友會雜誌 十二號、十三號
校友會雜誌 每號
華陽

三重第一中學校校友會
京北中學校校友會
大日本圖書株式會社
學習院輔仁會
千葉中學校校友會
青森中學校校友會
石川縣師範學校校友會
山口高等商業學校校友會
飯田中學校校友會
延岡中學校校友會
養德社
第六高等學校校友會
第三高等學校嶽水會
佛教大學王寅會
開城館
白樺編輯部
麻布中學校校友會
福岡縣中學明善校同會
石川縣工業學校校友會
第一高等學校校友會
岐阜中學校華陽會

學友會雜誌 每號
校友會雜誌 十八號、十九號
修養 八號
學友會雜誌 十九號
鯉城 五十號
城北 十八號
學友會雜誌 一號
三田文學 四號
校友會雜誌 十三號、十四號
躬行會叢誌 五十號
會誌 十五號
十全會雜誌 每號
校友會雜誌 每號
學友會雜誌 十七號、十八號
保惠會雜誌 百號、百一號
七星 十七號、十八號
同窓 三號
會誌 十號
校友會雜誌 紀念號
龍南會雜誌 百三十六號
校友會雜誌 十二號
一橋會雜誌 六十一號

札幌中學校學友會
東京高等師範學校校友會
高田中學校修養會
魚津中學校學友會
廣島中學校校友會
東京第四中學校校友會
京都第一中學校學友會
三田文學會
名古屋高等工業學校校友會
廣島高等師範學校校友會
躬行會
柏原中學校學友會
金澤醫學專門學校同會
德山中學校校友會
第七高等學校學友會
松山中學校保惠會
杵築中學校校友會
東亞同文書院同窓會
大阪高等工業學校校友會
金澤商業學校校友會
第五高等學校龍南會
彦根中學校校友會
東京高等商業一橋會

同窓會雜誌 紀念號
水曜會誌 六號
同窓會報 三號
校友會雜誌 廿六號
校友會雜誌 紀念號
和同會雜誌 四十七號
校友會雜誌 三十三號
校友會雜誌 五十二號
校友會雜誌 九號
坂東太郎 五十二號
近松會雜誌 一號
球陽 十九號
報告書
南海 三十二號
學友會雜誌 十九號
六稜 三十五號
白峰 九號
校友會誌 一號

錦城中學校同窓會
京都理工科大學同會
東洋協會學校同窓會
愛知醫學專門學校同會
金澤第二中學校同會
長岡中學校和同會
松本中學校校友會
開城中學校校友會
盛岡高等農林校同會
前橋中學校校友會
近松會事務所
沖繩中學校學友會
安積中學校同窓會
大阪高等商業校友會
新發田中學校學友會
北野中學校校友會
小松中學校校友會
日本中學校校友會

投稿家諸君に告ぐ

今回諸君が投せられし名篇玉稿、机上積んで山を成す。紙面輻輳、次號に譲りたるもの少からず。乞ふ諒察あれ。

委員



投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限る
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず
- 一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論し或は徳義に背くものは一切掲載せず

明治四十三年十二月二十三日印刷
明治四十三年十二月二十五日發行

編輯兼發行者

印刷者

印刷所

發行所

吉村政行

生沼倍男

明治印刷株式會社

同縣同市高岡町九十番地

第四高等學校北辰會

